



# 古城物語

# 1. エスケープ

「コ、コンニャクシャ?!」

「婚約者です」

「誰の？」

「僕の」

しばしの沈黙が俺と周一郎の間に漂った。何かの聞き間違いではないかと、まじまじ周一郎の淡々とした顔を見つめる。

春、三月上旬午後、周一郎の居室。

確かにそろそろ陽気が気持ちに関係する季節ではあるが。

「……お前が女に興味があるとは思わなかった」

というより、仕事以外のことに、というべきか。

「滝さん」

「あ、うそうそ」

周一郎がひんやりとした視線を投げてきて、慌てて前言撤回を試みる。

「俺はただ、お前がどんな顔で申し込んだのかと思ってさ」

それでも二十歳前に婚約者って、どこのお貴族さま……まあ、確かに現在の貴族と言っていいほどの財力と地位は兼ね備えているのか。

「別に、申し込む申し込まないというのではなかったんです」

机の上の書類に再び視線を落としながら、周一郎は感情を含まない声で続けた。

「朝倉家にとっても、工作上必要でしたし」

ひとまとめにした書類を慣れた手つきで茶色の封筒に落とし込む。表に宛先のメモをつけて、処理済みのケースに入れる。続いて次の書類を手取る。この十九歳の少年の手一つで、朝倉財閥の巨額の富と権力は動かされていき、業界の上位から揺らがない。

「それに、どうでもよかったんです。その頃も僕は仕事に追われていたし、結婚相手に悩んでいるほど暇じゃなかったから」

「政略結婚か！」

「それほど甘いものではないですよ」

ちらりと周一郎は魔的な笑みを唇に漂わせた。端正穏やかな容貌が一転して酷薄な印象になる。

「何せ、四年以上、会いにも行かない婚約者ですからね、僕は」

幾分自嘲の響きが滲んだ。

「四年以上も……っていうと、十五歳で？」

「十四歳です」

「……十四歳ですって……相手は文句言わなかったのか？」

十四なんて、世間じゃ中学生だ、将来の展望も何も、相手だって企業のメリット云々を考えて選ぶような年齢じゃない。

「相手は十三歳です」

「……戦国時代だな」

「父親の命令は絶対という家ですから」

「ますますだ」

にしても、最近の十三歳が、そんな大人しくははいはいと従うもんだろうか。

「納得してねえんだろ？」

「…さあ」

周一郎は次の書類に数カ所印鑑を押し、サインを書き入れて首を傾げた。

「不服だとしても通らないでしょう」

「おいおい」

「相手の家は、朝倉家と財力権力とも釣り合っています。海部敏人にとっては有利な縁組みだったでしょうね」

小休止のつもりなのか、手を止めて静かな口調で話し始めた。

「結婚？」

周一郎は突然の話に見ていた書類から顔を上げた。

パートナーであり、義理の父親である大悟は軽く頷き、デスクを離れて周一郎の隣に腰を降ろした。

「永久に独身を通す気はないだろう？」

たかが十四歳の男に独身の何たるかも現実としてはわかっていないはずだが、大悟の口調にはそういう子ども扱いする見くびり感はない。対等の男として、仕事の提案を持ちかけるような表情だ。

「そりゃ、そうだけど」

周一郎は口ごもった。

「でも、ぼくは今、十四、だろう？ 世間一般からすれば、ちょっと早すぎることはない？ あまり目立つのは困るな。仕事がやりにくい」

「仕事のためだと言ったら？」

大悟は煙草に火をつけ、ふ、と薄青い煙を吐き出した。その横顔に周一郎には閃くものがあった。

「海部産業だね？ 最近海外ルートを延ばしてる」

「その通り」

その頃、大悟と周一郎が狙っていたのは、海外へのパイプラインとしての海部運輸の力だった。海部はその名が示すように、古来から海と諸外国を相手取って伸びて来た商人で、業界の中でも人脈を生かした飛躍力が注目されていた。

「朝倉大悟の狙いとしては、あのパイプラインを自分のものにしておきたい、と」

「察しがいいのは有難いね、説明が少なく済む。海部には娘が一人いる。朋子という十三歳の生意気盛りだ」  
大悟の瞳は穏やかな笑みを裏切る冷徹な色をたたえている。  
「どこから聞きつけたのかは知らないが、海部の方でも朝倉家、特にお前に眼をつけていたらしい。朋子をお前が娶ることと引き換えに、朝倉財閥の力を使わせて欲しいと言ってきた。もちろん、こちらが海部の海外への影響力を欲しがっているのを見抜いた上だがね」  
周一郎は苦笑した。『娶る』とはずいぶん古風な言い回しだ。どうせ、海部敏人が口にしたことばなのだろう。事実の表現としては稚拙、実の娘を生贄にする男が言うには、あまりにも美しい。  
「そう」  
周一郎は皮肉な笑みを返しながら応じた。  
「大悟はパイプラインを得ると同時に、海部の口塞ぎもしたいわけだ」  
朝倉家の影に周一郎の存在があるのを知っている者は少ない。広められては人権だの教育関係だので、余計な横槍が入るのは目に見えている。  
「そういうことだ」  
周一郎の鋭さを知っている相手は、本音を見抜かれても動揺しなかった。もちろん、周一郎のそういう『使い方』も考えていなければ、引き取ることはなかっただろう。  
「ぼくなら構わないよ」  
状況を把握してしまえば興味はなくなる。次の書類に手を伸ばす。  
「うっとうしいゴシップ好みの記者に追い回されることがないならね。誰でも同じことだし」  
「そちらの手配は済んでいる」  
大悟は密やかに笑った。  
「じゃあ、話を進めよう」  
もちろん、大悟のことだ、とっくに手駒は動かされつつあるはずだ。  
軽く頷いて、周一郎は確認の済んだ手元の書類を相手に差し出した。  
「じゃ、一緒にこれも進めておいて」  
「……なるほど」  
一瞥した大悟がひやりとした視線で周一郎を見下ろす。たじろぐこともなく、にこりと笑う。  
「海部運輸を利用した場合の、この前のプラン。一応考えておいたよ、シミュレーション程度だけど」  
「進めよう」  
受け取って、大悟はくるりと背中を向けた。

「……直接彼女と会ったのは、その時の一回きりです。その後、海部はドイツへ半永住化したような状態になってしまったので、僕も訪ねることもなくて」  
ふい、と周一郎は遠い目になった。  
「それで、ドイツへその婚約者を訪ねて行こう、ってわけか？」  
「そうです」  
「でもさ……」  
冷めたコーヒーを呑み込む。香りはまだ消え切っていない。  
「どうして今頃、そんなことをする気になったんだ？ 四年以上も放っといたんだろ？」  
と、なぜか周一郎は少し赤くなり、席を立てて背中を向けた。  
「ただ……気になって……」  
窓の外に広がる庭を見つめながら、呟いた。  
「え？」  
「いえ」  
淡々とした声が、きっぱり、呟きを否定するように響く。  
「実は海部運輸の動きが思わしくないので、その調査、といったところですよ」  
「ふうん」  
やっぱり仕事絡みなのか、そう頷いた俺を、窓辺で半身振り返った周一郎が、何か言いたげに見やってくる。  
「ん？」  
「滝さん……今、お忙しいでしょうか」  
「お前な」  
それは何か、婚約者のいる男が、彼女一人どころか合コンの声一つかからない、春休みだっなのに予定一つもない男への嫌みかそれとも挑戦か。忙しければ、こんなところでのんびりコーヒー片手に世間話をしてるわけはないだろうが。  
残ったコーヒーを一気に流し込む。  
「忙しそうに見えるのか」  
口を尖らせかけた俺に、なお少しためらってから、周一郎は続けた。  
「……ドイツ」  
「は？」  
声が遠い。少し身を乗り出す。  
「ドイツに」  
「どいつに？」  
文句を言えばいいのかってことか？  
「……一緒に来ませんか？」  
「へ………わっ！」  
どすん！  
思わぬ一言に、呆気にとられた俺は一気にソファから滑り落ちた。

「一緒に来ませんか、だぞ！」  
俺は身を乗り出した。  
「『あの』周一郎が、俺に、一緒に来ませんか、だぞ！」

お由宇の家の居間、相対していたお由宇は上品に眉を寄せて、俺を押し戻すまねをしながら穏やかに続けた。  
「そんなに乗り出したら」  
「乗り出したらどう…っ！」  
どごっ。  
「落ちるでしょ」  
お由宇は机の下にめりこんだ俺を覗き込んだ。  
「確かに、周一郎があなたを誘ったのは大きな進歩だけど」  
「だろ！ なっ、なっ」  
もぞもぞと体を起こしながらにやにやする。ベートーベンの第九でも歌ってやろうか、覚えてもないのに、そんな気分だった。完全に浮いている、浮かび上がってしまっている、おまけにそれを止める気はなかった。  
「でも、私としては、その前のセリフの方が気に入ったわね」  
「ん？」  
「ただ気になって、という方」  
お由宇は感慨深げにソファに身を沈めた。細めた目の奥でさざ波のような微笑が翻る。コーヒーに手を伸ばし、無地の白いカップを指で包み込む。  
「そうか？ 周一郎も女に興味が出て来たってことだろ？」  
「馬鹿ねえ」  
お由宇は甘い声で俺をけなして、ゆっくりとコーヒーを含んだ。  
「そっちこそ、周一郎の一大進歩じゃない」  
「どこがだ？」  
意味がわからず、焦れて唸る。  
「今まで、周一郎ははっきり言って、あなたしか目に入ってなかったのよ？」  
「？」  
「自分の世界に初めて踏み込んで来たあなたを不思議がり、試してみて、失いたくないと思い、あなたが自分の側に居てくれるのを信じた。周一郎の『人』に対する関心は、いつもあなた中心だった」  
お由宇は優しく唇を笑ませた。  
「で、今度、やっと他の人間が目に入ってくるようになった、というわけ。今までは生きている人間だと認めていなかった、自分の世界には意味のない人形だと思っていた周囲が、あなたの出現で不意に意味を持ち始めた、と言ってもいいかもね。その手始めが、四年以上放っておいた婚約者に会いに行くということ……けれど、一人ではまだ『こわい』から、あなたについてきて欲しかった……そういうことでしょ？」  
「あのな、お由宇」  
相手をねめつける。  
「俺にわかるように説明してくれるとありがたいんだが」  
「あら」  
お由宇は俺のカップと自分のカップを持って流しに立った。  
「そうね…」  
水音に混じって、お由宇の声が妙に響いて聞こえた。  
「やっと『安心した』ってこと、かな」  
「安心？」  
なるほど、と俺は頷いた。それなら少しはわかる。  
「それで、どうするの？」  
水仕事を手早く終えて戻ってくるお由宇の手には、湯気の立つ俺のカップ。ちょうど次の欲しかったから、俺は喜々としてカップを受け取った。  
「どうするって」  
「ドイツへ行くの？」  
「ああ。周一郎も言ってくれてるし、費用は朝倉家持ちだし、外国だぞお！」  
思わず声が弾む。  
「そうね、ちょうど休学中だし。留年もしたことだしね」  
「うぐっ」  
思わずむせて咳き込む。  
そうだった。きれいに全く完全に、これ以上ないぐらいに忘れていた、俺は留年したんだった。  
「お由宇…」  
恨めしく睨んだところで、出席日数ぎりぎりのくせして、悠々いつもトップクラスに居るお由宇に堪えるはずもない。涼しい顔で続ける。  
「いってらっしゃい、気をつけてね」  
「ああ、気をつける」  
大丈夫だろう、俺の厄介事吸引癖も、さすがにドイツまでは追いかけてはこないだろう。

## 2.怪我のし始め(1)

日本航空北回りのヨーロッパ線でアンカレッジを経て、西ドイツの北の玄関ハンブルク、少し足を伸ばしてフランクフルトまで行って、約十九時間の空の旅……そう言われたのは一昔前。

現在ではドイツ、フランクフルトまで十二時間二十五分、そこからルフトハンザ・ドイツ航空で一時間五分でハンブルクに着く。

「あたっ…」

俺はついに音を上げた。

飛行機の席というのは、TVで見るほどゆったりものんびりもできない。まあ、エコノミーだから仕方ないといえれば仕方ないのだろうが。

本当ならもっと上のクラスで飛ぶことの方が多はずだろう周一郎は、俺に合わせたのか別の意図があったのか、ぎゅうぎゅう詰め感のある座席に平然と座り、俺の隣でさっきまで書類を捲っていた。

今は例の、時折見せる無防備な顔で眠っていて、このドイツへの旅の時間をひねり出すための苦勞を思わせた。サングラスを外した顔が、機内の薄暗い光の中で妙に幼く見える。

(疲れたんだな)

ずり落ちかけた毛布を直してやる。

元々あんまり丈夫じゃない方だし、俺みたいに再三再四、厄介事と追いかけてこをしたいわけじゃないだろう。いやもちろん、俺もしたくてしているわけじゃないが。だが、周一郎の本分は、朝倉家の当主なのだ、ごたごたなどないまま、仕事一筋に没頭していたいはずだ。

「ん…」

「ととっ」

周一郎が身動きして、慌て気味に身を竦めた。

危うく起こしちゃうところだった。

持って来た本は読んでしまったし、他にすることもなし、大人しく座席に埋まり込む。

来る前に聞いた、周一郎の婚約者が住んでいるという場所を想像する。

海部敏人は、以前からドイツに憧れていたらしい。青年時代の彼の憧れは、主として古い城に集中していた。幾世紀も、人々の営みの中で手を加えられ育て上げられ、時に傷つけられ、また新たな手が加わってきた城々。日本の城にはないロマンをかきたてられたのか、海部は財を成すと、ドイツの古城を丸ごと手に入れ、そこを別荘化したのだった。

『レモタント・ローゼ城……「二度咲きバラ」城、と言うんです』

周一郎のことが蘇る。

小さな城だが、かなりこまごまと各時代の持ち主が手に入れたために、マニア達がよだれを垂らしそうなものになっており、ライン川沿いにあると言う。

ライン川、特に、『ローレライ』で有名になったライン流域のマインツからコブレンツ、約65km間は、『ロマンティック・ライン・コース』とも呼ばれ、数々の古城と美しい葡萄畑が広がる。現在では『ライン渓谷中流上部』として世界遺産にも登録されている場所だ。

その中のブルク・マウス（ねずみ城）とブルク・カツ（猫城）と呼ばれる二つの城の間、対岸のラインフェルズの古城より少し外れた位置に、海部敏人のレモタント・ローゼ城はある。

ラインフェルズの古城は、歴史的な戦いのために廃墟となっはいるが、ラインの流れを見渡すのに絶好の場所とされている。対するレモタント・ローゼ城は蛇行するライン川谷岸よりやや奥まっていることもあり、対岸にあるラインフェルズ城ほどは知られていない……と、旅行ガイドには書かれていた。

「…っ」

ふっと何の前触れもなく嫌な予感がした。

無意識に体を起こして臨戦体制をとるのは動物の本能なのか、抜けに抜けている俺でも、なぜかこういう予感によく当たる。

視線を感じて周一郎の肩越しに数席離れた向こうに目をやると、柔らかい栗色の髪の毛、アジア系らしいがいささかヨーロッパ風の見事に整った顔立ちの女性が、にっこりと笑いかけて来る。きれいな茶色の瞳、思わずぼかんと見とれると、相手はくすりと上品な笑みを重ねて軽いウィンクを投げて来た。

「へ？」

俺か？ いや、俺にあんなきれいな女性がウィンクしてくれるはずがない。いや、ひよっとしたら何か気づかずに笑いを誘うようなことをしているのか？

思わず振り返って、他にウィンクされるような乗客がいないか確かめる。自分の周囲をきょろきょろ見回し、おかしい状態になってないか確認する。

どうも何もないようだ。

顔を戻すと、相手はもう正面に向き直っている。横顔もまた、品良く整っている。なのに、その横顔にまた、妙な感覚、厄介事の匂いがした。

(あれが?)

「まあ…あれだけの美人なら、そりゃ揉めることも多いよな…」

俺は小さく呟いて、彼女同様、そっと座席に座り直した。

ハンブルク国際空港。

「滝さん」

周一郎の呼びかけに振り返る。

焦げ茶色の三つ揃いに磨き抜かれた革靴、整った容姿に濃い色のサングラス、これ以上、薔薇を背負わせようがべんぺん草を背負わせようが決めようがないほど決まった姿で、携帯をポケットに片付けながら淡々と続けた。

「もう迎えが来ているそうです」

「へえ」

どこにいるのだろうとキョロキョロ周囲を見回す。

光をふんだんに取り入れられる天井、がっちりした金属の構造物、世界でも有数の航空機メンテナンス会社本拠地でもあるこの空港は、ドイツの空港では最も早く開港したらしい。ドイツ国内では五本の指に入る賑わいだそうだが、俺の目は正直者で、海部からの迎えの男よりも、さっき飛行機で会った女性の方を先に見つけてしまった。濃いワインレッドのワンピースに栗色の髪が明るく流れている。上品な横顔は今は少し緊張感があり、やっぱり彫刻のようにきれいだった。

「滝さん、何を見てるんです？」

俺の視線を辿ったらしい周一郎が一瞬動きを止める。

「あれは…」

「え？」

思わず相手を振り向き、周一郎の瞳が奇妙な色をたたえているのに気づいて、慌ててもう一度女性を振り返る。

だが、いつの間にか女性は姿を消している。目立つはずのあのワンピースも、空港を行き来する雑多な人混みに紛れてしまったようだ。

「なんだ？ 知り合いか？」

「いえ、知り合いというほどでは」

周一郎は奥歯に物の挟まったような言い方で首を振り、

「好みの女性ですか？」

「うん、まあ」

にちゃりと崩れてしまった顔のままへらへら笑っていると、唐突に後ろから柔らかなアルトの声が優しく尋ねかけてきた。

「Verzeihung…」

「うわっ！」

俺が飛び退いたのに相手も驚いたのか、しばらく澄んだ茶色の目を見張っていたが、気を取り直したように周一郎に向き直った。見覚えのあるワインレッドのワンピース、あの美女だ。

「Was？」

周一郎は相手の美貌に頓着した様子はない。むしろ、どこかうんざりした、うっとうしそうな表情になったが、それも一瞬、親しげに問い返す。

美女は微笑み、蕩けるようなアルトで続けた。

「Ich freue mich sehr, Sie kennen zu lernen, Ich heiÙe Kamura.」

「香村さん？ 確か、海部さんの秘書の方ですね」

周一郎がちらりと俺を見やり、唐突に日本語に戻す。

「はい、香村玲奈と申します。社長代理としてお迎えに上がりました」

相手の女性も平然と日本語に切り替える。

てやんでえ、日本語をしゃべれるなら始めからそうしろってんだ。

エセ下町なまりで心の中で毒づいたものの、美女相手にそんなののしりなどとてもない。大人しく2人の会話を聞く。

「ありがとうございます」

周一郎はにこやかな営業スマイルを広げた。

「ああ、彼が僕の友人の滝さんです」

「あ、滝志郎です、どうも」

どうもって何だどうもって。

もう少しまともな挨拶できなかったのかと悔やみつつ、ぺこりと頭を下げる。

玲奈はくすくすと深みのある笑い声を響かせ、俺達を空港の外へ招いた。荷物をお持ちしましょうと言われたがさすがに辞退、周一郎の分のスーツケースと自分の着替えを詰めたキャリーカートを引きずって行く。

道路に待っていたのは磨き上げられて傷一つない黒のパンツ、乗り込もうとすると、わあっと空港内で騒ぎが起こって思わず振り返った。

「あれ…？」

人が見る見る集まっていく、数人が駆け出し、空港職員が駆けつけ、警察のような男達も走って行くその場所は、さっき玲奈がいたところじゃなかったか。

「関係ないことですからね、行きましょう」

有無を言わせぬ冷やかさで玲奈が言い放ってドアを開ける。降りて来た運転手が興味深そうにスーツ姿の周一郎と年期の入ったセーターとスラックスの俺を眺めながら、トランクに荷物を片付けてくれる。

俺に続いて周一郎が乗り込み、玲奈も助手席におさまると、運転手は滑らかに車を発進させた。

「けれど……よく覚えていて下さったのね、朝倉さん」

嬉しいわ、とそれは語られなかったけれど、華やいだ声音を玲奈が響かせる。

「周一郎で結構です」

隣の少年は愛想も糞もない。

こんな美女を相手にちっとは笑ってみようかという気にもならないのか。これだから端整な奴はむかつく。向けられる好意を当然だと思ってる気がする。俺なんかな、笑ってもらうためにいろいろ大変な心身ともの奮闘を必要とするんだぞこら、と口に出さない俺の罵倒に気づいた様子さえなく、周一郎は淡々と返す。

「一度見た人は忘れない主義なんです。後で困ったことになりますから」

嘘つけ、一度俺のことを忘れたらどうが、と胸の中でののしった。それとも、忘れても困らない相手だったからかい。

「特に仕事に関係している場合は」

さらりと付け加えた一言は、玲奈にとって特別な意味があったらしい。

「そう。『氷の貴公子』の噂通りですわね。仕事に関係した人間にしか興味を持たない。誰にも心を許さない…

」  
考え込んだような声が微かに憂いを帯びる。  
「周一郎さんは、あの時お幾つでしたの？」  
今度の問いかけには、妙に母親じみたものが漂っていた。  
周一郎は微かに嘆息し、初めて見る、人の心をその場で凍てつかせるような皮肉な微笑に唇を歪めて、静かに応じた。  
「十四歳かな。その前の方がいいですか」  
「、…」  
不自然な沈黙が車の中に膨れ上がった。手で触ったらわしわしと手に食い込みそうな荒々しさだ。  
やがて、固い声でアルトの響きが返ってくる。  
「結構よ」  
「……」  
どうやらこの二人には、ただの知り合いどころじゃない、俺の知らない、知らない方がいい複雑な関係がありそうだ……それもかなり楽しくない、過去。  
「あ、ド、ドイツって」  
突き刺さってくる沈黙に耐え切れず、俺は急いで話のネタを探した。  
「古城で有名なんですね」  
「ええ、よくご存知ですわね」  
他にもワインやソーセージなどもありますけど、と気持ちを切り替えたのか、玲奈は明るく続けた。  
「社長の『レモタント・ローゼ城』の周囲にもたくさんのお城がありますわ」  
歌うような調子で継ぐ。  
「ライン川流域なら、オーストリア皇帝から宰相メッテルニッヒに贈られたヨハニスベルク城、モイゼトルム、ラインシュタイン、ライヒェンシュタイン、ゾーネックの城趾、川の中央に立つプファルツの古跡、グーテンフェルズ・シェーンブルクの廃墟、ブルク・カツ、ブルク・マウス、ライフェルズ、リーベンシュタイン、シュテレンベルクの古城跡、マルクスブルク城、ランエック、シュトルツェンフェルズ……ライン下りで最も美しいと言われるマインツからコブレンツにかけて、20以上の古城がありますわ。時期がもう少し遅ければ、ライン下りも楽しんで頂けるんですが、観光船の運行の時期を外れてしまっていますから」  
立て続けに上げられた城の名前は、同じような音が繰り返される古い詩のようで、ぼんやりと聞き流しているうちに終わってしまう。  
「す…凄い量ですね」  
何とか相づちを打つと、景色が美しいというだけでなく、それだけここが要所であったということなんですよ、と返されて、改めて『城』である意味を感じた。  
そうか、そうだよな。  
確かに居宅として造ったのもあるかもしれないけれど、写真や画像で見たドイツの城はがっちりごつごつした建物も多かった。フランスの瀟洒な城よりは、確かに戦で使われたものという感じがしたのを思い出す。  
『古城』なんてロマンチックなことばだけど、つまりそれは、そこでたくさんの血が流されたということでもあるんだ。  
「そんな所で暮らしてるのか…」  
俺だったらあまり安眠できそうにないが、金持ちの考えることはまた違うんだろう。  
車はいつの間にかアウトバーンに入っていた。車窓の景色が吹っ飛ばすように流れていく。速度の制限が緩やかで、時速100kmでもどンドン追い抜かれていく、そうガイドブックに書かれていた。  
こういうのはすくとんと頭に入るんだが、どうして講義はあも頭を擦り抜けてってしまうんだろうな。  
(留年、だもんな)  
やっぱり、納屋教授の講義の単位が取れなかったのが致命傷だった。……まあ、あれで単位がとれたら、それこそ机でもベンツでも食ってやるが。  
「レモタント・ローゼ城は、守りの城でも攻めの城でもありませんでした。作戦本部を収容していたこともあるようで、戦線から少し離れた予備的な働きをしていたようです。中世期には諸侯が入れ代わり立ち代わり住んでいたようですわね。十六、七世紀の宗教戦争、三十年戦争、十七世紀末のフランス国王による放火、十八世紀のフランス革命の際の革命軍による破壊……数々の波乱の時代を潜り抜け、比較的美しいまま残ってきました。もちろん、傷一つないと言えは嘘ですけど…」  
玲奈は肩越しに微笑を投げて来て、艶やかな唇を綻ばせた。周一郎とやりあった時の冷たいイメージは、跡形もない。  
「いろいろな破壊の度に、修復がユーモアをもって行われました。童話の中にあるような、ちょっと不思議なお城、と申しておきますわ」  
「はあ」  
頷くしかない俺の視界の端で、周一郎はなぜか沈んだ横顔を見せていた。

## 2. 怪我のし始め(2)

「着きましたわ」

奇妙な沈黙が続いた車で、ようやく深いアルトの声が響いた。

「う、わ」

促されて車から降り、啞然とする。

舗装された道は止まったベンツの数m先から細くなって地道になっている。緑が鮮やかに萌え始めた木々が両側を飾り、道の先は古びた黄褐色の石段へと変わっていた。ところどころに深緑の草が生え、周囲を縁取る黄緑の木々の色に遮られながら、石段はじりじりと上へと伸び上がっていき、ゆるやかに蛇行して斜め上にある城へと続いている。

城は凄まじいまでにながちりとした石造りのものだった。そびえ立つ尖塔はあくまで高く天を目指し、強固な壁面はチンピラ強盗なぞ触れることも許さないと言いたげに地面に根を生やしている。ところが、幾つか暗い口を開けた窓には、妙に愛らしい感じの浮き彫りが施され、一部には改装を施したのか、繊細な出窓が取り付けられていた。中世と近世が微妙に入り交じってかろうじてバランスを保っているような、確かに不思議な雰囲気のある城だ。幼稚園ぐらいの子どもが、TVと物語と想像をごっちゃにして描けば、こんな感じになるかもしれない。

(童話の中にあるような城、か)

ことばで聞けばメルヘンだが、童話の中に出て来る城というのは、結構ややこしい役割を担っていたり、不気味な仕掛けがあったり、怪物が潜んでいたりするものじゃなかったか？

「来るまで入れるのはここまでです。少し歩いて頂けますか？」

玲奈が促した。

「あ、はい」

ベンツは俺達が降りると、するすると後じさりして去っていく。

俺は理由なく玲奈の高いヒールに目をやった。あんな靴で、この石段を上っていこうというのは、よっぽど行き来し慣れているか、チャレンジャーかだよな。

「？」

玲奈に着いていこうとして、周一郎が車を降りて数歩進んでから、固まったようにそこを動かないでいるのに気づく。

「周一郎？」

サングラスを外し、食い入るように城を見つめている周一郎の顔には驚きと賛嘆、それから奇妙な強張り… 畏怖、のようなものがかわるがわる、現れては消え、消えては現れている。

「おい？」

「、はい」

物に憑かれたような目で一瞬こちらを見た周一郎は、急に寒さを感じたようにぶるっと体を震わせた。それでもまだ、半分夢をみているような手つきでサングラスをかけ、ゆっくりとこちらへ歩いてくる。

「どうした？」

「……」

「気分でも悪いのか？」

「…いえ」

周一郎は俺を見上げて、珍しく少し微笑んだ。硬い、能面のように生氣のない笑い方だ。対照的に表情を消したサングラスの奥の瞳が、どこか不安げに見えた。

(何かに気づいた？)

もう一度、城とそこへ続く石段、しとやかに高いヒールの足下をよろけさせることもなく上がっていく玲奈のきれいな後ろ姿を眺めた。

どこにも危険な物はないように見える。見えるが、俺より周一郎は鋭いのだ。

「…滝さん？」

「あ、はいはい」

どうなさったの、と呼ばれて、俺はへこへこと玲奈の後を追った。

がっちりした石段は、遠くから見ているよりも数段安定した力で足を受け止め、同じ力をじんわりと返す。石段というより岩棚に近い気がする。ちょっとしたトレッキングだ。あたりの空気が風が薙ぎ払い、肌寒さに少し身を竦めた。

基本的にドイツの気候は夏と冬しかないそうで、気温も日本よりわずかに低い気がする。それでも、ライン川流域というのは、ドイツの中でも、明るく温暖なところにあたるそうだ。

石段を上がっていくにつれて周囲の景色が広がってくる。起伏の豊かな、鮮やかな緑色に身を染めつつある自然が、俺達を押し上げていってくれるようだ。川が近いせいもあるのか、見上げた空が大きくて高い。

昔、ここを闊歩した武人達も、甲冑を鳴らしながら、こうやって空を見上げたんだろうか。戦いがいつまで続くのかとか、過ぎて来た戦で失ってきた者のこととか、いつも気合い充分というわけではなかっただろう、へとへとになってこの石段を戻ったこともあっただろう、その時にもやはり、何かを求めて見上げたこの空はこんなに高く青かったんだろうか。

「あははは……だめよ、カツツェ！」

突然、場違いな華々しい笑い声が響いて、視線を戻した。

「朋子様」

先に立っていた玲奈が、十六、七に見える少女に声をかけていた。軽く息を切らせていた周一郎が俺の隣で立ち止まり、同じようにそちらを見上げる。

少女は、俺達をちょうど見下ろすあたりにある、階段の途中にしつらえられた四阿のようなところから出て来たらしかった。薄茶の猫が腕の中でじゃれついて甘えている。

「遅かったから見に来ちゃったわ。その人が朝倉さんでしょ」

いたずらっぽく笑って、少女は大きな目を見張った。白い肌に薄い焦茶の虹彩がよく似合っている。

「側の、誰？」

「朋子様！ 失礼ですよ！」

「だって知らない人だもん、名前も知らないのにどうしろって言うの？」  
おどおどしたところなど一切持ち合わせがない、小生意気な表情で少女は俺を眺めた。なるほど、これが周一郎の婚約者ってやつか、と頷いたその矢先、  
「あ、だめ、カツェ！」  
どうしたはずみか、小猫が身をもがき、ずるりと腕から滑り出た、と思う間もなく、俺の立っている所から数歩後ろへ零れ落ちた。  
「カツェ!!」  
「っ」  
とっさに振り返りながら、薄茶の塊を受け止めようと手を伸ばす。いや、わかってる、相手は猫だ、くるりと体を捻って無事に地面に降り立つはずだ。だが、落ちたものを受け止めようとしてしまうのはもう、俺の本能に近い、それがたとえ、自分の能力以上のことであったとしても。  
「滝さん!」「滝さんっ!!」  
玲奈と周一郎の警告はちょっと遅かった。  
「へ……うわあああっ!」  
石段はしっかりしていた。十分な幅はあった。けれど俺の靴の下には砂ももちろんあって、体を奇妙に傾けた俺は足下が滑り、空中へ放り出されたと思う間もなく、一気に十数段階を転げ落ちていた。  
目の前に星が飛び、カラスがあほーと鳴き、ついでになぜかエイリアンだのゾンビだのが並んでスキップをしていく場面が入り交じってちかちかする。もろに打ち付けた背中への痛みと足の痛みが、ようやくのろのろと脳味噌に達する。  
「い…たあ……っ」  
「滝さん!」  
周一郎が駆け下りて来て、ぶっ倒れたままの俺の側に膝をついた。  
「大丈夫ですか?!」  
「た…ぶん…」  
「滝さん!」  
周一郎の後ろから、顔を強張らせた玲奈と朋子が覗き込む。  
「滝さん、どこか…」  
周一郎が俺のことで青くなっているのを見るのは妙に気持ちよかったが、あんまり心配させてやるのも可哀想で、もそもそと起き上がって首を振ってみせた。  
「大丈夫大丈夫、それより猫、と…」  
みいみいとか細い声を上げて、猫は俺の腹辺りに爪を立てている。  
「よしよし、怖かったんだよな……いっ」  
立ち上がりかけた俺は、ずきん、と頭の天辺まで駆け上がった傷みに思わず眉をしかめた。朋子がびくりと体を引き攣らせる。  
「人を呼んで参ります!」  
察した玲奈が急ぎ石段を駆け上がっていく。  
「…驚かさないで下さい」  
ほうっ、と重い溜め息をついて、周一郎が唸った。額に薄く汗がにじんでいる。本当に焦ってくれたらしい。  
「そうヤワじゃないさ」  
にやにやしなから言い返すと、  
「これ以上、お人好しになってもらっては困ります」  
猫を助けるために階段から落ちるなんて。  
「おい」  
「滝さん一人居るだけで、もう十分に厄介なんですから」  
しみじみ呟かれて、俺はがっくりした。

### 3.聖少女(1)

海部敏人は、自分の娘が、大切な婚約者の友人、つまり俺に怪我をさせたことを平謝りした。  
「さあ！ 朋子！ お前も謝るんだ！」  
僅かに暖房が入っているらしい城内の、幾つかある応接室の一つで、俺と周一郎は敏人親子に向き合っている。

。 踝まで埋まりそうな絨毯が広々とした部屋に隅から隅まで敷き詰められ、壁には数々の絵画とタピストリーが所狭しと飾られている。応接セットは決してこじんまりしていなかったが、それでも部屋の大きさから言えば、ほんの片隅に置かれているという感じだ。窓から差し込む夕方の光は弱すぎて、シャンデリアの灯に追われている。

「つつ」  
「痛いですか？」  
「いえいえ、どんでもない！」  
俺は駆け上がった痛みにひきつりかけた顔を無理に笑わせて、左足首に湿布して包帯を巻いてくれている玲奈に応えた。美人の前では、どんな情けない男でも英雄になれる。俺も例外じゃない。  
「骨は折れていないようですけど」  
「折れてても大丈夫です！ 俺の足なんか、そのへんのボンドでくっつきますから！」  
「ま…」  
請け負った俺に、玲奈はふんわりと微笑した。思わず見惚れてしまいそうなきれいに澄んだ茶色の瞳、ぽかんと開いた口からよだれが垂れそうになって、慌てて目を逸らせる。  
「ほら！ 朋子！」  
ごま塩まじりの短い顎髭と同色の髪をした敏人は、俺の怪我の事より、周一郎の機嫌を損ねたのではないかと焦っているようだ。へつらうような目で、表情を変えずにソファにゆったりと腰掛けている少年を見つめ、自分のことばに何の反応も見せないのに苛立ったふうで、またもや娘を叱りつけた。  
「朋子！」  
「あたしのせいだけじゃないもん」  
俯いて、薄茶の猫を抱き締めていた朋子はぽつりと応えた。口調の暗さに興味を引かれたように、周一郎が視線を動かす。  
「カッツェが勝手に」  
「いつまでそんな子どもじみたことを言ってる!!」  
敏人は声を荒げ、怒鳴りつけた。身につけた上品そうなセーターとスラックスの内側から、叩き上げのしぶとさみtainなぎらぎらしたものがにじみ出て来る。  
「仮にも婚約者のご友人だぞ！」  
ご友人。えらく持ち上げられた。だが、朋子には不服だったようだ。  
「婚約者なんかじゃないもん…」  
小さな呟き、きらりと周一郎を見据えた瞳が猛々しい光を宿す。  
「悟さんから引き裂いたくせに!!」  
「朋子！」  
「おとうさんなんて大嫌い!!」  
朋子はぱっと席を立ち上がり、あろうことか猫を敏人に投げつけて、あっという間に部屋を飛び出していった。放り投げられた薄茶の小猫が、怖かったのだろう、敏人の顔に爪を立てる。  
「うわっ！」  
敏人はぐい、と小猫の首を引っ掴んだ。高々と手を振り上げ、思い切り小猫を床に叩きつけようとする。  
「げ！」  
俺は思わずその下に飛び込んだ。  
「きゃ！」「お！」「ってえっ！」  
玲奈の悲鳴と敏人の声、突っ込んで足に走った痛みに声を上げる。驚きに手を放したと敏人の手から、ふわりと飛んだ薄茶の小猫が空中で体を捻って、床にひっくり返った俺の胸に降りる。  
「な、何を！」  
「猫にあたることないでしょうが！」  
みゅうみゅうとパニックになって胸にしがみついた小猫を抱えながら、俺は敏人に噛みついた。  
「いくら絨毯が敷いてあっても、叩きつけられたら怪我するじゃ…っ…」  
沈黙にはたと我に返る。  
しまった。またしなくていい事をしたのか。  
「えーと……怪我するじゃ……ないんでしょうかね」  
もぞもぞと続けると、敏人が冷たい目の色で見下ろしてきた。  
「…失礼だが、それは我が家の猫だ。余計なお節介は…」  
冷ややかに詰られかけたのを、より冷たい声が遮った。  
「海部さん」  
「は…」  
周一郎が静かに続ける。  
「よろしければ、お話ししたいことがあるんですが？」  
「え、は、はい」  
敏人はぎくりとした顔で慌てて周一郎に向き直った。おどおどした対応を労る様子もなく、周一郎が淡々と目の前のソファを示す。自宅なのに、まるで周一郎のオフィスに呼びつけられたように、敏人が急いで腰を降ろした。  
「まず、婚約についてですが」  
「ちょ、ちょっと待って下さい」  
うろたえつつも、海部はうさんくさそうな視線を小猫を抱えて立ち上がる俺に向けて来る。  
「香村はいいとして、この方は」  
周一郎は冷ややかに笑った。

「彼は僕の友人であり、アドバイザーでもあります」

「は？」

思わずそちらを振り向く。何の冗談だそれは、と突っ込みたくなった俺を、敏人に向けたと同じような冷やかな視線で射抜いて、

「様々な決断に対して、よい意見を聞かせてくれます」

ですよね？

見えない声が同意を迫った。はっとして大きく頷いてみせる。

「あ、あ、うん、まあ、そう、だよな？」

「そ、そうでしたか、失礼致しました」

目の前で敏人は赤くなったり青くなったりしながら、俺に謝った。

これってかなり気分がいいな？ 見下げてきた相手に印籠を出すとか、間抜けなふりをしてたけれど実は天才とか、何かそういう類の気持ち良さだ。

「ふふふ…」

いささか怪しげな笑いを漏らしながら、周一郎の隣に腰を降ろす。胸に抱えた猫が『隠された天才』には不似合いかも知れないが、そこはほら、昔から秘密結社の首領とかはでかい宝石を嵌めた指で膝の猫を撫でてるとかあったはずだ、うん。

俺が妙にふんぞり返っているのをちらりと横目で眺めた周一郎は、軽く溜め息をついた後、至極あっさりと言いつつ放った。

「婚約を解消したいのです」

「ええっ！」

晴天の霹靂、道を歩いていたら目の前に宇宙人と宇宙船が突然落っちてきたばかりか、『ナカヨクシマシヨ』と握手を求められた、そんな顔で敏人は俺を見たが、いやいや俺のせいじゃないって。

「ご存知の通り、この婚約は海部運輸と朝倉財閥の連携を意図している」

周一郎はサングラスを指先で直した。そこにあるのは少年の顔ではない、感情を一切含まない企業人としての顔、朝倉家の若き当主の顔だ。

「朝倉家は海部運輸の海外へのパイプと機動力を、海部運輸は朝倉家の財力を必要として、互いの了解の元に作り上げられていた関係だ」

「…あまりにも直接的ですな…そもそも」

敏人は白い顔で唸った。

「僕とあなたの間で、センチメンタルな慰めあいは不要でしょう」

懐柔しようとする敏人のことばは周一郎に切られた。

「…言ってしまうえばそうですが……どうして急に？」

「海部運輸の実情を調査しました。ごく最近、ヨーロッパのパイプを立て続けに二本失っていますね？」

「それは……あなたもご存知のはずだ、『SENS』がらみの一件もあって」

「そればかりか、それを取り返す動きもなく、新たなパイプの設置も見られない」

ああ、なるほど、京都の一件がまだ尾を引いている分野があるのか。

俺の顔を待たわけてはいないだろうが、周一郎はワンクッション置いた後でことばを続けた。

「事業状況を分析してみたが、発展性を欠いている。打てる手も考えてみましたが、社内の人材資材ともに不足しています。海部運輸はどちらかという、先行きが見えた企業だという判断です」

「いや、それは」

敏人は疲れが見え始めた顔で遮ろうとした。だが、周一郎は止まらなかった。

「朝倉家が必要としているのは、海外への発展性を持ったパイプだ。海部運輸がこういう状態では役員会も顔がない。朝倉家としては手を引く事を考えざるを得ない」

「し、しかし」

「社長、お話しされた方が良いかもしれませんが」

玲奈が敏人を振り向いた。

「この方は『氷の貴公子』、誠実さや情愛には無縁の方です」

「い、いや、それはまずい、まずい…」

唸った敏人は眉を寄せ、何かを思いついたのか、居直ったように周一郎を睨んだ。

「朋子はどうしてくれんだ？ あれは四年以上、君を待たされておる」

やぶれかぶれの横柄な口調だった。

「すまないとは思いますが」

周一郎は薄い皮肉っぽい笑みを唇に浮かべた。サングラスの奥の瞳がまた温度を下げてどきりとする。

「もともと、そんなにきれいな話じゃありません」

「しかし娘は」

「本田悟のことは如何ですか？」

「！」

敏人がびくんと体を竦めた。

「そこまでご存知でしたの？」

玲奈が開き直ったように周一郎を見据える。澄んでいた茶色の瞳が妙に禍々しい色をたたえ、わけもなく化け猫騒動を思い出した。ざわざわと這い上がって来る嫌な予感に、軽く体を震わせる。

「…朝倉さん」

敏人が疲れた声を出した。

「こうなったらお話ししましょう。実は、私は何者かに命を狙われているのです」

(来たっ！)

ほらほら出て来た、おかしいことが。

溜め息まじりに周一郎を見やる。

ドイツまで来て厄介事に引っ掛かることはないと思うのだが、『厄介事』はよっぽど俺に惚れ込んでいるらしい。飛行機内での嫌な予感はいったいこれだったのかもしれない。

「お聴きしましょう」

周一郎は動じた様子もなく促した。

「……ってことは」

俺達は与えられた寢室に居た、というより、俺が周一郎の寢室に居た。旅の疲れと緊張のせい、例の通り、周一郎は気分が悪くなり、やっとベッドへ転がり込んだのだ。

「その本田悟っていうのは、海部朋子の恋人だったわけか」

「そうです」

額から目にかけて濡れタオルを当て、ベッドに横になったままの周一郎が頷いた。

「でも、一年前といや、もうお前の婚約者だったんだろ？」

「名前だけのね。本田悟はその頃、ドイツに留学していたんです。二人は出会って一目で恋に落ちた…」

「アルトハイデルベルクだな」

本田悟は激しい性格の男だった。朋子より数歳年上だったが、どうしても朋子と一緒にいられないと知ると、朋子を攫っていこうとまでした。だが、海部の力は彼の留学先にまで及び、悟は日本へ帰らなくてはならなくな

って、二人は引き裂かれた。

「いつかきつ戻ってきて、どんなことをしてでも、朋子を攫っていくと宣言した……」

周一郎の声には微かな羨みがあった。幼い頃から処世術を駆使して世の中を泳ぎ渡ってきた周一郎にとって、悟のように情熱の赴くまま、周囲を気にせず突っ走ってしまう激しさは縁遠いからだろう。

「ところが最近、海部敏人は、得体の知れない黒づくめの男につけ狙われるようになった……。車のブレーキホースが切られていたり、誰ともわからぬ男に狙撃されたり、それどころか、危うく高台から突き落とされそうになったり。敏人は、それを悟の仕業と考えて怯えていて、事業にあまり身が入らないようですね」

「へえ……それじゃ、今、海部運輸は誰が動かしてるんだ？」

「香村玲奈です」

ぼうっと妙に虚ろな声で周一郎は応えた。唇を軽く噛み締める。

「玲奈さんが？」

「彼女は切れ者ですよ。大悟を落としたほどですからね」

「へ…え…」

そういえば、周一郎と玲奈は知り合いのようだった。

「おまえ、彼女を知ってるのか？」

「……」

タオルの下に見えている唇が一瞬ためらった。

「周一郎？」

「……はい」

一拍置いて、どこか疲れた声に戻ってくる。本当は話したくないのかもしれない。でも何となく、これは聞いておいた方がいいような気がする。

「どんな女性（ひと）なんだ？」

「……滝さん、玲奈さんが好きなんじゃない？」

いきなり何だ。

「そ、そりゃ、好みだけど」

ふと思いが当たった。こいつ、俺に気を遣ってくれてるのか。

「何が何でも、と言うわけじゃないし」

「……」

ふう、と珍しく、周一郎が溜め息を漏らす。

「？」

「大悟の恋人でした」

「え」

「大悟が若子夫人を手に入れる前に、少し付き合っていたことがありました」

低い声で続ける。

「大悟が彼女をドイツから連れ帰った時、彼は彼女を妻に迎えるつもりでした。聡明で、仕事についてのマネジメントにも十分な能力を備えていた上に、朝倉家にふさわしい美貌と気品がありました。どこをとっても、非の打ち所のない女性でした」

気怠げに上がった少年の手がタオルを探るのに、手を伸ばしてタオルを取り、水に浸して絞り直してやる。

「すみません」

「で？」

「もちろん、大悟はそのつもりだったんですが、彼女の狙いはもっと別なところにありました……朝倉、周一郎、に」

「お前？」

「はい」

苦い声だった。俺はタオルに隠れていても端正な周一郎の顔と、玲奈の笑顔を重ねあわせ、がっくりしながら頷いた。

「うん、悪い組み合わせじゃないな」

「まさか」

周一郎は俺のことばのニュアンスを聞き取ったのだろう、冷笑した。

「そんな甘いものじゃありませんよ」

軽蔑の響き。

「玲奈は、朝倉財閥の急速な発展を探りに来たんです」

「つーと……スパイ？」

それもまた、似合い過ぎるほど似合ってる。

「……朝倉財閥の急成長が僕の力だと気づいた彼女は、早速僕に対してアプローチしてきました。僕を抱き込み、朝倉家を去らせることが彼女の役目でした」

「大悟は気づかなかったのか？」

「……彼は恋多き男でもあって」

微かに苦笑する。

「醒めると落ち着いてくれるんですが…。玲奈が僕に執着し始めたのには気づいていたはずですが。その裏を見

なかったとは思えない……けど……」

僕は、見ないわけにはいかなかった。

周一郎の声が虚ろな吐息を含む。

「……玲奈と再会したのは偶然でした。彼女は、僕の一件に失敗したとして日本から去り、どこかの企業の社長秘書におさまった、そう聞いてました。それっきり、僕は彼女のことを忘れていた……十四歳で、海部の秘書として会うまでは」

びたりと閉じた唇が淡い笑みを浮かべて振り向いた。タオルがずり落ちる。湿った髪が幾筋か張り付く額の下、澄んだ黒い瞳が俺を捉える。

「……腐れ縁ばかりですね、僕は」

騙し騙されるばかりの人間関係、恋とか友情とか、そういう綺麗な部分を一切剥ぎ取られた打算ばかりを見せてつけられてきた目が、それほど透明で深いのは、諦めきったせいか、それとも、まだ何かを探して足掻いている

せいか。

後者であってほしい、できれば。

「俺とも、だろ？」

にやりと笑ってからかう。

「滝さんは…違いますよ…」

どこか眩そうに細められた目が、柔らかく弧を描く、にじみ出る笑みを隠し切れないように。

### 3. 聖少女(2)

俺は目を伏せた。  
俺はもう、知っている。こんな風に何の防御もなく微笑みかけるのは、周一郎が自分でも感知出来ない深さで傷ついているせいだと。  
玲奈が大悟を離れて自分に近づいてきた時、周一郎ははなから揺れなかつただろうか？ 優しく甘い笑顔が自分に向けられていると知って、全く一瞬も心が弾まなかつたか？ 疑いと期待、交錯し判別できない真実を、普通なら確かめ切れない。けれど、周一郎は確かめられてしまうのだ、ルトという眼を使って。  
その瞬間、周一郎は何を呪っただろう。出会った運命か？ したたかでタフな女という代物か？ いやきっと、それは。  
「…滝さんは……………僕が…」  
「……………」  
続く穏やかな声を、耳を澄まして聴く、見ない代わりに、全身で周一郎の本音を聞き取ろうとして。  
「ひ…き…と…め…………て……………」  
「……………」  
「……………」  
「？」  
声が蕩けるように消えてしまったのに顔を上げる。降ろされてしまうのかとうろたえたように急いで爪を立ててしがみついていた猫を撫で、ベッドの上で安らかな寝息をたてている相手を眺める。  
「シーツが濡れるってのに」  
タオルを落としたまま、周一郎は熟睡している。始めの頃からは思いもしない、警戒一つしない寝顔、椅子を立ち上がって左脚を引きずって近寄り、手を伸ばしてタオルを取っても身動き一つしない。  
『やっ、安心したってところかな』  
ふいとお由宇の声が響いて、思わず相好を崩した。  
「そっか…」  
安心した。つまり、俺を信用してるってことだよな？  
タオルを洗面器に戻し、そっと部屋を出て行く。  
「おやすみ、周一郎」  
応じるのは寝息だけだ。俺はにまにましつつ、静かに扉を閉めた。

「さて、お前を返して来なきゃならないな」  
「みいん」  
胸にしがみついたまま薄茶色の小猫は小さく鳴いた。ひょいとこちらを見上げた瞳は淡い水色、ぱっちり見開いて軽く耳を倒す。ころころ、と喉を鳴らす。  
「おー、気持ちよさそうに…………ほらほら」  
喉をくすぐると、うにゅう、と声を返しなが、一層ごろごろと喉を鳴らす小猫を胸に、朋子の部屋に向かう。部屋数が多いわりには、わかりやすい。  
「ここかな」  
重厚な木の扉をそっとノックした。  
「はい…」  
「すみません、滝です…………えーと…………猫、返しに来たんですけど」  
「カツエ?!」  
「ばむっ！ がんっ！」  
「っっ！」  
目の前に突然迫った扉を俺は避けることができなかつた。思い切り顔面で受け止め、声も出ずにひっくり返る。  
「ご、ごめんなさい!!」  
「うにゃあ…」  
おろおろ声で叫びながら飛び出して来た朋子は、急いで俺の上に屈み込んだ。  
「大丈夫ですか、滝さん?!」  
「ら、らいりょうふれふ…」  
俺はもろにぶつめた鼻を押さえてもごもご唸った。  
「ごめんなさい…………二度目ですね」  
目を白黒させている俺の腕を引っ張って、何とか立ち上がらせてくれた朋子は、心底心配そうに俺を見上げた。昼間と印象が違うのは、夜のせいだけじゃないらしい。朋子の目の端に微かに光るものが残っていて、瞼が薄赤く腫れぼったい。きっと泣いていたのだろう。  
「あ、いや別にその」  
朋子は軽く唇を噛んで、俺の左脚に目を落とした。  
「昼間のも…………まだ謝ってないのに…」  
「お、俺、好きでやったんだから！ 君のせいなんかじゃない、ほんと全く違うから！」  
潤んだ大きな瞳にどぎまぎして、思わず全力で否定する。  
「ほんとにいつもお節介で、えーと、あの、そうだ、床に転がったりこけたりするのはもうほら趣味みたいなもんだから！」  
え、と唇を綻ばせた朋子がようやくくすりと笑ってくれてほっとする。女の子に泣かれるより、追試に向かっていた方がまだましだ。  
「優…しいんだ、滝さん…………って…」  
小さく呟いた朋子の瞳が、また曇ってくるのにぎょっとする。  
「え、え、え」  
「滝…さん!!」

「わ、わっ！」

体を投げかけてきた朋子が胸にしがみついてくるのに焦った。こんなところを誰かに見られたらどうする、俺はドイツくんだりまで女漁りに来たことになっちゃう。けれど、泣きじゃくる朋子を突き放すこともできない。とにかく落ち着いてもらわないと。

「ど、どうしたんだ？」

いかにも間抜けた問いかけだが、他に思いつかない。朋子はいやいやをするように小さくかぶりを振って答えない。震える小さな肩に仕方なしに腕を回しながら途方にくれている俺のズボンを、小猫がぐわえて、くいくいと部屋の方へ引っ張った。世の中の猫という猫はみんな俺より頭がいいのかもしれない。淡い水色の目が、とにかく入れよ、なあ、と笑うように俺を誘っている。

「う…うん…えーと、その、朋子、ちゃん？」

「…はい」

滲んだ掠れた声。切なげで胸に沁みる。

「あのさ、ちょっと、部屋に入ろうか」

「…う…ん」

「何もしない！ 誓って何もしないから！」

「…」

ふ、と吐息のような笑みが零れた気がした。それでも俺にすがりついたまま離れようとしないう朋子を、そっと押しやりつつ部屋に入った。

俺達の部屋と同じく、豪華なレリーフの施された壁、天井、広々としたベッドに花の刺繍のあるベッドスプレッドが鮮やかだ。

部屋の暖かさに少しほっとする。その安堵が伝わったのだろうか。

「ごめん…なさい」

朋子はやっと俺から離れた。

「迷惑、かけちゃった…」

強いてにっこり笑って見せるのが妙に痛々しい。黙っているのは慰めて欲しいがっているのかも知れないが、生憎というか当然というか、俺にそんな度量はない。慌てて話題を探す。

「あ、あのっ」

朋子の足下には薄茶の猫がくるくると尻尾を彼女の足に巻き付けつつ、体をくねらせている。

「猫っ」

「猫？」

「その、猫、カツツェって言うの？」

ほらよく言うじゃないか、見知らぬ他人との間で一番無難な話題は天気とペットの話だって。

「あ、うん、そう」

朋子は笑み綻ばせた唇を少しつぼめ、足下にじゃれつく薄茶の小猫を抱き上げた。

「面白いでしょ、日本語で言えば『ネコ』だもの」

くすっ、と笑う。

「猫を『ネコ』って呼ぶの」

「みいん」

カツツェは主人の頬にそうっと顔をすり寄せた。主人の悲しみを読み取ったかのような仕草に、朋子はもう一度小さく笑い、思い出す口調で言った。

「悟さんが、いつもそう笑っ…て…」

きゅっと小猫を抱き締める指が白くなった。また強張ってしまった表情、苦しそうに寄せた眉、俯いた朋子の唇が次のことばを紡ぐ。

「悟さん…手紙もくれない…きっと迎えに…来るって…言ったのに…」

自分の父親が悟らしい男に生命を狙われているのを、朋子は知っているのだろうか。知らないんだろうな、きっと。

ぽとりと、カツツェの艶やかな毛並みの上に光るものが落ちる。

「げ」

これだから一般論は嫌なんだ！ 肝心なところで聞きやしねえ。

「あ、あの」

泣かないでくれ。泣かれると困る。どうしたらいいだろう。目の前でもう一階派手にこけてみるか？ いやもしそんなことをやって、部屋のある高価そうな絨毯や調度品を傷つけでもしたら？ 笑い事にならなくなる。

おい、神様、今こそ働く時だぞ、いつもいつもおかしなことばかりやってないで、たまにはちゃんと役に立ってくれ！

俺の祈りが天に通じたのか、朋子はきゅっと歯を食いしばって顔を上げ、アホの等身大模型のようにただただ突っ立っていた俺を見つめた。

「顔洗ってくる。周一郎さんの事、聞かせて」

軽く指先で濡れた目元を拭う。微笑んだ瞳は俺への気遣いに溢れている。こんなに若くても、浮かんだ表情はどこか聖母じみていて、女って言うのはたいしたもんだと思う。

「あ、ああ」

「おいで、カツツェ」

部屋を横切り、扉を出て行こうとする朋子が、何を思い出したのか、唐突に立ち止まり肩越しに振り返った。

「滝さん？」

「は？」

「滝さんって…悟さんに似ている」

「え」

「優しいところも」

「…」

絶句する俺に少々悪魔的な笑みを投げて、朋子は扉の向こうへ姿を消した。

「おい…」

女ってのは全く…。

「まいったなあ」

涙とか、その後の目線とか、付け加えられた微笑みとか、ああいうのに簡単に振り回されちまうのも何だか情けない。男ってのは仕方がない……じゃなくて、単に俺が仕方がない男なのか？

取り残され、どうも居心地が悪くてもじもじしていた俺は、落ち着き先を求めて部屋を見回し、朋子の机の上の写真立てに気づいた。

笑っているピンクのワンピースの朋子と、その肩に手を回している黒づくめの服の男。濃い眉、しっかりした顔立ちの浅黒い肌。背の高い少年の足下の部分に、どうやら朋子の手によるらしい『Satoru』の文字が入っている。

「さとる…」

とすると、こいつが本田悟、か。

「俺とどこが似てるんだ？」

この写真はどう見ても『精悍』とか『ワイルド』とか、そういう表現が合う男のように見えるんだが、俺のどこにそんなものがある？

女の審美感はどうもわからん、と首を傾げた途端、突然鋭い悲鳴が響いた。

「きゃあああーっ!!」

「っ?!」

今の声は。

俺は部屋を飛び出した。左右を見回す。

「滝さんっ!!」

(朋子?!)

再び響いた声の方向に走る。左脚を引きずってたせいで、かたつむりに加速装置を取り付けた程度だったが、歩くよりはまじだろう。

「朋子さん?! どうしたんだ?!」

「滝さんっ!!」

廊下の前方から声が戻り、薄闇の中から走って来た朋子が、驚く間もなく、蒼白な顔を俺にしがみついてきた。

「おとうさんが……おとうさんが!!」

「おとうさん？ 海部さん？」

「おとうさんが！」

叫びながら手を背後へ伸ばす朋子の肩越し、廊下の中央に深藍のガウンを羽織った男が倒れ、その少し先の廊下を黒づくめの服の男が走って遠ざかる。朋子の叫びに引き寄せられたのか、たちまち増える足音に速度を上げ、あっという間に闇に消えていく。

(悟?!)

あちらこちらから走ってくる数人のボディガードらしき男達、やや遅れて周一郎も現れる。

「滝さん！」

「お、おう！」

立ちすくんだ俺の目に、床に倒れた男の頭部に広がった鈍い紅が映った。みるみるじんわりと体の下に広がっていく色に気づいて、周一郎が男の頭部に屈み込み、検分して顔を上げる。暗い表情で俺に向かって首を振って見せた。

「どうなさったんですか?!」

ここからだと思えば一番離れた場所のせいか、最後に玲奈が駆けつけた。色っぽいガウン姿だが、その場の状況を見て取ると、すぐにてきぱきと指示を出し始める。

「警察がまもなく来ます。城の警備を固めて下さい。出入りする者は警察が来るまで止めておくように……大丈夫でした？ 滝さん、朋子さん」

気遣う玲奈の背後、周一郎は妙に静かに男の屍体に眼を落としている。その冷ややかな気配に、何かぞくりとしたものが背中を走った。

## 4.天使死す(1)

バランスの取れた十分な朝食がすむと、俺は玲奈に誘われ、城の上に上がった。周一郎は部屋で仕事があると言って来ていない。

「……と…」

吹きつけた風にジャンパーの裾がはためく。この旅行のためにわざわざ買った代物だ。敏人が殺され、犯人が見つからないままに三日、俺と周一郎は捜査上の足止めというやつを食らっていた。敏人の遺体は司法解剖に回され、後頭部からの数回の殴打による頭蓋陥没によって絶命したことがわかった。凶器は遺体の近くに転がっていた青銅製のローレイの置物で、指紋は出ていない。

犯人として怪しいのは俺と朋子が見た黒づくめの服の奴だが、アリバイがないという点では、城に居た誰もがほとんど同じで、ただ俺と朋子は何とかお互いにアリバイを証明で来そうだった。もっとも、どうしてあの時、俺が朋子の部屋に居て、加えて彼女にしがみつかれていたのかについては、少々ありがた迷惑な誤解があったみたいだが。

「…なさいね」

「え？」

ふいに話しかけられて、玲奈を振り返る。栗色の髪が舞うのを片手で押さえ、玲奈はもう一度繰り返した。

「ごめんなさいね」

「何が、ですか？」

きょとんとする。今のところ、玲奈に突き飛ばされた覚えも足を引っかけられた覚えも、ましてや、残念なことに色恋沙汰をしかけられた覚えもない。

「せっかくの旅行なのに……嫌な旅行になりましたね」

「え…ああ」

俺はどう応じていいかわからないまま、頭を掻いた。相手の臉の蒼白さが気になる。

「玲奈さんこそ、大変でしょう、これから」

「……」

玲奈はふっと淋しげに笑う。

「あ、そりゃもちろん、海部運輸の方は大丈夫だろうけど…、っと」

つい滑らせて慌てて口を押さえた。一瞬頬を叩かれたような顔で玲奈が俺を見返し、やがて緩やかに目を細める。

「朝倉さんから聞かれたのね？」

「あ、ええ、その、まあ」

「……悪い女だと思っらっしゃるんでしょうね」

再び見開いた玲奈の茶色の瞳が潤んでいた。思わずどきりとして目を逸らせる。

今回は全くどうしたって言うんだらう。会う女性会う女性が涙ぐむなんて、天変地異だ、大化の改新だ。

「今さら、どんな言い訳もしませんわ」

つい、と玲奈は眼下に広がる光景に目を向け、静かに呟いた。きれいだとしか言いようのない彫刻じみた整った顔立ちが、虚ろな表情をたたえてしばらく空を見つめて思い出に浸っている。俺も、何という事なく、手近のざらざらした黄褐色の石に手をつき、目の前に広がる自然の絵画を眺めた。

かなりの高台にあるリモタント・ローゼ城の頂から見下ろすと、俺達を運んできた道路がうねうねと曲がって緑の中に消えていく。

なおもその方向を眺めていくと、緑の中がっしりとした建物、幾つか重なりあう城壁に、鋭利に天を刺す尖塔ととずどんと突き立った筒のような塔が見えた。ブルク・カツツ城、ねこ城だ。

同じ方向に、かの有名なローレイの岩があるはずだったが、乱れ重なりあう山の緑と緑の縁は、どれがどれやらわからなくしている。

晴れた空には白い雲が水彩画のように散り、その下に柔らかく盛り上がる緑は、夏へ向かって輝きつつあった。急斜面の薄灰色、灰緑色の畑、やや濃い色のブドウ畑を辿って下へ降りた視線は、空の青さと山の緑を跳ねる水面を滑る。日本で考えていたよりもうんと広い川幅の流れだ。

ライン川のゆったりとした景色、風は微かに甘く鼻腔をうち、美しさに声もなく、俺はその風景に魅入られる。

。「ドイツが好きですの」

風に紛れるようにアルトの響きが耳に届いた。目を玲奈に戻すと、彼女はローレイの岩の方をうっとり見つめていた。

「人を迷わせたというローレイの伝説が息づく、ここが好きですの」

と、いきなり、そのことばを際立たせるように歌声が上がった。高く澄んだ声、よく知った調べ、『ローレイ』だ。

びくんと小さく肩を強張らせて、玲奈は我に返り、じっと見つめている俺に気づいて、海部秘書の顔で眼下の道を指差した。

「マリーネですわ。ここで働いている者の一人ですけど、あの唄が好きで、いつも歌っているんです」

俺は、玲奈の白い指先に従って見下ろした。

小柄な、どちらかというときやせすぎのように見える少女が、質素な服を翻らせて、裏手の方へ歩いていく。日の光が鮮やかに、薄い茶色のおさげに跳ねている。まだ十四、五歳の少女だ。

「そうそう、伝説と言えよ」

少女の姿が消えると、玲奈は明るく切り出した。さっきまでの、人生に疲れに倦んだ女性の顔は既になく、自信と気品と優雅さに満ちた、海部敏人亡き今となっては、その肩に海部運輸という事業を背負う秘書の顔になっている。

「このリモタント・ローゼ城にも伝説があるんですよ」

雲が陽を遮ったのか、周囲は淡い光になった。

「リモタント・ローゼ、というのは、ご存知かしら、二度咲きの薔薇のことですわ。この二度咲き、ということばに特別な意味があるんですよ」

薄く微笑む。

「初代城主がこのリモタント・ローゼ城に入って数年たってから、城主はある娘を娶りました。それはそれは美

しく賢い娘で、城主は妻のことを大層気に入っていたのですが、ある日、この妻が、私はもともとここに住んでいた者だ、と言い出したそうです」

少し息を継いで、声音を改めた。

「あなたはいい人だから、この城を建て、ここに住むのを許したが、あなたが明日の戦いで死んだ後は誰にも住まわせたくない。ついては、あなた亡き後、城の全てを私に譲るように手配してほしい」

気のせいかな、その声が、玲奈より遙か遠くから響いたように聞こえる。

「もちろん、城主は取り合わず、妻の懇願を聞き入れないまま居たところ、繰り返し繰り返し言い募られて、あまりのしつこさについては剣を振り上げ、斬って捨ててしまったそうです。次の日、城主は思ってもいなかった攻撃を受け、命からがら城に逃げ帰りはしたものの、矢折れ刀尽き、的に追い詰められ、広間で斬り殺されました。ところがその死の寸前に見たのは、死んだはずの妻の顔、意識も朦朧として来た中に、確かに妻の声が耳に届くのです、『殿、この城を頂けまじょうか』」

震えるように聞こえる声は低い、まるで黄泉の国から聞こえるように。

「苦しい息の下から、城主が妻は何者かと問うと、高く嗤った女が言うことには、『さすれば私はあなたの妻、しかして、その心を辿れば、この城のあるべき主、不死の女城主と呼ばれまじょう』と…」

「っ…」

妙に荒々しい風が、突然俺を取り巻き、我に返る。

(雾囲気ありすぎだろっ)

心の中で喚いて目を擦り、ともすれば、その女城主と玲奈が重なりかけるのに抵抗する。翳った光、絵画のような世界、翻り舞う髪に包まれて、怪奇な話を語る美女、このまま物語の中へ呑み込まれるかと思った瞬間、唐突に雲が切れ、天の救いのように陽の光が戻った。

「…それで」

続いた声音は、さっきまでのおどろおどろしたものではない。微笑を含ませて柔らかな声が、

「生き返った女城主にちなんで、レモタント・ローゼと呼ばれるそうです。今でも、その女城主の肖像画が残っているそうですけど」

俺の狼狽に、玲奈の綺麗な唇が綻んだ。

「どうかなさったの？」

「いや、あんまり、その……話が上手かったので」

さすがに怖くて怖くて、とはさすがに言えず、口を濁す。まあ、と一瞬目を開いてみせた玲奈は、くすくす笑いながら続けた。

「笑ったりして、ごめんなさい。滝さんは真剣に話を聞いて下さる方なのね」

「あ、えーと……単純なんで」

真剣にも何も、萎縮していたに近いんじゃないかなろうか。

「そんなことはないわ。あなたは……とてもいい人よ」

玲奈が仕切り直すように、それでも奇妙な甘さで囁いた。

(わあ)

何だろう、ひやりとした。背骨の根っこが縮むような不安感。何かよくないものに目をつけられた、因縁をつけられ絡まれ始めた、そんな感覚。

「お、俺がいい人なら」

巻き込まれまいと、思わず予防線を張ろうとした。

「かえるだっけむかだっけいい人ですよ！ みみずだっけもぐらだっけ」

後はあめんぼだったか？ いや、これって『みんな友達』ってことになっちゃうんじゃないか？ それはまずいだろう。

「ら、ラーメン作ってくれる人がいい人なぐらい、俺よりうんといいい人が居ますよ！」

日本でラーメンを作れる人口はどれぐらい居るんだろう。製造業とかも入るだろうか。原材料はどうだ。いやそもそも、インスタントラーメンがあるから、一般家庭全て、ガスを扱える年齢以降は全部いい人なはずだろうなぶん。

「ま」

玲奈が吹き出す。物憂げな哀しみを秘めた気配が一気に消え去り、笑う瞳も唇も眩いほどに明るくなる。陽の光が栗色の髪に躍り、雲間から光が差し込む光景を背後に天使じみた後光のように目を射る。

とてつもなく綺麗だ。

「…そろそろお昼ですわね」

見惚れる一方の俺に呆れたのか、玲奈は軽く顔を背けた。

「え、もう、そんなじかつ」

舌を噛んだ。涙目で見返すと玲奈は振り返り、小さな子どもに言い聞かせるように笑う。

「そんな時間ですわ」

さあ行きまじょう。

いたたた、と口を押さえる俺を促して、玲奈は城内に戻り始めた。

「玲奈さんが?!」

周一郎のこぼにぎょっとして振り返る。警察、マスコミ、事業関係者と騒がしい城の一郭、昼飯を済ませた後だった。

「そうです」

周一郎は軽く頷き、ゆったりと組んだ脚を組み替えた。目元にはやはり黒々としたサングラス、少年の表情はわからない。

「どうして玲奈さんが疑われる？」

「早過ぎた、というのが警察の見解です」

「早過ぎた？ 何が」

「現場に駆けつけるのが」

「いや、だって、誰だって必死になれば火事場の何とやらって」

「敏人の倒れていたのは城の端、書斎に当てている部屋の前の廊下でした。ところが、本来、玲奈の部屋は城の

もう一方の端です。たとえ悲鳴を聞きつけて走ってきたとしても十分近くかかるはずで。ところが、玲奈は朋子が悲鳴が上がってから五分もかからずに来ている」

周一郎は静かな声で付け加える。

「悲鳴が聞こえていなかった確率、こっちの方が遥かに高いのですが、そうだったとしてどんなに急いでやっても二十分はかかるでしょうね、知らせを受けてから、ということだろうから」

「で、でも」

「玲奈にはもう一つ二つ、面倒な問題があります」

周一郎は淡々と続けた。

「一つは、あのローレライの置物を使えば、女性の力でも十分敏人を殺せたということ。犯人は敏人がまさかと思っただけで背中を向ける相手であったということ…傷の状態から不意打ちではなさそうということ。もう一つは、敏人の個人名義の財産が、彼が死ねば、どんな理由があっても玲奈に贈られる手続きがされていたこと……」

周一郎は目を細めた。

「そして、玲奈は早急に金が必要だった」

「は？」

「……『SENS』に始まる違法ドラッグを楽しんでいたようですね」

「……」

思わず目を見開いた。ドイツが好きですの、と歌うように呟いた玲奈の横顔が脳裏に浮かぶ。気怠さが閃く暇が蒼白かった。

じゃあ、玲奈が、麻薬につき込む金欲しさに殺人を犯したということか？ けれど、そんなことは調べればすぐわかることだろう。あからさまに怪しいと思われる条件で、そんな危うい橋を渡るほど、彼女は愚かな女性には見えなかった。

ふと気づく。

周一郎は自分の意見を一言も言っていないんじゃないか？

「お前は？」

「…」

冷ややかな視線が返ってくる。

「お前はどう思ってるんだ、周一郎」

少年は沈黙している。他に誰か、思い当たる人物でもいるのだろうか。

やがて、周一郎は薄い唇を開いた。

「僕は、滝さんが見た黒づくめの人間、に引っ掛かっています」

「そ、そうだ！ そうだよ！」

俺は慌てて訴えた。

「悟がいるじゃないか！」

悟なら敏人への恨みもある、隙を狙っていたそうだから、敏人を殺す可能性は玲奈よりうんと高いはずだ。だが、周一郎はさりりといなした。

「もちろん、玲奈が出来ないというわけじゃありません」

「え？」

「黒づくめの服を着て逃げて、ガウンを羽織って戻って来てもいいんですからね」

「あ…」

確かに、あの時は誰も玲奈のガウンをひっぺがそうなんて考えつかなかった。

「ただ」

「ただ？」

「そうすると、僕には玲奈の意図がわからなくなる…」

不審そうな周一郎のことばに瞬きする。

「何でだ？ 玲奈さんは、悟に罪を着せようとしたってことになるんだろ？」

「そうです」

周一郎はサングラスの奥から、ひた、と俺を見つめた。

「そこが僕にはわからない」

「は？」

それはよくある話じゃないか。恨みを持っていて、犯人の可能性が高い相手に偽装する、小説でもTVでもよく使われているネタだろう？

「もし…」

「滝さん！」

いきなりドアが開いて朋子が飛び込んできて、どきっとした。

「ここだって聞いたから!!」

周一郎が一緒に居るのに気づいて露骨に嫌そうな顔になったが、跳ね飛ばすように俺の側へやってきてきゅっと腕を抱え込む。

「あの、え、あれ？」

「朝は玲奈さんに付き合ったんでしょ。昼はあたしと付き合ってた！」

物怖じしない態度、いやむしろ、周一郎を挑発するように、と言うべきか。

「で、でも」

「もう充分話したでしょ、いいじゃない、行こ！」

俺の腕を抱え込んでぐいぐい引っ張り上げながら、側の周一郎を完全に無視して朋子は笑った。足下にやってきたカツツエも、俺のズボンに銜えて引っ張っていく。絶妙のチームワークだ。

「おい周一郎」

「行って来たらどうです？ 話は『充分』済みましたよ？」

周一郎は素っ気なく言い捨てた。

「お前も来いよ！」

「嫌っ！」

周一郎が答えるより早く、朋子が喚いた。少年は動じた様子もなく、憎まれるのには慣れていますからね、と言いたげに肩を竦める。

「どうぞ。それに僕は客を待っていますから」

「客？」

「ええ。連絡はついてますから、もうそろそろ来るでしょう」

「誰…ぎゃあっ！」

「滝、さ、ん！」

いいから来るの。

俺は、朋子に嫌というほど腕をつねられて吠えた。

「いってらっしゃい」

周一郎は微笑し、引きずり出されていく俺に軽く二本指を立てて片目をつぶった。

## 4.天使死す(2)

「嫌いなんだから！」  
まるで腕に這い回る毒虫を見つけたように、朋子は吐き捨てる。  
「あの人、ますます嫌いっ！」  
振り返って舌を出し、世界で一番不愉快な場所から逃げるように、どんどん俺の腕を抱えて歩いていく。  
「あたしの前であんなふうに笑ったことなんて、一度もないし！」  
「えーと」  
「周一郎よ！」  
唇を曲げて言い放つ。  
「そりゃさ、初めて会った時、かっこいいとは思ったわよ？ たった十四で朝倉家を動かしてる天才だって聞いたし、見かけもいいし？ …だけど、実際会ってみたらどう？ 冷たいしにこりともしないし」  
きゅ、と唇を噛み締める。  
「やっと笑ったかと思ったら、嫌いな笑い方だし…何かこっちを見透かしてるみたいだし」  
朋子はずんずんと幾つ目かの角を曲がった。  
俺にはもう城のどのあたりにいるのかわからなくなってきていた。  
帰りは是非、朋子と一緒に帰ろう。置いてけぼりにされてしまうと、道に迷って餓死しそうだ。そもそも、こういうバカだっ広い家にはそれぞれの角に標識とかつけておいてほしい。こっちが食堂とかこっちが洗面所とか。例えば、もし急にトイレに行きたくなったら、一体どうするんだ……。  
「う」  
考えた途端、ぞくりとする。やばい。マジに行きたいかもしれない。  
「なのになさっきの顔見た？ あんな顔して笑って！」  
「あの」  
話し続ける朋子にトイレの場所を尋ねようとするが、相手は俺の声が耳に入っていないようだ。  
「あのさ、朋子ちゃ」  
「にこ？ そうよにこっ、よ！ 何よあれは一体！ 反則でしょ！」  
「あのね」  
「ほんと、信じられない！」  
「ちょっとあのさ！」  
「何よもう！」  
ぎらっと目を光らせて振り向いた相手に、おどおどと尋ねる。  
「トイレ、どこ？」  
「とい……っ」  
朋子はいきなり吹き出した。  
「滝さんも信じられない！」  
いや信じてくれなくてもいいからとにかくトイレに連れてってとくれないと、もっと信じられない事態が出現するぞ、と冷や汗を流している俺を、けらけら笑いながら朋子はトイレに案内してくれた。  
「ふ、う……っ」  
「…終わった？」  
「はいすみました、ありがとうございます」  
外で待っていた朋子にべこりと頭を下げる。その俺の仕草がおかしいと、また朋子は笑い転げ、何とか機嫌は直ったようだ。  
「これ、今までの城主なんだって」  
トイレから離れていきながら、肖像画のかかる回廊を通り抜けた。  
「へえ」  
「若い人もいるし、おじいさんも居る。女の人はいないね」  
「そうだな…」  
さっさと先を歩いていく朋子にせかせかと付いていながら、肖像画を覗き込む。  
どれもこれも立派な金縁の額に入り、豪華な衣服で正装している姿は華々しい。こちらを見つめる目の色は違うが、強い意志をたたえる視線は共通していて、暗い背景をバックに、視線のビームで圧倒される気がする。  
「滝さん！」  
「あ、はいはい」  
少し先で苛ついた顔で腰に手を当てて待っている朋子に、俺はへこへこと走り寄った。彼女の機嫌を損ねたら最後、俺はこの城の中でサバイバルごっこをすることになるのだ。  
「何見てたの？ 面白い？」  
「あ、うん」  
「よくわからないな……でも、もっと面白いものがあるわよ、ここには」  
朋子はふいに何を思いついたのか、悪戯っぽく瞳を輝かせた。色白の肌が僅かに紅潮する。  
「たとえば、ね」  
つい、と側の柱のレリーフに手を触れる。女神の像のようなレリーフ、その手にある時計の振り子のような部分を数mm、右へずらせてみせる。  
レリーフが動くだけでもびっくりだが、どこか遠い所からきしる音が響いて、がたんっ、と戸が外れるような音がした。それを待っていたように、朋子が柱の隣の壁を押す。と、そこがゆっくりと背後に沈み、俺は瞬きした。  
「ふふっ」  
「へ」  
ドアがある。壁の凝った造形に埋もれてわからなかったが、よく見ると確かに小さなドアが作られている。  
「こっちよ」  
朋子はそのドアを開けて俺を呼び、平然と中に入っていく。  
俺はおそろおそろ彼女に続いた。  
暗く重い闇が沈んでいる。かび臭い匂いと、得体の知れない妙な空気の流れ……。

ぼうっと、いきなり灯がともった。片手に小さな光、ランプのようなものを掲げた朋子が浮かび上がる。ドシンと重い音をたてて空間が閉じられ、ランプの光以外は、どちらを向いても原始の闇が広がっている場所に閉じ込められる。

「な、なに？」

「だらしがないと思うなら勝手に笑ってくれ。怖いものに対して平然としていられるほど図太くないのだ。いくら可愛い女の子の前でも、怖いものは怖い。」

「わ、わっ」

俺は無言で歩き始めた朋子を慌てて追った。

光がゆらゆらと様々な影を投げかけ、さながら影の舞踏会……と気取ってみたものの、どうもこう、見えてる以外は真っ暗ってのは始末が悪い。落ち着かない。

こういうことなら、もう少しのんびりとトイレに居座っておくんだと後悔しても後の祭り、慣れた様子で歩を進める朋子にぼそぼそと問いかける。

「ここ…一体、どこなんだ？」

「この城の不思議なところ、というか、仕掛けの一つね。この城には、普通の部屋以外にこういう小部屋が幾つも隠されてる…」

朋子の声が少し途切れた。手探りしていたらしいドアを探し当て、ノブを回すと、キィィッ、といやっという音をたてて木製のドアが開き、ふうっと微かな風が吹いてきた。

かび臭い匂いが強くなる。

「小部屋と小部屋の間にはこういう通路があるの。昔、敵が攻めてきた時の避難所として使われたって言うけど、どうかな」

通路は大人の男がやっと通れるぐらい、その中で朋子は不意に立ち止まり、ランプを差し上げて、ある一点を指差した。

「？」

ランプの光に照らされて、真紅の彩色を施された、濃い陰影を宿す薔薇のレリーフが浮かび上がる。中心に暗く虚ろな穴があいていた。促されて、そこに目を当てた俺はぎょっとした。

目の前に誰かの寝室が大きく拡大されている。と、正面のドアを開けて一人の女性が入ってきた。濃いワイン・レッドのツーピース、玲奈の姿だ。憂いをたたえた顔が嫌になるほどきれいで、気怠げにこちらへ近づいてくると泣きそうな幼い表情を浮かべて椅子に座り込んだ。が、気を取り直したように立ち上がり、服に手をかけ、ボタンを…。

「どわっ！」

俺は思わず飛び退いた。

「ね？ どう見たって、避難所だけじゃないみたいでしょ」

朋子が妙に魔的な笑い方をして囁き、先を進んで次の小部屋にランプを差し入れる。人一人ぐらいは寝転べそうなソファに、数百年はそのままだったと言いたげに女もののショールが敷かれている。何に使ったのか、妄想するには十分な場所と暗さだ。

「さ、先行こう、先！」

俺は慌てて朋子の肩を押した。

「なんつー教育上よろしくないところだ。が、朋子は平気な顔をしていて、返って慌てている俺がおかしいんじゃない、そういう顔だ。」

「こんな通路は城中にあるわけ？」

「うん、大体はね。でも、あたしも全部知ってるわけじゃないけど」

それじゃあ、と俺は考えた。

もし、玲奈がこの通路を知っていたとしたら、普通の経路よりうんと早く来ることもできただろう。

「ひょっとして、さ、玲奈さんの部屋から書斎の方までも…」

「あるわよ」

朋子はこともなげに頷いた。

「通路使えば半分の時間もかかんないかな。玲奈さんならよく知ってるはずだし、ね」

にやりと大人びた笑みを浮かべて、一息に続けた。

「おとうさんの愛人だから」

ごくり、と思わず唾を呑み込んでしまう。

「ううん、だったから、って言うべきだわね。おとうさん死んじゃったんだし」

朋子は微かに声音を曇らせた。

「あ、と、あの、周一郎の事、知りたがってたんじゃないのかな」

沈んでくる空気に慌てて話題を変える。こういう薄暗い所で、おもむろに泣き出されでもしたら、非常に困る。幽霊とか物の怪とか、そういうものを呼び込んだらどうするんだ。

「うん……あのね」

少し俯いた朋子は、気を取り直したように歩き始めた。

「どうして滝さんみたいな人が、あの周一郎と一緒に居るのかなって思って」

「どうして、って、言われても…なあ」

あの周一郎。言いたいことはわかる気もするが、まさかこんな難問が戻ってくるとは思わなかった。

「だって、周一郎って、冷たくて生意気で、すごく腹が立つ人間じゃない」

朋子はぱっさり切り捨てる。

「ま、そういうところもあるけど…わりといい奴なんだぞ」

「どこが？」

「どこがって言われるとなあ」

首を傾げて唸ってしまう。そんな簡単に説明できるようなものであれば、俺もあいつと付き合うのに苦労なんかしない。

「うん……たぶん、周一郎のそういう面は、一つの仮面なんだと思うな。人との付き合い方がへたって言うのか」

「上手いわよ」

容赦ない口調。

「自分の感情なんて、これっぽっちも見せずに付き合えるんだから」

「そうじゃなくて、えーと、その、こう、そのまま生で付き合うのがへたって言うか」

言い激む。

周一郎がどんな奴だというのは、俺には何となくわかっているのだが、それを人に説明することばに置き換えるのは難しい。わかりすぎていて言いにくいと言うべきか、それとも、実はまだわからない部分が多過ぎてうまく言えないと言うべきか。……つまりは、周一郎とは何なんだ、そういうことなんだろうが。

今までのことを妙に懐かしい気持ちで思い出す。アルバイトで出会って、子どものくせに気を張り続けているのが痛々しくて、何とか力になってやりたくて、心を開けよ、俺は大丈夫だと手を差し伸べ続けて……そしてようやく引き出せた台詞、『滝さん、一緒に来ませんか？』

あれはつまり、ようやくあいつの隣には立てたという事なんだろう。

思わずにまりと笑ってしまう。

「何よ、一人で笑って」

「あ、悪い悪い」

「周一郎も変だけど、滝さんもおかしな人ね。あんな人と付き合って、どこが面白いんだろ」

朋子は肩を竦めて、妙に光る眼で俺を見つめ返し、唐突にぴいっと顔を背けた。くるりと向きを変え、歩くのを速める。

何か怒らせるようなことを言ったか？ それとも周一郎の端正秀麗な美少年ぶりは万人に有効じゃないってことか？ それはそれで心温まる話だよな。

ちょっとほっとしたとたん、朋子が掲げたランプがみるみる遠ざかっていくのに気がついて慌てた。

「ちょ、ちょっと待ってくれ」

俺のことが聞こえた様子もなく、朋子はますます足を速めていく。うろたえて走り出しかけて、何かに躓きぶっ倒れた。

「ぶ！」

埃の積った床にもろにのめり、思わず息を吸い込んでむせ返し、盛大に咳き込みながら見上げると、ランプの光は既に小さな点となり、それもやがて、ボタンという音とともにドアの向こうに消えるのが見えた。

「何だってんだよ！」

ようよう体を起こして喚く。

何で俺がこんな所でぶっ転んで、置き去りにされねばならんだ。

「一体俺が何をしたって……したって……」

ぶつぶつ言いつつ、足首に未だに引っ掛かっているものに手を伸ばし、それに触れた。

何だろう、細長くて固いもの……わりと軽いけど、何かこう、ぐしゃぐしゃと絡んで、あちこち繋がってるような繋がってないような、しかも布みたいなものも巻き付いてる……？

手にしたものをそろそろと引き寄せたとたん、ぱっといきなり灯が差し出され、手元のものとご対面する。

「ほねーっ!!」

真正面から見据える虚ろな眼窩、叫んだ衝撃で揺さぶられ、かくんと顎が外れて開き、しかもぶらーりと垂れた部分に何やらもぞもぞと動くものが…。

「ひえええいっ！」

絶叫して放り投げると、細く高い声が叫んだ。

「Achtung！」

同時に腕を強く引っ張られ、別方向へ倒れ込んだとたん、間近に積み上げられていたのだろうか、一気にがらがら崩れてきた箱の下敷きになるのを、かろうじてまぬがれる。

「だ、ダンケンエーン」

唯一思い出せたドイツ語、べったり尻餅をついた状態ですぐ側に突き出された顔を振り返る。

十四、五歳の娘、顔の両側で三つ編みのお下げが揺れている。驚きに見張った瞳が、箱と、続いて俺を上から下まで眺め、瞬きした。

「Bitte Schön,……Was fehlt Ihnen？」

「え、えっと……どうしたのか、って聞いてくれてるのかな」

ドイツ語だろうなたぶん。けれど意味がわからない。戸惑いつつ首を傾げる。周一郎でも居てくれると助かるのだが、肝心の時にはいやしねえ！ わたわたしている俺を見つめていた少女は、少し考え込んでから、そっと口を開いた。

「ダイ…ジョウ……ブ…？」

お、日本語！

「あ、と、大丈夫！ 大丈夫！」

急いで立ち上がろうとして、ずきりと痛んだ左脚に顔をしかめる。おい、また左脚を捻ったのか？

「っ、ったく、俺が何をしたってんだ！」

天の高みでサイコロ遊びに興じている奴を怒鳴りつける。

「？」

「あ、いや、君の事じゃない、違う違う」

きょとんと目を見張った少女に慌てて弁解しながら、ふと、相手の顔をどこかで見たような気がした。顔立ちというか、雰囲気というか、何か、うん、どこかで見た顔だぞこれは？

少女は俺の視線の意味を勘違いしたらしい。自分を指差してにっこり笑う。

「マ、リー、ネ」

ゆっくりと日本語風に発音してくれた。

「あ、ああ、君がマリーネなのか。『ローレイ』のうまい」

少女は『ローレイ』という単語だけがわかったらしい。再びにっこり笑うと、小さな声で『ローレイ』を歌い出した。澄んで透明な甘い声……と、いきなり、反対側のドアが開いた。

「滝さん！」

「?!」

軽く息を切らせた朋子が立っている。埃だらけの俺がマリーネに支えられているのを見ると、わっと泣きながら俺にしがみついてくる。

「ご、ごめんなさい、滝さん！」

「うあっ」

首に激しくしがみつかれてもう一度ひっくり返りそうになった。

「あ、置いてけぼりにする気じゃなくて……ちょっと、腹が立って…」  
泣き泣き訴えられるのに、返っておろした。何だって今回はこんなにあっちやこっちやで泣きつかれるんだらう。  
「大丈夫だったから！ な！ ほら、たいしたことないから！」  
「だって…だって……滝さん、周一郎のこと、嬉しそうに話すだもん……っ」  
「はあ？」  
いや俺の心配じゃなくて、そこ？  
どうやら、朋子は自分が嫌いな周一郎の事を、俺がへらへら楽しそうに語るのにぶち切れたらしい。いやもう、女の子というのはほんとによくわからない。  
「ごめんね、ごめんなさいっ」  
「ああ、もういいって、ほら」  
暗闇に置き去りにはしたものの、そのうちやってくるだろうと思っていた俺がいつまでたってもやってこない、迷って引き返したりどこかへ行ってしまったんじゃないかと不安になって戻って来たのだと言う。  
「こんなとこ、出よ、ね、滝さん！」  
側で呆気にとられているマリネには目もくれず、朋子は俺の腕を抱え込み、引っ張り上げ、引きずり始めた。そもそも連れ込んだのが君だろ、とか、彼女にお礼はいいのかよ、とか、俺の文句は朋子の勢いに呑み込まれてしまう。必死に振り返り、灯を掲げたマリネに叫ぶ。  
「あ、っと、あの、ダンケ・シェーン、マリネ！」  
「Bitte.」  
お下げの少女は、不思議に大人びた笑みで俺達を見送った。

その後も、結局夕食まで、朋子にしっかり引っ張り回され、俺はくたくたになって食事の席に着いた。既に食事を始めていた周一郎が、埃だらけの俺と朋子に一瞬目を向け、ちらりと表情を揺らせて食事に意識を戻す。ここに来た時、それなりに賑やかだった食卓は、周一郎と警察の人間らしい男の二人が着いているだけだった。

「あ…と、どうも」  
薄汚れた感じの俺に軽く眉を潜めながらも、給仕は黙々と働いてくれた。  
「この人と一緒なら、あ、あ、食べないわ。部屋へ持ってきて」  
周一郎の姿を見つけるや否や、朋子は態度を硬くした。  
これまでも、周一郎と同席するのを好んではいなかったが、最近特に風当たりがきつい。言い捨てて振り向くこともなく、部屋を出て行ってしまふ。  
慌てて給仕が付き従っていく……あれ？  
「日本語で通じてる？」  
「簡単な指示や命令ならば、日本語でできるですよ」  
ぽかんとする俺に、周一郎が淡々と教えてくれた。  
「へえ…」  
振り回されて腹が減ったのと疲れたので、とにかく目の前の料理に飛びつく。  
「ところで、玲奈、さんは」  
もぐもぐと口を動かさず合間に尋ねると、  
「事情聴取中です」  
「また？」  
俺はごっくんと呑み込んだ。  
「同じ事を何度聞いたって、同じ答えしか返らないだろうに」  
「警察の見解は違うようですね」  
周一郎は皮肉な笑みを押し上げた。何を考えているのか、サングラスを外しているのに表情が読めない。  
「あ、そう言えば、お前の客は？」  
「部屋で待ってますよ」  
「へ？」  
きょとんとした。食べ物もしっかり腹に入ってきたし、やっとな頭がまともに回転してきた感じだ。部屋で待ってるって、犬や猫じゃあるまいし、そう思った途端に気がついた。  
「まさか、客って」  
ぱたん、と激しい音が響いた。勢いよく閉まった扉、そちらを振り向いた俺の視界に疲れた顔の玲奈が飛び込む。  
「……滝さん、周一郎さん……申し訳ありません、ご一緒できなくて」  
「そんなこと」  
「別に結構です」  
大丈夫ですよ、と労りかけた俺を、周一郎が遮るように立ち上がり、じっと玲奈を見つめる。黒い怜悯な瞳が玲奈を捉えると、なぜか彼女が目を逸らせた。  
「今度も黙ったままでいるつもりですか？」  
「周一郎さん！」  
顔を背けたまま叫び返し、すぐさま、叫んだのを恥じるように、玲奈は緩やかに目をあげて周一郎を見返した。  
「あなたって人は」  
嘲るような声だ。  
「本当に『氷の貴公子』なのね。知ってるでしょ。知ってるくせに、いつも黙っていて……大悟の時もそうだったわ。一言も言わずに、そのくせ…」  
膨れ上がってくる涙の粒を堪えようとするように、軽く首を横に振った。  
「そのくせ……人が追い詰められるのを見て、喜んで！」  
「……僕には話せないでしょうが」  
それとわかるほどの淋しい笑みに一瞬唇を歪めて、俺を見つめる周一郎の目は自嘲を浮かべている。

ほら、僕ってのはこういうふうに見えるんです。  
淡々とした立ち姿に、肩を竦めてみせる周一郎が二重写しになって、そんな事ないぞ、と思わず口に出しかけた、が、一瞬早く、周一郎がことばを継いだ。

「滝さんになら、話せるのではありませんか？」

「滝…さん？」

玲奈は俺を見つめた。

「はい？」

ついひのせられて、引き攣った笑みを返すと、綺麗な微笑が玲奈の唇に滲んだ。

「滝さん……本当に、信じて下さる？」

相次ぐ事情聴取で疲れ切っているのか、幼い少女のような尋ね方だ。

「え、ええ」

どぎまぎする俺を、あの茶色の瞳で見つめる玲奈に、周一郎が背中を向け無言で部屋を出て行く。それを待っていたように、玲奈が口を開いた。

「悟さんが、あんなことができたわけではないんです」

「あんなことって…」

俺はテーブルについている男をちらりと見た。だが、相手は俺と玲奈の会話を単なるラブ・シーンとしか思っていないらしく、見てみないふりをしているようだ。

「海部さんを殺したこと？」

「ええ」

「でも、あの時確かに、僕らは黒づくめの服の男を」

「いいえ、いいえ！」

玲奈は激しく首を振った。思い詰めた表情で俺を見上げる。

「だって、悟さんは」

「悟さんは？」

「……だめ…。…滝さん、ちょっと待っていて下さい」

玲奈はふらりと俺の側を離れた。よろめくような危うい足取りで部屋を横切り、入って来たドアの外へ出て行ってしまふ。取り残された俺は妙に不安な気持ちを持って余して、突っ立っているばかりだ。

一体、玲奈は何を言おうとしてるんだろう。まさか、敏人殺しを告白する、とか？ いやまさか、冗談じゃない、どうして玲奈が敏人を殺さなくちゃならないんだ。朋子の話によれば、玲奈は敏人の愛人だったはずだし……そりゃ、確かに金が必要だったかも知れないけど、あんなきれいな人が人殺しをするなら、世の中の美人という美人はみんな要注意人物だってことにならないか？

ふと思いついた格言がショッキングピンクで点滅する。『綺麗な薔薇には棘がある』。ええいくそ、誰だ、こんなことばを考え出したのは。

「あうっ!!」「わ!!」

突然響いた悲鳴と同時に聞こえたどさりという物音を耳にして、俺は飛び上がった。今玲奈が出て行ったばかりのドアの外から聞こえたようだ。左脚をひきずりながら走ってドアを押し開け、倒れている人物に愕然とする。

「玲奈さん!!」

栗色の髪がべっとりと血に塗れて床に散っていた。青白い、妙に安らかな横顔に鮮やかな真紅の筋……俺の後ろから飛び出して来た例の男が、何事か叫んで俺を押しつけて玲奈に屈み込んだが、すぐに重々しく首を振った。

「そんな…」

ぼんやり顔を上げた俺の目に、廊下の曲がり角に消えようとする黒づくめの服の男が映る。

「あーっ!!」

「!!」

俺のわめき声に刑事風の男も顔を上げ、すぐに廊下を走り出した。だが、黒服の男は追手より遥かに足が速いらしく、みるみる姿を消す。

「…なんてこった」

(玲奈さんまで殺されちゃった)

俺は茫然と物言わぬ骸と化した玲奈の側に立ち竦む。

「一体…どうして…」

救いを求めた視線の先に、赤く血を浴びたローレライの置物が転がっていた。

## 5.猫は考える

「凄まじいことになっちゃったなあ」  
俺は溜め息まじりに呟いた。  
陽射しは明るく、緑豊かな城の庭園に満ちている。緑、深緑の垣が芝生を幾重にも切り、色鮮やかな花が咲き乱れるであろう花園は時期が早いのかまだ緑が多いが、ところどころに開いた薄桃の花弁が美しかった。上空から見れば、垣と花園、白い遊歩道と大理石の彫刻で構成されたこの庭園が、見事な幾何学模様になっているはずで、とどこか物憂げに話した栗色の髪の女性はもういない。  
「ドイツへ来て一週間もたってないのに、もう二人殺されちゃった」  
「…」  
側を歩く周一郎はさっきから考え込んでいて答えない。三つ揃いのベストとズボンとカッターシャツ、軽く緩めたネクタイの軽装に、目元のサングラスが妙に不似合いだった。横顔が固く、瞳が冷たい。  
「周一郎、お前の客、きのう部屋にいなかったな」  
「…ええ。ちょっと気になることがあるんでしょう」  
周一郎は、ふいに物思いから醒めたように応じた。眩そうに一瞬眉を潜め、サングラスを指先で押し上げる。突き放した口調に話の接ぎ穂を失って、俺はしばらく黙り込んだ。  
一体、何が起こってるんだろう、この穏やかできれいな景色の中で。  
「周一…」  
「滝さん」  
「な、なに？」  
もろに周一郎と被って声をかけてしまい、慌てて相手のことばを待つ。  
「いえ…滝さんからどうぞ」  
周一郎は少し赤くなり、俺を促すように立ち止まった。  
俺の背後には、白地に桜色の筋の入った石で彫られた乙女の像があった。彼女が佇むのは広々とした水盤、乙女の掲げ持つすなりした水瓶の口からは、きらきらと陽射しを跳ねる水が溢れて躍り上がり、快い水音をたてて同じ石造りの水盤に零れ落ちている。全体が淡い薔薇色に輝くような光景だ。  
「……うん」  
俺は少し口ごもった。  
「いや、悟……どうして玲奈さんまで殺したのかな」  
脳裏に過るのは、敏人の時も玲奈の時も、視界を掠めていった黒づくめの服だ。  
「悟じゃありません」  
「へ？」  
周一郎がぼつりと言い放ってぎょっとする。こちらを見つめ返すサングラスの奥の瞳は、強い輝きをたたえている。  
「悟じゃないって…だって、あの黒服の男」  
「滝さん!!」  
突然明るい声が響いて振り返った。遊歩道を軽やかに走ってくるのは朋子だ。父を殺され、身内同然に側に居た秘書も殺された朋子。母親は早くに亡くなっていると聞いた。これで彼女はたった一人になってしまった。  
「ここに、いるの、見えた、から」  
すぐ側に立っている周一郎を完璧に無視して、朋子は軽く息を切らせながら、俺だけに話しかけてきた。彼女の足下にはカツツェがじゃれつきながら俺を見上げている。朋子も同じように俺を見上げる、まるで肉親を見るような目で。  
（あ、れ？）  
ふと、その朋子の顔に誰かの顔が重なりかけて、俺は目を擦った。  
「何？ 目にゴミでも入ったの？」  
「いや、そういうわけじゃ……それより、大変だね、これから」  
口に出してから、言わなくていいことを言ったと気づいた。明るかった朋子の顔が見る見る曇る。  
「そう…ね」  
妙な虚ろさを含んだ声で朋子は呟いた。  
「でも……今までだって同じようなものだったわ。おとうさんはほとんど家にいなかったし、居ても玲奈さんと一緒に事が多くて…」  
朋子の沈んだ声に、父親とその愛人が居る部屋の外、入るに入れなくて立ちすくんでいる彼女を想像した。わがまま勝手なお嬢さんだが、それなりに淋しい想いをしてきたのだろう。  
「マリーネとはよく話したけど、所詮、召使いだもの、相手にならないわ」  
同情したとたんにこれか。  
「あんまり、そういうことを言わない方がいいと思うけど」  
あからさまに蔑んだ口調にむっとする。  
「でも、マリーネなんか、学校も行っていないのよ、碌な育ち方してないわ」  
「言っとくけど、俺もロクな育ち方してないよ」  
ぼそりと言い返す。学校も行っていないしな……事情は違うけど。  
「え…」  
はっとしたように朋子は瞬いた。高慢そうな表情が消えて、あどけないほど幼い顔になる。  
「滝さん、怒ったの？」  
不安そうに見張った目が、また誰かを思い起こさせた。  
「そうじゃないけど」  
「滝さん、こういうこと言う女の子は嫌いななの？」  
畳み掛けてくるように尋ねられて焦る。  
「いや、その」  
「あたしなんか嫌い？ 玲奈さんみたいなひとが、やっぱりいいの？」  
「つまり俺は」  
「帰らないでしょ？ すぐに帰らないわよね？」

「ちょう」

「あたしを一人にしたままにしないわよね？」

んじゃ何か、俺にあんと結婚しろとも言うのか、一生ドイツで暮らせつつ一のか。それとも、これは新手的のからかいか、詐欺か、本気にしたら及びじゃないわよと舌を出される例のオチか。

「ちょっと待った」

慌ててつつ焦りつつ、普段もてない男の悲しいサガと言うのか、あれやこれやを一気に考えて混乱し、思わず一步下がって相手を見つめ返すと、朋子は今にも泣きそうな顔になっている。

「滝さんまであたしを見捨てないよね？」

ああ、そうか。

ふいにすとんと落ちた。

要は、朋子は受け入れてくれる相手を求めているのだ。それで、たまたまカッツェを助けてくれて、しかも彼女に優しくした俺に、その役割を求めているのだ。

そりゃ、父親には愛人がいるし、婚約者は冷たい上に、恋人とは別れ別れになっちまってるもんな。

俺は思わず隣の周一郎をじろりと見やった。

周一郎は複雑な表情で朋子を見つめている。珍しく、何だか少し照れているような困惑しているような、それに、何だろう、微かに疑っているような？

「滝さん！」

「あ、ああ」

朋子に重ねて呼びかけられて我に返った。

「いや、ほらさ、見捨てるってのはおかしいだろ、朋子ちゃんは俺達を招待してくれたわけだし、周一郎の元婚約者だしさ」

「っ」

周一郎の名前が出ると、朋子はびくりと体を強張らせた。今初めて、側に立っているのに気づいたような顔で周一郎を振り向き、怒ったように眉を上げる。

「どうして、あなたがここに居るのよ?!」

いやいや待て、後から駆け寄ってきたのはあんたの方だぞ。周一郎は最初からここに居たわけだし、な、周一郎？

反論込めて少年を見やると、相手は何も答えずにじっと朋子を凝視している。

「やめてよ、その目！」

朋子が吐き捨てた。

「いつだって、その目ばかりだったわ。悟ったような口ぶりで、人を見透かしてる顔して！」

苛々とののしる。実はそれが比喩じゃなくて、事実だとは思えない。周一郎は実際人を見透かしている、表の顔を裏の顔が切り替わっていく、その境界線を。

「玲奈さんが言ってたわ、あなたは『氷の貴公子』だって。朝倉家が伸びたのは、陰にあなたが居たからだって。人の心なんか持たない人、おとうさんを仕事に連れて行ってしまった人！」

朋子の口調が激昂するのに反比例して、周一郎はしいんとした顔でひたすら聞いている。自分の罪状を読み上げられる犯罪者のように、奇妙な静けさで耳を傾けている。

「あなたがいなければ、おとうさんももう少し側に居てくれたかもしれない。悟さんと引き裂かれることもなかったわ。あたしは一人になることがなかったわ。滝さんだって！」

「ちょ、ちょっと朋子ちゃん」

つい、割って入った。父親や恋人のことはいいとしても、俺のことは関係ないだろう。

「何も周一郎のせいばかりじゃ」

ぎらっとこちらを見返した朋子の目に、ぞっとするような殺気があった。思わずことばを呑み込むと、朋子は唇を噛み締め、眉をひそめ、それでも俺が何も言わないと知ると、苛立たしそうな顔になって、いきなり右手を振り上げた。止める間もなく、陽射しを跳ねた白い手が周一郎の頬に吸い込まれる。

パンッ！

「ともっ」

揺れた周一郎を庇って伸ばした俺の手を振り返り、

「あたしにないものばかり持ってるくせに」

潤んだ瞳で俺を睨みつけたと思うと、朋子は身を翻した。駆け去ろうとした瞬間、ちらっと素早く周一郎に視線を送ったと同時に、渾身の力を込めて突き飛ばす。さすがに想定外だったのか、周一郎がバランスを崩して仰け反った。

「あ」

「おい、…わ！」

とっさに周一郎の手首を掴んだ俺もろとも、周一郎は背後の水盤に落ちた。背中から落ちた相手と違い、まともに頭から水に突っ込んで、溺れるっ、とうろたえた俺の耳を、ヒステリックな叫びが打つ。

「大っ嫌い!!」

「げはっ！ うはああっ」

水瓶の水をもろに受けている位置から慌てて起き上がる。

隣に水盤に尻餅をついた姿で濡れそぼった周一郎が居た。くせのない髪の毛がぴったりと額に張り付き、サングラスが吹っ飛んだ顔は妙に幼く見えた。

「あ…」

突然気づく。さっきから朋子に重なりかけていた顔は、周一郎のものだったんだ、それも初めて会った頃、意地っ張りで憎たらしいばかりのクール少年の。

いろいろ何となく腑に落ちた。

そうか、それで俺は朋子が気になったのか、拒めなかったのか。

「まったく、何だってんだよもう……大丈夫か？ 周一郎」

「あ…はい」

茫然としていた周一郎が振り仰ぐと、髪から水滴が輝いて散った。何をやっても決まる奴は決まるって見本だな、水も滴るいい男って奴か、ええ？

「女の子ってのはわからんな、ほんと……エーックショイ！」

派手なくしゃみをたて続けに出し、じゃばじゃばと水を跨いで水盤から出る。その背中から、小さな声がした

。「朋子さん」  
「は？」  
振り返ると、  
「滝さんが好きなんですね」  
滑らかな動作で身を起こしながら、周一郎が呟いた。  
「お、れっ？ 俺かっ？」  
「…くしゅっ」  
どもる俺に微笑した周一郎は、ことばを続ける代わりにくしゃみをした。三月とは言え、水遊びには早すぎる、ましてやドイツの気候は日本より肌寒い。体を震わせながら俺に続いた周一郎は、何かに気づいたように視線を上げた。俺もその視線を追って振り返る。  
「Herr Asakura！」  
薄茶色のおさげを振り立てて走ってきたのは、マリーネだった。彼女は俺達の様子を見ると目を見張り、早口のドイツ語でまくしたてた。周一郎が首を横に振ると、紅潮していた頬をより一層赤くして、違った調子で話し出す。その中でサトルということばが聞こえて、はっとした。  
「何？」  
「…」  
俺に答えず、周一郎は話し続けるマリーネのことばを難しい顔で聞いている。途中でぴくりと肩を震わせ、なおしばらく話を聞いていた後、何かの指示を与えた。大きく頷いてマリーネが駆け去る。  
「何だった？」  
俺の問いに、周一郎は緩やかに頭を巡らせた。陽射しの中、妙に寒々とした表情は、濡れているばかりではないようだ。淡々とした声が続く。  
「本田悟が殺されていた、と。事情を知らないかと言って警察が来ているそうです。行きましょう、滝さん」

それから数時間に渡る、小刻みの、手間のかかる事情聴取に、俺も周一郎の通訳で参加させられた。  
もっとも、俺も周一郎も本田悟には会ったこともないし、見たことも一朋子の部屋での対面を別にすればだが、どうせ生では会ってないのだから、その件に関する事は比較的手軽に済んだのだが、問題は本田悟の死が巻き起こした波紋にあった。  
悟は、一週間近く前、つまり、俺達がドイツへ着いた日に殺されていたのだ、それも、俺達が降り立ったハンブルグの空港で。  
「…ってことは、あの騒ぎがそうだったのか?!」  
喚いた俺に、ドイツの警察側の人間、ハインツが不審気に眉を潜め、周一郎が俺のことばを通訳してくれる。  
「Na ja.」  
ええ、まあ。  
そんな調子でハインツは禿げかけた頭を頷かせた。丸っこい茶色の目で俺を探るように見つめ、話を続ける。悟は一年前の宣言通り、朋子を連れて行くつもりでドイツへ舞い戻って来ていた。目立たぬ質素な服に身を包み、二人分の旅券を手に入れて。  
だが、俺達がドイツの土地を初めて踏んでいた時、激情に振り回された恋愛は終わり、その命も奪われていたのだった。  
俺の脳裏に、見かけた玲奈の緊張に強張った顔が浮かんだ。それに、その顔を見たすぐ後に起こった、あの騒ぎ。  
「じゃ、じゃあ」  
慌てて口走る。  
「玲奈さんが悟をってことも……え？ ちょっと待てよ、悟があの時死んでいたなら、誰が敏人と玲奈さんを殺したんだ？」  
互いに絡み合い、糸を引き合っただけでああ、と納豆化してくる考えに混乱する。  
周一郎の通訳にハインツが大きく頷く。まくしたてた早口のドイツ語を、周一郎が俺に伝えるのを、彼は辛抱強く待っている。  
「そう、我々も、悟が敏人と玲奈を殺したのだと思って捜査していた。空港の方では、こちらの事件とは繋げておらず、日本人だったので日本へ情報と遺体を送ったそう。空港の犯人の捜査と我々は連携していなかったが、あちらは遺体の少年と話していた女性が居たという通報から、こちらに辿りついたということだ。我々の捜査もふりだしに戻るしかない」  
コン、と周一郎は小さく咳き込んだ。噴水に落ちて濡れたまま、まだ乾き切っていない髪が揺れる。  
「我々は君達の協力を必要としている。なぜなら、今や君達こそが、この事件に関する唯一の関係者になりつつあるからだ」  
「そ、そりゃあ、協力はするけど」  
周一郎の通訳に戸惑う。  
「でも、俺だって何がどうなってんのか、全くわかんないんだぞ？ 黒づくめの服の男が悟だと思ってたし、悟が敏人と玲奈さんを殺してしまったんだと思ってたし……その悟が二人より先に死んでたってことは、他に犯人がいるってことだろ？ でも、他の誰が、何のために二人、いや三人を殺したんだ？」  
「いや、悟は」  
コンコン、と周一郎は咳き込んでから、ハインツのことばを訳した。  
「悟はおそらく玲奈が殺したのだろう。悟と最後に話していたのは玲奈だとわかっているし、彼女なら敏人の命令で殺すこともあり得る。敏人自身、或いは男なら、悟に近づきにくかっただろうが、玲奈なら、始めは金でカタをつけようと話しかけ、言うことをきかないと見たら隙を見て、殺すこともできるだろ……っ、こふっ」  
「おい」  
俺は咳き込む周一郎に向き直った。  
「お前、顔色悪いぞ」  
「大丈夫、ですよ」

「大丈夫じゃないって！」  
周一郎の額に手を当てる。咄嗟に体を引きかけた相手にぴったりと掌をおしつけると、じんわりと、けれどはつきり温度差がわかる熱さが伝わってきた。  
思わず立ち上がる。  
「熱があるじゃないか！」  
「滝さん、まだ事情聴取が」  
「んなもん知るか！ ヘル、ハインツ！ エア、えーと、エアハストフィーバー！（彼は熱があります）」  
ハインツは一瞬非常に困惑した顔になった。ピラミッドの碑文を音読されたような表情で俺と周一郎を交互に眺めていたが、わずかに顔を紅潮させている周一郎の様子に気づいたのだろう、頷いて席を立ててくれた。俺は慌ただしく差し出された手を握り返すと、周一郎を引きずるように部屋から連れ出した。  
「滝さん、ちょっと…」  
「ちょっともくそもねえ！ 苦しいなら早めに言えって言ってるだろうが！ お前はマゾか！」  
廊下をずんずん歩きながら、マリーネを見つける。  
「おら！ 先に着替えてベッドに入ってる！」  
驚いた顔のマリーネにくるりと向き直る。  
「マリーネ！ エアハストフィーバー！ えーと、え、エア、ケルトウング！（風邪）」  
「Ach, so！」  
両手を口に当ててマリーネは重ねて驚き、急いで廊下を走り去る。  
「通じたか…？」  
懸念は不要だった。数分後、すぐに彼女は一人の男を連れて戻ってきた。小さな黒い鞆を下げ、きびきびとした仕草で部屋に入っていく。  
「医者か！」  
ほっとして俺も後から部屋に入る。  
さすがにへたっていたのだろう、周一郎はぐったりした顔でベッドに座っていた。  
「Was felt Ihnen？」  
「Ich habe Husten…」  
「Husten？」  
「…ja…」  
医者は周一郎を覗き込み、脈を取り、聴診器を当て診察していたが、やがてマリーネに向き直ると何かの指示を与え、急ぎ足に出て行った。周一郎を振り返る。  
「なんて言った？」  
「風邪らしいです。肺の音に少し問題があると。けれど、投薬するほどでもないだろうと……暖かくして」  
マリーネがさえずるように周一郎に話しかける。俺は慌てて口を挟んだ。  
「付き添いなら、俺がやるからって」  
「はい…」  
弱々しい笑みを返した周一郎は、彼女にうまく伝えてくれたようだ。マリーネがにっこり笑って、俺の手にいつの間にか準備してくれたアイスノンを渡してくれた。そのまま部屋を出て行く。  
「氷枕か。これをあてるんだな。で、後は暖かくする、それから？」  
「しっかり眠って休養をとること。若いのに人生に疲れているようだ」と苦笑されました。食べ物はマリーネが準備してくれたそうです。  
「わかった、それじゃ寝ろ」  
アイスノンを準備されていたタオルでくるみ、枕にのせてゆっくり周一郎が横たわるのを手伝う。  
部屋の灯を消してやると、まるで入れ替わるように、周一郎がぱっちり瞳を見開いたのがわかった。  
暗闇の中、微かな光を全て吸い込もうとする、猫のような目。  
「…眠る気がないな？」  
「無理そうですね」  
周一郎は苦笑を漏らした。  
「……滝さん？」  
「ん？」  
「すみません」  
低い声が謝ってきよんとする。  
「何が」  
「また、こんな事に巻き込んでしまって」  
「慣れてるよ、厄介事にぶつかるのは」  
どうせ俺は厄介事吸引器なんだ。  
そう続けかけたが、落ち込みそうになったのでやめて、話を変える。  
「……玲奈さん」  
「え？」  
「いや、お前……ひょっとして、玲奈さんが悟を殺したのを知ってたのか？」  
ふと、空港での周一郎の態度、敏人殺害で玲奈が悟に罪を着せようとしたのだという俺の説に同意しなかった周一郎が甦ってきた。少しのためらいの後、周一郎は微かに頷いた。  
「いつ？」  
「空港で。あの時僕は、玲奈の向こうに本田悟の姿を見ていたんです。悟の事は知っていた……だから、あそこで騒ぎが起こった時、すぐに玲奈を疑ったんですが、本当に殺したのかどうか確証はなかったし……玲奈がどういう手を打ってくるかもわからなかった。だから……黙っていたんです」  
にじみ出るような苦さがある口調だった。きっと、俺が玲奈に魅かれているのも知っていただろう、周一郎なら。  
じっとベッドに横たわった顔を見つめる。  
「けどさ、敏人と玲奈を殺したのが悟じゃないとしたら……誰が？」  
「そう…僕は…」  
コン、と周一郎が咳き込み、我に返る。  
「……と、寝ろ、周一郎。あんまり楽しい話でもないし、今は体を治すのが先だ」

額にうっすらと浮かんだ汗を、用意されていた濡れタオルで拭ってやる。周一郎が目を閉じ、小さく呟いた。  
「すみません」  
「いいか、周一郎」  
びたん、と濡れタオルを絞り直して額にのせる。  
「次謝ったら、友達の縁を切るぞ」  
「…はい」  
くすりと笑った周一郎の唇は、しばらくすると静かな眠りに解けていった。

## 6.碧緑の間(1)

翌日も、周一郎の容態ははかばかしくなかった。  
「あっと、ダンケ、マリーネ」  
朝食を持って来てくれたマリーネが、にこりと邪気のない笑みを見せる。  
(やっぱり誰かに似てるな)  
盆を受け取りながら、またそう思った。  
薄茶のおさげを揺らせて、マリーネは周一郎を覗き込む。  
「Gute Besserung」  
「Danke schön」  
熱に頬を紅潮させた周一郎が微笑んで、頷いて出て行くマリーネを見送る。珍しい。  
「何だって？」  
「お大事に、って…」  
「そうだ、本当にお大事に、だ！」  
びたんっ、と半絞りの濡れタオルを周一郎の額に落とす。  
「夜中に起きてる病人がいるかよ」  
昨日の夜、ふと目を覚ますと、周一郎が半身起こして窓の外をじっと見つめていた。風邪を引いてるってのに、体に何も羽織らないまま、闇に目を凝らして何かを待ち受けている。俺はすぐさま、周一郎を強制的にベッドに押し込み、その後はずっと、この馬鹿が起きることがないように目を光らせていたのだ。  
「みろ、しっかりこじらせて……飯、食うだろ？」  
「あんまり欲しくないんです」  
「あんまりってことは、少しは食えるってことだな。ほら、このスープだけでも飲んで。……ああ、こら、ちゃんと上に何か羽織れってのに！」  
学習能力がないのかお前は。  
俺の怒鳴り声に肩を軽く竦めるといふ気障なポーズで応じて、周一郎はもそもそとガウンを引っ掛け、スープ皿を受け取った。  
「あつ」  
「中身を食えよ中身を」  
「……ふう」  
一口ずつ、それはそれは面倒そうに口に運ぶ周一郎の目は、妙に遠い。気配もどこか薄いのは、病んでいるからというだけではなさそうだ。何を考えていやがるのか、何となくわかるような気がする。また、こういう類の事件を自分が引き寄せたとか自分のせいだとか、つまりは関係のない部分まで背負おうとしていそうだ。  
「ふんっ」  
「ばくん、とパンに噛みつき、スープをごくごく飲む。熱い。旨い。とにかく、こういう時はしっかり食わないとな。」  
コンコン。  
「ぶあい」  
口に詰まっていたパンを慌てて呑み込み、ノックに応じて立ち上がる。周一郎が顔を上げ、急いでスープ皿を置いてサングラスをかけるのを横目で見ながら、歩み寄ってドアを開いた。  
「あ…」  
そこには、小さな鍋を持った朋子が立っていた。  
「何だ？」  
思わずぶっきらぼうに尋ねる。何だか似たようなことが昔あった気もする。  
「あの……これ……スープのお代わり……周一郎さんにとって、マリーネが…」  
朋子は蚊の鳴くような声で答えた。俺を上目遣いに見つめ、きゅっと唇を噛み、そろそろと手渡ししながら、ますます小さな声になる。  
「あの……ごめんなさい……あたし……そんな…つもりじゃ…」  
「…ああ」  
俺は溜め息をついて振り返った。ベッドの周一郎は不思議な表情で朋子を見つめている。  
「もういいよ」  
「……怒ってる、よね……滝さん…」  
語尾を震わせて朋子が呟く。  
「……怒ってない」  
ふう、ともう一度溜め息をつくと、相手がびくりと震えて、俺は眉をしかめた。  
「そりゃ、ちょっとは腹が立ったけど」  
こういうところがお人好しと言われる所以だろうか。けれど、自分のやってしまったことに怯えている娘相手に当たり散らすほど、俺は趣味が悪くない。  
「本当？」  
小首を傾げる朋子に、周一郎が重なって、俺は思わず微笑した。  
「うん」  
「滝さん！」  
「どわわっ！」  
ふいに抱きつかれて、あやうくスープのシャワーを浴びかけ、慌てて鍋を両手で支える。しがみついた朋子を何とか離そうと身をよじるが全く離れてくれないので、仕方なしにそのまま、周一郎の枕元のテーブルに鍋を置きに行った。  
周一郎の側に近づいていくと、朋子はびくりと体を強張らせたが、歯の間から絞り出すように掠れた声で謝った。  
「ごめんなさい……周一郎…さん」  
柔らかで優しい声、その優しさを逆に警戒するように、周一郎が目を細める。が、すぐに元の淡々とした表情に戻った。  
「いいえ、構いません」

ぎゅうっ、と朋子が俺にしがみつくと腕に力を加えた。どうもこの二人は相性というか、根本的なところで折り合いが悪いらしい。

「それで…ね…」

が、朋子は今度はすぐに事を荒立てなかった。猫撫で声で続ける。

「ちょっと滝さんを借りてもいい？ 滝さんに見せたいものがあるの」

「おい」

よく見てほしい、いやよく見なくてもわかると思うが、俺は今周一郎の看病中だぞ？ 見えてるか？ いや、理解してんのか？ この状態の元凶はそもそも。

「だって、滝さん」

唸りかけた俺を突然見上げた朋子の目が、妙に妖しい光をたたえていてドキリとした。思わず口を噤む。だが、それはすぐに消えてしまい、うんと幼い少女が何かを訴えようとする時に向けるようなひた向きな目に戻っている。

「あたし……一人…なんだもん…」

頼りなげな呟きだった。

「僕なら構いませんよ、滝さん」

周一郎が静かに口を挟んできた。ゆるやかに瞳を伏せ、体を倒し、上掛けを引き寄せる。

「だけど、周一…」

「Herr Asakura!」

俺の声を遮って、いきなり戸口からハインツが飛び込んできた。突っ立っている俺と朋子をちらっとは見たが、よほど急いでいるのか、すぐに周一郎の上に屈み込むようにしてドイツ語でまくしたてた。汗ばんだ額、唾を吐き飛ばしながらしゃべる様子から、何か重大な事がわかったらしい。

「Wie bitte?」

ぼんやり聞いていた周一郎がはっとしたように尋ね直す。何と言った、ぐらいの意味なんだろう、ハインツが大きく頷いて、ことばを繰り返す。

「周一郎?」

「黒づくめの服が玲奈さんの部屋で見つかったそうです。Wo ist es, Heintz?」

「Ja, Es…」

「ねえ、滝さん！ 行きましょう」

「え、ああ」

茫然としていた俺は強く腕を引かれて我に返った。

周一郎は体を起こし、今度はちゃんとガウンを羽織りながらハインツと話を始めている。長引きそうなのだろう。早口のドイツ語が、なお速度を上げて飛び交い、俺には全く聞き取れないし、わけがわからない。

周一郎が一瞬サングラスの向こうからこちらを見やり、軽く頷いた。すぐにハインツとのやりとりに戻っていく少年の頭は、もたらされた新たな情報の咀嚼に忙しいのだろう、俺はいなくていいということらしい。

「滝さん!」

「あ、うん」

繰り返し引っ張る朋子の存在も逆に邪魔になるかもしれない。

俺は引っ張られるままに廊下へ出た。と、向こうからばたばたと駆けて来た者がいる。マリーネだ。

「Fräulein!」

「Was?!」

苛立たしげに吠えて、朋子はそちらを睨みつけた。マリーネがペこりと日本式に頭を下げ、慌ただしく訴えかける。それを聞いていた朋子が眉を吊り上げた。

「何て馬鹿なの!」

いきなり叫ばれてぎょっとする。

「マリーネが台所でスープの鍋をぶちまけたらしいの。コック達が片付けにかかっているけれど、慌てたせいでそのあたりの食器も落としたんだって。割れたり散らばっていたりする食器の始末や何かで收拾がつかないんだって。『城主』のあたしに指示をして欲しいって言うのよ」

どこか誇らしげな声、『城主』という響きに、敏人も玲奈もない今、この城と富の全てが朋子に受け継がれるんだと思いついた。一瞬、朋子の目に、俺がどこかへ行ってしまうかというためらいが浮かんだ気がしたが、すぐに『城主』として采配を揮うことへの喜びに消えた。

「すぐ戻ってくるから、ここに居てね、滝さん」

廊下にかよ。

思わず言い返す。

「ああ、周一郎の部屋にでも居るよ」

「…」

俺の返事に答えもせず、ぷい、と朋子は背中を向けた。マリーネが困ったような、けれどどこか茶目つけのある顔で俺に再び頭を下げ、歩き出す朋子の後ろに従う。

「やれやれ…」

とことん、朋子は周一郎と慣れ合うつもりがないと見える。

向きを変えて部屋に戻りながら、けどな、と考える。

ここは城、だよな？ コックと言っても単に料理人というだけでなく、海部敏人や玲奈の指示で客を迎えたこともあるだろうし、パーティや何かもあったことだろう。そういう時に調理室は戦場さながらだっただろう。それを取り仕切るのがコック長のはずで、厨房には厳然とした何かの規律があるはずだ。なのに、たかが部下の一人が鍋をひっくり返し、皿を割ったからと言って、『城主』の指示を欲しがらるだろうか。

(それとも)

割った皿というのが、一枚数十万もするような代物だったとか？

(あり得る)

周一郎の屋敷の食器類を思い浮かべて思わず頷いた。これだけは滝様のいらっしゃる席では使ってはいけませんよ、と高野が岩淵に重々命じていたのを見たことがあるし、後でこっそり、その一棚で高級車が十台ほど買ってしまうの額だと聞かされた時には、天変地異が起こってもあの棚には近づきまいと思ったほどだ。

(けど、それはそれで妙なんだよな)

パーティもない賓客もない、警察が出入りし、殺人犯を探しているこの城で、なぜそんな高価な食器を出していたのだろう。それとも、俺が気づかないだけで、さっきのスープ皿とかパン皿とかが、既にそういう類のものだったのだろうか。

「あり得る！」

「うわあ…」

頼むからそんな危険物で飯を食わせないでくれ。

引き攣りつつ、できるだけ早く食器を厨房に戻そう、そう考えていた俺に、出て来たハイイツが危うく鉢合わせしかけた。

「げ！」

「Pardon」

さすがに相手は慣れたもの、するりと身を躲してくれてほっとする。が、ぽつりと口にして朋子と逆方向に歩いていくハイイツの顎は固く強張り、心なしに顔色が悪かったようだ。足下にいきなり暗闇が口を開けていたのに気づいたような、もう少しで自分がそこに足を踏み込む直前だったと知ったような、冷や汗を浮かべた顔、戸口から離れ際に一瞬だけ周一郎を振り返った瞳は、どこか怯えたような色をしていた。

「……滝さん」

部屋に入ると、訝しげな声が響いた。

「行かなかったんですか？」

目を細めて見上げてくる。

「ああ、何か、厨房で問題が起こったらしくて、マリーネが朋子ちゃんを呼びにきて……………それより」

俺はハイイツが出て行った戸口を振り返る。

「何言ったんだ？ かなり青くなってたぞ」

「ちょっと、ね」

ふ、と周一郎は唇を上げた。妙に凄みのある大人びた笑み、目元にサングラスがない顔は年相応よりやや幼い造形だけに、笑みだけが不安定に宙に浮いた感じがある。

「今度の事について、僕なりの見解を少し」

「見解？」

「仮説です。ただ……………まだちょっとだけ引っ掛かる所はあるんですが…」

「どんな仮説だよ」

俺はよいしょ、と手近の椅子に腰をかけた。あの様子じゃ、朋子が戻ってくるまでにはまだまだかかるだろう。

「敏人と玲奈さんを殺した犯人でもわかったのか」

名前の呼び方に差が出るのは関係性の違いという奴だ。

「敏人と玲奈、じゃありません」

周一郎にとっては、どちらとも薄くて軽い関係らしい。

「あん？」

「二つの殺人は、『同一犯人ではなかった』という可能性があります」

「な、に？」

周一郎は羽織ったガウンをかき寄せ、目を伏せた。

「確かに滝さんは同じ『黒づくめの服の人間』を見た……………でも、同一人物かどうかは見えていません」

「ま、待てよ」

思わずどもる。

「確かに、そりゃ、そうだが」

言われてみれば、確かに。浮いた腰をどすん、と椅子に降ろす。

「(ってことは?)」

「いいですか？ 僕達が知ったのは遅かったけれど、悟は事件が起こる前に既に殺されている。殺したのは玲奈、でほぼ間違いないでしょう。死んでいる悟が、敏人と玲奈を殺せるわけがない。誰か第三者が居る、と誰もが考えることですよ」

周一郎は目を上げ、次第に眩さを増す陽の光に目を細め、サングラスをかけた。

「だけれど、ここで二つの殺人事件が同一犯人の手によるものでなかったとしたら、単に第三者というだけではない、ごく身近に居る、もう一人の人間が犯人になることが可能です」

「え、いや、待てよ」

俺は頭に閃いた顔にうろたえた。

「玲奈が殺された時、滝さんがその場で見なかった人間。それでいて『黒づくめの服の人間』がどのような格好をしていたのか、知っている人間」

「けど、あの子は！」

朋子は、初めて黒づくめの服の人間を見た時、俺と一緒に居たじゃないか。

反論しかけて、ようやく周一郎のことばが重みを増して響いた。

『同一犯人の手によるものでなかったとしたら』

俺は逃げた奴の服を見ただけだった。顔を見たわけじゃない。

もし朋子が、その敏人殺しにひっかけて、カモフラージュしようとしたのなら、できないことではなかったはずだ。

「でも……………どうして玲奈を殺さなきゃならない…？」

俺は唸った。

「それに、もしそうだとしたら……………敏人を殺したのは……………玲奈なのか、やっぱり…？」

玲奈の部屋で見つけたという黒服を考える。

「玲奈が、そんなへまをすとは思えない」

周一郎は始めの問いを故意に避けるように応じて、軽く首を振った。

「あり得ませんね」

犯罪の証拠を自室に隠すなんて。

コン、と思い出したように咳き込む。

「彼女が敏人を殺すつもりなら、もっと万全の準備をしていたでしょう」

「けど、朋子ちゃんは俺と居たんだし！」

「そう、彼女以外で、敏人に警戒させなかった人間です」

「じゃあ、誰が…」

呟きかけて、みいん、と小さな鳴き声を聞いた。びくっとする俺の足下にいつの間に入ってきていたのか、カツエがまとわりついてくる。

「……お前だけかよ」

一瞬周囲を見回し、戸口の向こうにも誰もいなさそうなのにほっとして、抱き上げる。カツエはごろごろと喉を鳴らして、俺の腕で落ち着く。ほんと素直で人なつこいな。主人に半分分けてやればいいのに。

「……そうか……それじゃあ」

ハインツも青くなるわな、と思った。

朋子はきっと捜査対象から外されていただろう。頼りなげで幼い少女に見える、とても人殺しなどしそうにない。それに、二つの事件は同じ男の仕業だと思い込まれていた。根っこのところから、捜査方針の立て直しだ。

「ん…」

ふと目を上げると、周一郎が物憂げにサングラスを外し、再び横になろうとしている。何気なくスープ皿を見ると、あれから一口も減っていない感じだ。

「こら」

「はい？」

「もう少し食っとけ」

あーもうーも聞かずに、スープ鍋から新しいのを継ぎ足す。露骨に嫌そうな顔になる相手に、いそいそともう一掬い追加した。

「僕は」

「俺にずっとここで張り付かれないか？ 下の世話まで見て欲しいか？」

「……嫌です」

ひどく不愉快そうな顔で、溜め息をついて周一郎が起き上がる。

そうさそうさ、病人は大人しく言うことを聞いてりゃいいんだ。まあ、もっとも、その病人に今何が起こっているのかを解説されてりゃ、世話ないが。

周一郎がこれみよがしに溜め息をついて、一匙スープを掬って口許へ運んでいくのを、いささか嗜虐的な満足で眺めた。腕の中のカツエが少しもがいて、ふわりとテーブルへ飛び移り、零れたスープをお相伴とばかりに舐め始める。

なるほど、厨房がそれじゃ、こいつの飯もあたってなかったのか。

「ぎゃおっ！」

「ひっ！」

突然、皮を引き剥がれたみたいな声を上げて、何かが戸口、俺の背後から飛び込んできた。青灰色の閃光となって周一郎に飛びかかり、体当たりでスープ皿を弾き飛ばす。

「ルト！」「ルトっ?!」

中身が床にぶちまけられ、皿が割れて散らばり、スプーンが跳ね飛んで高そうなタペストリーに当たった。

「うわあああっ」

数百万っ。いや数千万かっ。

「お前一体何だよっ、てか、いつの間に来やがった！」

周一郎の膝の上で四肢を踏ん張っている猫に喚く。

ルトはきゅっと鼻に皺を寄せた。牙を剥いて嘲笑うような顔、冴えた金の目でぐい、と俺の視線を誘導する。

周一郎も同時にある一点に視線を向け、俺も吊られて振り向き、血の気が引いた。

「カツエ！」

床に薄茶の猫がひっくり返っていた。ひくっ、ひくっ、と小さな体を痙攣が襲っている。かっと思開いた水色の瞳が見る見る生気を失っていく。髭についたスープ、口許から零れた嘔吐物に、周一郎が淡々と断じた。

「毒物ですね」

## 6.碧緑の間(2)

一体誰が。  
一体誰が、周一郎を狙ったんだ。そして、何のために？  
誰にも言うな、と周一郎は口止めした。薄々誰がやったのか勘づいているような顔、もちろん、俺に解説してくれる気はなさそうだった。  
スープに毒を入れることができたのは、マリーネ、コック、そして、朋子。  
俺の右腕にほんの小さな子どものようにしがみついている朋子を見やる。  
ついさっきやってきて、周一郎から俺を引き離せるのが嬉しくてたまらないと言いたげな顔で、俺を連れ出したのだ。  
何度かふっと聞きそうになった、カツツェがどこにいるのか、気にならないのか、と。朋子の腕に猫はいない、今そこに俺の腕がおさまっている。けど、本当は何でもいいんじゃないのか、ただ温もりがあるものなら、猫であろうと人であろうと、と。  
それはきっと、あまりにも非情な問いかけだっただろうが。  
「朋子ちゃん、どこ行くんだい？」  
「玲奈さんから聞いてない？ 伝説の女城主がとても愛した部屋があるの」  
朋子は俺を見上げて無邪気に笑み綻んだ。  
「碧緑の間って呼ばれてるのよ、すごくきれいな部屋」  
俺の腕を離し、先に立って石の階段を降りていく。  
「地下にあるのか？」  
「うん。かなり広い部屋……ふふっ」  
何を思ったのか、朋子はふいに悪戯っぽく笑った。  
「このお城の中でも不思議な所よ。滝さん、勘はいい？」  
「どうだかなあ」  
「試してあげる」  
「俺の勘を？」  
「ふふふっ」  
黒ずんで湿った石段を降り切った所に、鉄製の浮いた扉があった。表面には、昔はさぞかし見事だっただろうと思われるレリーフが施されており、図柄はどうやら、かの有名な『ローレライ』らしい。  
「ここ」  
きしむ扉を、朋子は重そうに開けた。促され、朋子の後に続いて入る。  
「へ…っ」  
一瞬、水中に放り込まれたような感覚に眩んだ。視界一面に薄青、青、青緑、緑青、薄緑、深緑、さまざまの緑がかかった青と青みがかかった碧が広がったのだ。  
「これ、は…」  
茫然自失から何とか立ち直って、のろのろと周囲を見回す。どこからか光が入っているのだろう、地下にしては明るく、物の形もはっきりと見える。  
俺の立っている二m四方の空間から先は、幾重にも重なり突き出る石の壁で満ちていた。その壁の全てが、目の醒めるような新緑の緑から偶然に湧いた泉の青まで、曲がりくねり入り交じった模様も美しい貴石でできていて、じっと見ているとそのままする意識が吸い込まれていってしまいそうだ。それだけじゃない、壁どころか、床も天井も、部屋全体がそういった石でできていて、碧緑の間の名前の通りの見事さだ。  
「すごいでしょ」  
「ああ……すごいな」  
「本当はもっとすごいんだから」  
自慢そうに繰り返した朋子が、ついと歩を踏み出した。俺の腕をちゃんと突き、いきなりぱっと身を翻して壁の間に駆け込んでいく。  
「へ？ 何だ？」  
「ここね、迷路になってるの！」  
部屋のどこからか、朋子の声が響いた。  
「おとうさんがちょっと細工したけど、ほとんど昔のままよ。真ん中ぐらいにね、女城主の肖像画のある小部屋があるの！」  
たたたっ、たたたっ、と駆け回る軽い足音に混じって、朋子は語り続ける。  
「あたし、その部屋に居るわ！ 滝さん、迎えに来てね！」  
「えええっ」  
迷路？ 小部屋？ つまり何か、この中に俺も入れって？  
「そんな無茶な！」  
「滝さん、迎えに来ないと、あたしここから出ないわ。小部屋は石造りなのよ、何もないんだから、あたし餓死しちゃうわ」  
いやいや自分から飛び込んだんだから、自分から出てくることぐらいできるだろう、って、そんなことで出てくるような相手ではないか。  
「ちょっと待てよ！ 俺には無理だって、迷路なんて絶対無理っ！」  
「来てよ、滝さん」  
声がぼつりと淋しそうに訴えた。孤独な響き、何もかもなくした少女が、精一杯俺に甘えている、ととれないこともない、かもしれない。  
俺はおろおろして、迷路の入り口を見やった。ご丁寧に三つもある。朋子の入っていったのはどれだっただろう。  
「ううう…」  
泣きたくなってきた。こんな迷路を通り抜けられるなら、誰も城のトイレを探して迷うわけだろーが！ 入ったら最後、俺の方が骨になるまで出られないんじゃないのか？ だが、迎えに来なければ出ないと言われては、迎えに行くしかないんだよな、きっと。  
「滝さあん！

「…わかった、行くよっ」

ああ、ああ、逝く、逝けばいいだろう！

自棄になって手近の入り口に踏み込む。

「うわっ…」

瞬間にもう後悔した。遊園地にあるのよりずっとヤバそうだ。重なり合う緑と青、揺れ動いているように見える模様、ひやりと冷たい石の壁が息づいて自ら動いていくように見える。しかも直線の迷路じゃない、石の壁は微妙な曲面で削られ、しかもそれが一定の幅じゃなくて立てられ、立てられ……。

「あ…れ？」

俺はいつの間にか元の入り口に放り出されてしまった。朋子が入ったのとは違う入り口に飛び込んでしまったらしい。慌て気味に残った一つに飛び込もうとして、もろに壁にぶつかって跳ね飛ばされる。

「んが！」

まっすぐに中へ続いていると思ったのは錯覚、すぐ手前で通路が直角近くに曲がっている。したたか打った頭を擦りつつ、よろよると立ち直り、今度はそろそろと迷路の中へ歩いていった。

煌めく陽射しが壁に当たって緑色を跳ね、俺の薄ぼやけた陽炎のような像を別の壁へと映し出す。ドイツへ来てから、とにかくやたらと捻りっぱなしの左脚を引きずって歩いていくと、通路が二手に分かれた。ちょっとずつ先を覗いて、右の方を選び歩いていく。

揺れる光、揺れる青、揺れる世界、揺れる俺。

「ねえ、滝さん」

「…は？」

迷路に意識を呑み込まれかけていた俺は、突然聞こえた朋子の声に立ち止まった。

「疲れた？」

「かな……ああ、ちょっとは」

吐息をつく。どうやら朋子には俺の姿が見えるらしい。再びゆっくりと歩き出す俺に、

「そこ、左に行っちゃだめよ」

アドバイスが聞こえた。右へ歩いていくと、また呼びかけてくる。

「滝さん」

「ふあい」

「人生って、迷路みたい。一つ道をまちがえると、何もかも見えなくなって、一度曲がりまちがえただけで、どんどん狂ってっちゃうの」

そして、もう、戻れないのよね、どんなに願っても、望んでも。

「朋子ちゃん？」

そのことばに含まれた虚ろさにどきりとした。

「ほら、滝さん、今右に曲がったでしょ？ でも、それ、間違ってるかもしれない」

「う」

俺は一気にめげた。それでなくとも、今自分がどこにいるのか、全くわからないのだ。

「でも、滝さんはそれを知らないで曲がるでしょ？ 曲がった時には先は見えないよね。先がどんなことになってても、滝さんが右に曲がった時は誰も悪くない。滝さんの責任じゃない」

朋子の声に奇妙な調子が混ざっていた、背筋を何となくぞくぞくさせる何かが。皮膚を軽く粟立たせながら、俺は何個目かの分かれ道を左へ曲がった。

「でも、ひょっとしたら、もうほんの少し、その曲がるときがずれていたら、運命は変えられていたかも知れない」

「はふ」

運命がどうしたって？

息を切らせながら考える。

んなら、このクソ迷路が、無機物のくせに人間様に逆らう気か、そのうちに見てるよ、ああそうだ、お前なんかしっちゃんかめっちゃんに爆破して撃破してぶち抜いてやるからな。

「ふう」

詰った勢いで逆に疲れて溜め息をつく。

嫌いだ迷路なんか、もう俺は金輪際、どれだけ誘われても遊園地の迷路にさえ入ってやらないぞ、いいんだなそれで。

泣き喚いてやろうかとも思ったが、朋子がどこからか見ているのだろう、さすがにそれは大人としてどうかと踏みとどまる。だが、せめて座り込むぐらいはいいんじゃないかと情けないことを考え始めた矢先、足下にふわりと柔らかい感触が寄り添ってきた。

「うな？」

見上げてくるきらきら輝く宝石の瞳、小首を傾げる、からかうように。

「ルト！」

俺は思わず小さく口を開いた小猫を抱き上げて頬ずりした。

「助けに来てくれたのかそうだなうん嬉しいぞおい！」

「にぎゃ！」

よせよっ、そう言いたげにルトは巧みに身をくねらせ、するりと俺の腕を擦り抜けた。床に飛び降り、すたすたと一つの通路に向かって歩き出す。

「お、おい、ルト！」

俺の声に、ちょいと青灰色の猫は振り返った。ついて来いよ、と言いたげに片耳だけを軽く倒し、すぐに、顔のサイズからは少々大きすぎる耳をびんと立てて歩き出す。俺が後をついて行くと、ややこしく重なる青緑の迷路を軽々と踏破して導いていってくれる。俺の迷い方を見るに見かねたというような足取りで、角に来ては早く来い、と、例の、声を出さずに口だけを開けてみせる鳴き方をした。

ルトの先導でどれぐらい引っ張り回されたのか、かなり時間がたった後、俺はようやく朋子の待つ小部屋に辿り着いた。

そこは、迷路を形作る石で囲まれた中心部で、聞いていた通り、正面の壁には薄茶色の髪の良い貴婦人の肖像画がかかっている。

壁際の石を積んだ簡単な椅子に、朋子は物思いに沈みながら座っている。心得たように、ルトがついと俺の背後に隠れる、それと同時に朋子が俺に気づいた。

「滝さん！」

飛びついてきた朋子の目に何か光っていたような気がして、俺は朋子の顔を覗き込んだ。

「…うん」

朋子は頷き、俺を見上げた。

「悟さんもね……悟さんもね……初めて、ここで会ったのよ」

ぼろぼろとその目から涙が零れた。

迷路の果てが泣き出した女の子かよ！ どっちも攻略不可能な難所、うろたえながら必死に声をかける。

「朋っ朋っ…」

「出会って…運命だと信じたの……だけど…悟さんも死んでたの！ 死んでいたのよ！」

「知ったのか。」

俺は眉をしかめて朋子を見下ろした。朋子は激しく顔を振りながら続ける。

「知らないよ、そんなこと！ 悟さんがあたしを置いて行く運命なんか、知らないもん！ そんな運命なんて選んでないもん！ あたしが曲がったのは……あたしが選んだのは……っ」

朋子は泣きながら訴え、ふいに俺を見上げた。涙で一杯の、痛々しいほど頼りなげな瞳が、俺の顔に焦点を合わせる。

「滝さん…」

「は、はい」

「あたしを置いていかないでしょ？ 周一郎と帰ったりしないわよね？」

「う」  
いやそれはどっちかという選択が間違っている。本来の婚約者は俺じゃなくて周一郎なんだし、俺はたまたまくっついてきただけの、言わば通りすがりのおっさんなわけで。

「滝さん…」

朋子は目を閉じてそっと唇を出し出す。

（どわわわわわ！）

助けてくれ。そんな心構えはしていない。スケジュールに入っていないし、注文もしていないし、必須科目でもない……連絡帳にも書かれていなかったぞ！

「…ん」

（うごごおお）

じりじり迫る朋子、じりじり仰け反る俺、これ以上は体勢が保てない、そう思った瞬間、

「にゃ」

「っ！」

天の救いの声、朋子がぱっと目を開け、弾かれたように振り返る。

緑青色に薄青の稲妻が走ったような模様の床石の上に、いつもなら青灰色の、けれど今は周囲の色のせいか、仄白く光を放っているように見える猫がちょこんと座っている。

「ルト…」

「にゃあ？」

ほっとしたのが顔に出たのは自覚した。相手は仕方のない奴だなという表情で俺を見上げる。

「何、この猫」

ぶっきらぼうな、ほとんど氷のような朋子の声。

「あ、ああ、周一郎の飼い猫だ。ルトって言うんだ」

「にゃあん」

そんなキャラクターではないくせに、如何にも可愛らしげに小首を傾げ、ルトは口を開いて細い鳴き声を響かせた。何かありましたか、どういうことなんですか、よくわからないんですけども。人ならばそんな風に聞こえただろう、上品な調子を裏切って、瞳は鋭く朋子を凝視している。

「……この猫に、ついてきたの…？」

質問形式だが、声は糾弾だ。

「あ、まあ……えーと、まあ俺よりこいつの方が賢いんだよ、ほんと……っ、朋子ちゃんっ！」

ぎょっとした。俺のことばが終わる前に、一歩進み出た朋子は、突然ルトを蹴ろうとした、それも容赦なく、叩きつけられれば確実に死にそうな鋭さで。

だが、ルトの方が一枚上だった。朋子の行動を予測していたように軽々と飛び退き、嘲笑うように口を開いた。真珠色の輝きをたたえた牙と赤い舌、そのまま身を翻して朋子の足首に噛みつきそうな挑発、互いの領分に戻った双方が睨み合う。

「と、ともこ……」

「くっ」

うろたえて声をかけた俺を憎々しげに振り返り、朋子はいきなり俺を突き飛ばした。

「わ！」

よろけて小部屋から突き出される。その俺をちらりと横目でみやって、朋子は小部屋の隅に下がっていた鎖の一本を引いた。ごりごりっ、と鈍くざらついた音が遠くで響き、すぐ側の壁が横へずれ込み、びしりと目の前で合わさる。別の場所でも、ごしっ、がんっ、どしっ、と壁がずれて動く音、合わさる音が次々と聞こえた。

「な、何っ」

「周一郎のことばかり、滝さん言うんだもん！」

だだをこねるような朋子の声が響き、その後はしんと静まり返ってしまう。

「え、何、ちょっとっ」

周囲を見回し、さっき通った迷路とは全く違うことに気づいてぞっとした。頼みの綱のルトもどこへ行ってしまったのやら、姿も形も見えない。

「冗談じゃないぞ！」

じゃ何か、自力でこの迷路・改、を出ろって言うのか。俺は渡り鳥でも渡り人間でもないんだ方向感覚はないんだ迷路に入った時点で全てが終わってるんだ、と喚き騒いでも後の祭り、朋子は完全に俺を放って行ってしまったらしく、うんとおすんとお答えはない。

「おい！ おい！ ……おーい！ ……おーい……い……おいおい…」

はああ。

俺は深く溜め息をついた。

はなから確かにこういう結末は見えていたような気がする。気がするのにまた、どうして俺はここに飛び込んでしまったんだろうな？

「迷路…か」

首を捻り、頭をかきむしり、何とか迷路攻略方法なるものを思い出そうとする。

ずっと昔悪友に引きずり込まれた迷路ではどうやって抜け出ただろう。呆れ返るほど出られなくて、痺れを切らした相手が迎えに来てくれたのだったっけ。

迷路なんてありふれたものだ、よくあるイベントだ、だがその完全攻略方法となると意外に知られていないんじゃないのか？ この際だから、徹底的に思考を重ね、その秘密と謎を暴いてみるか？ うまくいけば本でも書けるか？

「……んなわけ、ないか」

人は迷いたくて迷路に入るのだ。翻弄され、彷徨う自分を楽しみたくて飛び込むのだ。完全攻略方法なんて考えても、誰も読みたがらないだろう。

それでも必死に考えて、ようやく以前に読んだことのある迷路攻略方法を思い出した。左手法とか言うやつで、左手を片方の壁について迷路の中を歩いていくのだ。時間はかかるが、出られる確率が高いらしい。

もっとも、迷路にも二種類あって、この方法では出られないものもあるそうだが、それがどんな迷路なのかは知らない。この迷路がそうでないことを祈るしかない。

「…頑張れよ」

自分を励まし、際限なく続くように思える通路を歩きながら、俺は本当に朋子が玲奈を殺したんだろうかと考えていた。

もしそうだとしたら、どうして朋子が玲奈を殺さなくてならなかったのだろう。悟が玲奈に殺されたのがわかったのは、玲奈が殺された後のことだし、その恨みで、というのはあたらないうだろう。

周一郎は何かを知っているようだった。知っていて黙っているようだった。

なぜあいつは黙っているんだろう。

「にゃい」

「ルト?!」

いきなり聞こえた声に我に返った。

前からルトがとことこと歩いてくる。まるで俺の居場所を知っていたような確信に満ちた足取り、後光が射しているようだ。ありがたや猫さまルトさまさまだ。急いで小さな姿に駆け寄る。

「助かったぞ、ルト！ お前がいなくて、俺は未来永劫、ここで迷路遊びを……ん？」

ルトは駆け寄る俺を一瞬見たが、そのままくるうっと首を回して上を見上げる。

「何を見て……」

俺もそのまま首をねじ曲げて、

「どわっ」

驚いた。

それもそのはず、見上げた天井には、俺の真逆さまの像が蝙蝠のように映っていた。

「か、鏡か…」

「んや」

逆さまのルトが頷いたように見える。

天井にも緑青の石が張ってあると見えたのは、実は天井一面に巨大な鏡があるのを勘違いしていたのだ。

「なるほどねえ……こうしていけば…」

出口を見つけ、上を向きながら何とか指で迷路を辿っていく。

そうしてみると、さっき朋子が、俺の様子を逐一わかっていたのも、この仕掛けを知っていたせいに違いない

。「しかしま…なんとも……ん？」

視界に入ってきた薄暗い四角に目を留める。爪先が半分それにかかっているはずだが、妙にふわふわしていて石の感じがしない。知らなただけで、ところどころこうして材質の違うもの、たとえばスポンジみたいなものが置かれているのだろうか。

「、ひえっ」

一体何だ、と見下ろして、思わず飛び退いた。

スポンジじゃない、布でもない、ましてや黒く塗った板でもない。

俺が半歩踏み出していたのは、美しく磨き抜かれた床に唐突に口を開けた落とし穴だった。近くの壁の下には石に筋が入り、動いて擦れた跡がある。

ひょっとすると、この迷路のあちこちにこういう仕掛けがあるのだろうか、壁が動くと現れる落とし穴が。

「…？ 何だ……この臭い…」

腐ったドブ水のような、いやもっと生臭い不愉快な臭いが立ちのぼってくるのに、そろそろ落とし穴を覗き込む。予想しなくもなかったが、怖いもの見たさで目を凝らして顔を寄せたとたん、より強烈な臭いが鼻をついて目を見開く。

落とし穴の奥底、薄暗闇に、鈍く光るものがびっしりと突き立っていた。数十本、いやもっとあるかも知れない。どす黒く汚れたそれは、まじまじ見なくても針だとわかる。お約束を果たし過ぎるだろう、白骨化した屍体の成れの果てが、ぐずぐずと崩れた服を身に纏って引っ掛かっている。

「おい…」

ただの迷路じゃない、んだろう。

振り向いて迷路を見回す。

動く壁、揺らめくようなこの色彩、微妙なカーブで構築された通路。

貴婦人が愛するガラス細工のような小部屋の外見とは裏腹に、知らぬうちに人を狂わせ破滅へ追い詰めていく拷問室のような中身だ。美しい色彩に見惚れ惑い彷徨ううちに、疲れ果て感覚を失い気力を削がれて、突然現れた闇の口を避けることもできずに落下する。それとも、狂気に襲われて自ら身を投げ入れるのか、永遠の安息を求めて。

上を見上げ、そろそろ後ずさりする。ルトが促してくれ、別ルートの脱出路を見つけて歩き出す。

朋子はこれを知っていただろうか。知っていて、俺を置き去りにしたのだろうか。あの切なげな泣き顔の裏で、甘える可愛い笑顔の影で、俺がこの落とし穴に落ちてしまう可能性を考えていたのだろうか、それとも…。

ようよう迷路を這い出した俺は、部屋の入り口の左に、中央の小部屋と同じような鎖が数本下がっているのに

気づいた。一番端の一本だけ、色が違うのまで同じだ。

(ここからでも、中からでも)

この部屋の支配者は迷路の構成を変えられたのだから。あの落とし穴に沈んだ誰かは、一体何をしたのだから。ひょっとして俺と同様、ただ紛れ込んだだけか、それとも…。

「…戻るか」

ここを愛したという女城主のことを思い出し、俺は粟立った腕を撫でた。

へろへろ、ぐだぐだ、よろよろ、ねちゃねちゃと、疲労困憊の見本市をやりながら、俺は何とか部屋に戻ってきた。見たもののショックがでかくて、ベッドに倒れ込んでしばらく死んでたが、周一郎の様子も気になったし、そろそろ立ち直ろうとしていた矢先、周一郎の部屋に行っているはずのルトが飛び込んできた。

「にゃっ！」

鋭い緊迫した鳴き声に飛び起きる。

「周一郎に何かあったのか?!」

「にゃん!!」

ルトが身を翻すのに、俺はスライムになりたがる足を引きずって走った。

「周一郎?!」

部屋に飛び込んだ俺の目に、空っぽのベッドが映る。開け放たれたドア、窓、床の上に踏みつぶされたようなサングラス。

ベッドは僅かに凹んでいるものの、冷えきってしまっていて、主がいなくなってから、かなりの時間がたっていることを示していた。

今の周一郎が一人で動けるわけがなかった。気丈には見せていたが、かなり熱もあったようだし、休もうとする度に、ハイツや朋子やらに邪魔されていたのだ、かなりぐだぐだのはずだった。

「周一郎！」

無駄と知りつつ喚く。

昼過ぎの陽射しに明るく照らされた部屋の中が、寒々とした嫌なものを俺に押しつけてきていた。

## 7. 迷宮(1)

ハインツはさっきから落ち着きなく、部屋の中を歩き回っている。周一郎が攫われたことに騒ぐ俺に、マリネが機転を利かせて呼んでくれたのだ。

今、屋敷中を彼の部下が徹底的に調べている。周一郎が運び出されたルートや手段に関わると思われるあらゆるものをチェック中だ。苛立った表情を隠しもしないハインツの心中はわかる。何せ、今のところ、周一郎は、今回の事件の真相を見抜いているかもしれない、唯一の人間だ。

「……！」

「は？」

「…思い当たることはありますか、だそうです」

俺を振り向いて怒鳴るように投げつけてきたハインツのこぼえを、在独の日本人が通訳してくれた。

「…」

思い当たることがないか？ そんなこと、わかってるだろう。今度の事件の真犯人とやらが、周一郎が謎を解きつつあることを知ったら、さっさと消してしまおうと考えるのは当然だ。

けれど、俺は首を振った。その可能性を口にしたくなかった。それだけでなく、タベ一晩、周一郎が殺されてしまっているという夢にうなされている。口にしまえば、それが現実になってしまうような気がして、嫌だ。

周一郎は、昨日から姿を消したままだった。そろそろ正午を過ぎようとしているのに、みつかる気配さえない。そして、俺とハインツ、通訳の男は、集まってくる情報の遅さと少なさに苛々しながら、周一郎の部屋で朝からずっと待機している。

俺の手にはレンズがなくなったサングラスのフレームだけが残っていた。軽くて頼りなく、形も崩れてしまっているから、そんなものは役に立たないのだが。

それでも、俺の手に残っているのは、これだけだ。

(形見なんか、ごめんだぞ)

歯を食いしばったとたん、電話が鳴ってどきりとする。ハインツが受話器を取り上げ、二言三言応じてすぐに切った。暗い表情に、いい連絡ではないことは感じたが、通訳は丁寧に解説してくれた。

「屋敷の搜索ははかばかしくありません。外部の輸送路でもほとんど引っ掛かっていないようです」

淡々とした通訳に、そいつの喉をさりげなく絞めてやりたくなる。

せめてルトが居てくれたら。

だが、ルトはルトで独自に捜査に出かけているのだろう、こっちも昨日から姿を見せていない。

(風邪をこじらせてるんじゃないだろうな)

風邪どころじゃない、周一郎が生死の境に居るということを考えたくなくて、あらぬ方向へ意識を向けた。けれど、同時に奇妙な感覚もあった。起こるべきことがまだ起こっていない、もう一つ起こり足りないことがある、そんな感じだ。なのに、それが何なのか、わかりそうでわからなくて苛々する。

(だから留年するのか?)

いや、留年の二、三年がどうしたって言うんだ、くそ。どうせ、俺は血の巡りが悪いよ、ンナ口。

「滝さん…」

ガタッ、ガタッ！

ノブが回って開いたドアに、俺とハインツは同時に椅子を倒して立ち上がった。入ろうとした朋子が、俺達の剣幕にたじろいだように黙り込む。

周一郎だと思った。周一郎だと思いたかった。もちろん、周一郎じゃなかった。

絶望の溜め息とともに椅子を直して座り込むハインツ、がっくりしつつ、俺は戸口へ近寄った。

「何？」

「え…あの…」

俺はさぞかしむっつりした顔をしていたのだろう、朋子が困った顔で言いよどむ。気持ちはわかるし、朋子が直接の原因でないのは重々わかってるが、今日は我が儘嬢ちゃんの相手をしている暇はない。俺は朋子の機嫌取りをしなかった。

「きのうは…ごめんなさい」

朋子がそっと呟いた。

ああ、本当だ、本当にごめんなさいなんだぞ、何が不満か知らないが、いやそれはいろいろあるんだろうが、人をとんでもない迷路に誘い込んで、あわや殺しかけたばかりじゃない、その間に周一郎がどこかへ行方不明になってしまう事態を作った遠い原因がないわけじゃないんだぞ。

口から目から溢れそうになった罵倒をkarouじて堪える。

いや、わかってる、わかってるんだ、朋子を責めたって、どうにもならない。どうしようもない。何の意味もないんだ、そうだぞ、わかるだろう？

必死に自分に言い聞かせ、ぶっきらぼうに応じる。

「いいよ。……悪いんだけど、今取り込んでるから」

「周一郎…さんのこと？」

じわーっと彼女を部屋の外へ追い出そうとするのに気づいたのだろう、朋子は慌てたように尋ねてきた。ハインツがうさんくさそうに朋子を見る。こっちもかなり苛々している。あんまりぐだぐだやっていると、ハインツが先に切れそうだ。

「ちょっと…出よう」

朋子をそっと押し出して、後ろ手にドアを閉めた。

「ねえ…」

「そうだよ」

「みつからないの？」

「ああ」

「滝さん、心配そう」

「心配だよ、あいつ、熱があったんだぞ、あんな体で一体どこに」

声が高くなりかけて唇を噛んだ。元々死にたがる傾向があるうえに、無茶が大好きときてる。視界に入ってい

ないと、何をやらかしてるやらわからない。体調が悪いときは特にそうだ、周囲に弱みを知られたくないばかりに、自分を窮地に追い込んじゃう。

「滝さん…」

朋子が唐突に俺を呼んだ。その口調がひどく明るいのに違和感を感じて彼女を見ると、相手は妙な薄ら笑いを浮かべている。

「？」

何だ、この顔。

「あかし…」

含み笑いが零れた。無邪気な表情なのに、まるで人形が笑ったような不安感。

「周一郎のいる所、知ってるわよ？」

「…は？」

「こっち…」

「お、おい！」

影が揺れ動くような頼りなさで、突然朋子は歩き出した。ハインツに知らせるべきかと振り返った瞬間にも、見る見る遠ざかっていく。

「おい、朋子ちゃん！」

「こっちよ…」

信じられないほど早く、距離が開いていくのに泡食った。慌てて走って追いつくが、朋子の歩速はとんでもなく速い。必然こちらも急ぎ足のまま、何とかまっすぐ前を見ている朋子を覗き込む。

「朋子ちゃん、今なんて？」

「どうして、そんなに周一郎のことを心配するの？」

能面のように固まった無表情な顔で、前方一点を凝視したまま朋子が尋ねた。

「心配って……そりゃ、友達だから当然…」

「もっと違う心配」

「もっと違う…？」

朋子のことばがよくわからずに繰り返す。

「いや、俺はただ、あいつがいつも無茶ばかりするから気になって」

「どうして周一郎なの？」

「え？」

「滝さんの心配する相手がどうして周一郎なの？」

「どうしてって…」

朋子の速度についていきながら、俺は戸惑った。

「どうしてって……そりゃ……そうなるっていうか……そう……巡り逢ったっていうか……」

上の方にいる誰かのサイコロ遊びの結果かも知れないがな。

「元々俺はあいつの『遊び相手』としてバイトしてたんだし…そっからは…なんていうか……下宿の大家…？」

寄宿舎仲間……？ えーとつまり……同居してる友人……って感じ……か……？」

答えながら自分でもわからなくなる。

きっと宮田に対してこういう心配をするかと聞かれたら皆無だと答えるだろう。大学の仲間やお由宇に対しても、こういう心配はしないだろう。

俺の心配はきっと、限りなく身内を案じる気持ちに近いんじゃないだろうか。きかんぎで意地っ張りな強情で、頭はいいけど、どこか世間知らずで、それでもねっこのところは凄く純真でまっすぐで優しいことを知っている……年の離れた弟……みたいな……？」

「身内は…いないからなあ……」

この気持ちが親族もしくは家族のものかどうかと聞かれてもわからない。

首を傾げながら、いつの間にか、あの代々の城主の肖像画が掲げられている前を通り、その一番端の女性にふと目を留める。

これが例の女城主か。だが、待てよ？ この顔立ち、ごく最近見たことがあるような…。

「それを運命だと思う？」

朋子に問われて慌てて振り向く。彼女は相変わらずまっすぐ前を見たままだ。

「運命…？ うーん…」

そうかも知れない。あの時俺が下宿を放り出されていなけりゃ、朝倉家に入ることもなかっただろう。一緒に面接を受けた山根が猫嫌いじゃなく、俺じゃなく山根が採用されていたかも知れない。非情な話だが、あの時、朝倉家がごたついていなければ、今もこうして俺が周一郎と関わっていたかどうか。

あの時初めて、俺は、放っておけないという感情を自覚した、のかもしれない。

「あるかもなあ……大きな出逢いってのは…なんかどっかでそうなるようになってるって気もするな…」

「じゃ、もし、その前に、あたしと巡り逢ってたなら…」

「へ？」

朋子は先に立って湿った石段を下りていく。

「あれ？ ここは…」

この石段、ひょっとして例の碧緑の間へ行く道じゃなかったか？

「おい、まさか」

周一郎はあの迷路の中にいるのか？

「ねえ、滝さん」

ゆっくり扉を開ける。重い鉄のドアが開く音に朋子の声がかき消される。

「もしそうだったら、滝さんは、周一郎よりあたしの方を心配してくれた？」

「朋子ちゃん」

中に誘い込まれる。不安を押し返しつつ、俺はそろそろ付き従う。

入って、俺は瞬きした。昨日と何だか雰囲気が違う。水の中にいるようなきららさがなくなって。まるで深海へ沈みつつある籠の中にいるようだ。

「周一郎よりって……どういう…」

意味だ。

そう続けようとした俺は、固く虚ろな表情を浮かべて、静かに迷路を示す白い指にことばを呑んだ。

「あそこ」

ぽつりと朋子が言った。

「あの中のどこかに周一郎はいるわ」

「!!」

ことばに含まれているのは嘲笑だ。はっとして朋子を振り向くと、彼女は唇の両端を軽く上げた笑みのまま、ガラス玉のような生気のない目で俺を見返し、低く嗤った。

「パジャマだけで昨日の午後からずっとここに居るの。ここ、地下でしょ？ 夜は冷えるのよ、とても。肺炎ぐらい起こしてるかもね」

一言一言に含まれた毒の響きにぞっとする。

「君が……やったのか?!!」

「使用人に手伝わせてね」

くすくす嗤う。

「かわいそうな周一郎。連れてった時、ちょうど熱が高かったわ」

「な…」

背中を氷塊が滑り落ちていき、胃の後ろ辺りで重く沈んだ。

朋子のどこかが崩れてしまっていた。目の前にいるのは十六、七歳の娘ではなくて、その背後に重く暗い影を引きずっていた何者かで、その影がついに彼女を大口を開けて呑み込んでしまった、そんな感覚があった。

脳裏を掠めたのは、この部屋を愛したという女城主、ひょっとすると昨日ここに居る間に、朋子にその亡霊でも乗り移ってしまったのか。

「なんてことを！」

俺は身を翻した。朋子に周一郎を助ける気など全くない。とにかく一刻も早く、ここから周一郎を出してやらないと。

迷路の入り口に駆け込もうとした寸前、切ないほどの声が背中で響いた。

「滝さん…」

「……」

無言で振り返る。

朋子は不思議そうにスカートを両手で掴んで、そっと首を傾げた。

「どうして？」

「何が…」

怖いもの見たさと言うのか、目の前にある少女の姿の奥にあるものが呼びかけてくるような声に問い返す。

「あたし、滝さんが欲しかったんだもの」

「っ」

「おとうさんがいなくなって……悟さんも遠くて……ねえ、滝さん、あたし、一人だったのよ…？」

優しい声が訴える。

「滝さんに側に居て欲しかったのよ？ ……なのに、玲奈さん……邪魔するんだもん。あたしから滝さんを盗ろうとするんだもん…あたし……嫌だったの」

何か、とんでもないことを言おうとしていないか、朋子は。

「だから……止めてって叩いたの……あたしから滝さんを盗らないでって…」

「……」

それはつまり、玲奈を殺したのが、朋子だということか？ しかも、動機は……俺、か？

知らされた事実が体に固まる。

「すぐに倒れちゃったのよね、玲奈さんって…」

朋子は嘆願するように、両手を差し伸べてくる。

「行かないでよ……周一郎なんて、もうすぐ死ぬわ。周一郎がいなければ……滝さん、ここにいてくれるわよね…？」

それを…好意、と呼ぶんだろうか？

体が小刻みに震えている。

「どうして…周一郎をすぐに殺さなかった？」

干涸びた声をかろうじて絞り出した。上に居るハインツが知ったら驚くだろう、どんな芝居も真っ青の、こんなところで殺人犯人の告白、しかも切なく訴えられているのは紛れもなく、恋心、だ。

「あら…したのよ」

くすくす、と朋子は可愛らしく笑った。

「スープに毒を入れたの。でも、だめだったわ…運がいいのね。……本当は、ここで周一郎がゆっくり死んでいくのを見てよと思ってたのよ、滝さんを独り占めにした罰だから……でも」

凍てつくような表情で、突然朋子は笑うのを止めた。

「滝さんたら、巡り逢いなんて言うんだもん」

柔らかい声が続く、笑みの形を保ったまま凍りついた唇から。

「だから。無理だって教えてあげたくなったの……こんな迷路の中で、巡り逢うことなんてできないって……滝さん?!!」

その声を背中に俺は迷路に飛び込んだ。

朋子の顔に広がっている禍々しさ、それさえも呑み込んでいくような空っぽの表情を、これ以上見ていたくなかった。それは彼女の心がどれほど『人』から離れていくのか、その距離を測る目印のようだった。

目の前に緑と青が滲んで揺れる。微妙に人の心を迷わせ、狂わせるラインが、俺の進む通路を揺らめかせる。急いで上を見上げ……愕然とした。

そこに鏡はもうなかった。

## 7. 迷宮(2)

「鏡はないわ」  
冷たい朋子の声が響いた。  
はっとして、声のした方を振り仰ぐと、緑と青緑の紋様が入り交じる壁を背景に、白いワンピースを身に着けた朋子が、中空に立っていた。  
「割ってしまったの、みんな」  
言われて、俺は足下に散らばるガラス片に気づいた。  
「周一郎を入れてから割ったのよ」  
ことばの意味にぞっとして、相手を睨みつける。  
それはもう、朋子、あのさびしがりの幼い女の子ではなかった。まるで、この迷路の——この、運命の絡み合う世界の——神でもあるかのように、壁に刻まれた細く狭い階段を昇り切った場所に立ち、俺を冷ややかに見下ろしている見知らぬ女性だ。  
俺は顔を背けて歩き出した。左手を左側の壁につけて歩き出す。周一郎がどこに放置されているのか予想がつかない。へたに覗き込むだけで別の道を辿っていくと、壁の向こうに倒れているあいつを見つけられないかも知れない。  
「そうしていく気？ ずっと？」  
朋子の問いに俺は応えなかった。緑の床の上に散らばる、きらきら光るガラスの破片を踏みつけると、ジャリッと固い音がして、あるものは砕け、あるものは靴の裏に突き刺さる嫌な感触があった。  
緑青、緑薄青、揺れて、乱れて、視界を滲ませる。  
「周一郎の様子を教えてくださいませんか」  
朋子は愉しげに声を響かせた。  
「今はね、ぐったり床に寝そべってる。顔色は悪くないわ、ううん、赤いぐらい。熱のせいかな。ちょっと息苦しそう。銀色の粉が体に一杯載ってる。きれいよね、氷で飾られた王子様みたい。大きな破片でも落ちてきたのね、手首のところに傷がついてる……血も出てるわ」  
「……」  
くそっ、怪我しているのか。  
唇を噛む。俺がもう少し勘が良けりゃ、今すぐに走って行ってやれるのに。或いは聴覚や嗅覚が犬なみであれば、荒い呼吸や汗や血の匂いから居場所を察することができただろうに。俺にはそんな能力が何一つない。べったりと汗が滲む左手で、ぺたぺたと壁を当たっていくトロくさい方法しか思いつかない。  
「あら…気がついたみたい、周一郎。起き上がったわ」  
「っ」  
思わず俺は顔を振り上げた。  
脳裏に浮かんだのは、どこにあるかわからない、例の不気味な落とし穴だ。  
「意識があるのかしら。かなり朦朧としてるみたいだけど。壁にもたれて立ったわ。でも、それが精一杯みたい。かなり苦しいんだな、肩で息してる。ゆっくり壁を伝い始めたわ……ああ、そうか、連れてく前に言ったことを思い出したのね、ここは迷路だって。滝さんも一緒に入れておくわって」  
「くっ」  
やめろ。  
思わず歯を食いしばる。  
やめるんだ。  
動くな、周一郎。  
「あ、壁に血がついてる。やっぱり怪我してるみたいね。でも、気づいてるのかな……ただ歩いてるだけみたい」  
「やめろ！」  
思わず叫んだ。  
周一郎を嘲り続ける朋子の声がおぞましくて気持ち悪く、消し去ってしまいたかった。  
「やめるんだ、周一郎!!」  
同時に、重ねて、出来る限りの大声で、どこかに居るはずの周一郎に向かって叫ぶ。  
俺を捜さなくていい。出口を見つけようとしなくていい。  
俺がきつと辿り着くから。お前の側に駆け寄って、一緒にすぐには出られなくても、必ず出口へ行けるように支えるから。  
「動くな!!」  
叫んだ一瞬後の沈黙に、ずっ、と何かを引きずるような音が続いた。  
「倒れたわ」  
冷酷な朋子が呟く。  
「あ、また起き上がった。滝さんの声、聞こえていないんだな。また歩き始めているもの」  
おそらくは熱のせいだろう。一晩中、ここに放っておかれたのだ。  
歯を食いしばる。左手を壁につけたまま走り出す。俺の速度が段々上がっていくのに、朋子の声がおろおろと響いた。  
「だめよ、滝さん、走らないで、ぶつかっちゃうわよ」  
言われるまでもなかった。俺は二度脚をぶつけ、三度手をぶつけ、一度はもろに壁にぶつかりかけた。  
「滝さん、だめだって……あっ！」  
朋子の悲鳴じみた声があがり、じゃらっと鎖の音がしたかと思うと、いきなり目の前に壁が横滑りした。  
「!!」  
「だめよ滝さん、周一郎なんか、見つけさせやしない」  
俺は再び歩き出した。汗が滴り落ちてくる顔を拭く。  
早く。少しでも速く。  
あいつが完全にまいつちまう前に。  
「どうしてそう急ぐの？ 間違っているかもしれないのに」  
「かも……知れん」

息を切らせながら応じた。

「でも、俺が今、あいつにしてやれるのは、これぐらいだ」

「どうして？」

朋子の問いに構わず、角を曲がった。

一瞬遠くに、壁にもたれてかろうじて立っている周一郎の姿を見つける。

紅潮した頬に汗が伝わる。ぼんやりとした目が俺を捜して、進む方向に向けられている。よれよれになったパジャマは数カ所に仄赤い染み、ぎらつく銀の破片、乱れた髪が揺れて息を喘がせ、こちらを向いた。視線があ

って、滝さん、と干涸びた唇が動く。

そちらへ走り出そうとした瞬間、鎖を引く音がして、どしんと壁が俺と周一郎の間に割って入った。息を呑む俺の耳にずるっ、どさっという鈍い音……周一郎が倒れた音だ。

「くそおっ!!」

周一郎はかなり参っている。だが、俺がそこへ走り寄ろうとする度に、緑青の壁が、深青緑の角が行く手を遮り、俺から周一郎を遠ざけていってしまう。揺れ、霞み、陽炎のように光に波打つ緑と青の幻想的なこの世界に、俺の足音だけが虚しく響く。

「動くなよ、周一郎！」

聞こえていないと知りながら、俺は喚いた。

「その場所から動くな！」

「無駄よ、聞こえやしないわ。それに疲れ切るまで、あたしは決して滝さん達の運命を絡み合わせやしない」

朋子は笑って鎖を引き、階段から降りてきた。

今はもう無我夢中で、動く壁の間をくぐり抜けて走る俺の目に、周一郎はほんの一瞬ずつ見えた。

呼吸が次第に荒くなっていっている。瞳が次第に生気をなくしていつている。幾つもの角を曲がり、通路を駆け抜ける。次々目の前に現れる緑と青の色の波の中に、ちらっ、ちらっ、と周一郎がコマ送りのアニメーションのように見える。横顔、振り返る、振り向く、俯く、苦しげに、目を閉じる、再び顔を上げ、仰け反り、崩れる

。それは不思議な感覚だった。

ずっと以前にも、俺はこうして走っていたような気がする。遠くに見える一瞬の景色、道筋もわからずタイミングも掴めないまま、目の前を遮り続ける壁に向かって、ただひたすら突進する。

足下に口が開く。落とし穴だ。落ちれば串刺し……周一郎はこの罠に気づいているだろうか？ 走り抜け、飛び越え、そうだ、追う輝きはその時に応じていろいろなものだったが、この感覚は同じだった。

辿りつけるかどうかかわからない。だが、それは確かにそこにある。たったそれだけの確信で、移り変わる世界の中を一心に走っていく。

それは今追わなければ消えてしまう輝きで、俺はいつも、今、それを追わなくてはならないことを本能的に知っていた。

周一郎もそうだ。

出会って、なぜかいつも、こいつの本音を吐かせなくてはならないと、それだけを確認していた。全てのものを越えて、俺は周一郎の側に居てやる必要があるんだ、と思っていた。

そして、今の周一郎のように、ほんの一瞬だけ見える、『本当の』周一郎を追いかけて追いかけて……なぜだろう？ 妙な確信があった。この角を曲がればいいと。

どうしてやれば、周一郎を助けてやれるのかはわからなかった。

ただ、この角を曲がればいいのだと。

この角さえ曲がれば、こいつはもっと本音を見せてくれると。

それを巡り逢ったというのだろうか。

揺れてたゆとう青緑の石、深い緑、浅い青、薄青が視界の端に溶けていく。

暑い。汗が流れる。ひきずる左脚が重く、だるい。

「滝さん！」

朋子の声が、沸騰しかけている脳みそに飛び込んできた。

「あたしも迷路にいるのよ！ 滝さんの巡り逢いを試してみましょよ！ 周一郎とあたし、どっちが先にあなたに会うのか。ほんのちょっと曲がる角が違えば、滝さんが心配してくれるのは、周一郎じゃなくてあたしになっていたはずよ！」

朋子は迷路を熟知している。

その朋子が俺を見つけるより早く、俺が周一郎を見つけるといのは不可能なことなのだろうか。それは現実にはあり得ないことで、状況が違えば、俺と周一郎も敵同士になるしかないのだろうか。

「っ！」「滝さん！」

ふいに、進行方向真正面から、朋子の姿が現れた。ぎょっとして思わず躊躇した一瞬、じゃらっ、と鎖を引く音が響いた。

「は？」「えっ？」

馬鹿な、という表情で朋子が立ち竦んだ次の瞬間、俺と朋子の間に、この碧緑の間でも特に美しいと思われる一枚、深緑と深青に薄い緑青が入り交じり、細い金の筋が散らされた壁が滑り込んできた。同時に、左側にあった壁が前方へと滑って、別の道を開く。

とっさにそっちに飛び込んだ俺は、壁がスライドしていったはずなのに目の前に覆い被さってくる影に慌てて両手を突き出した。

「うわっ！」

それどころじゃない、足下には例の落とし穴が口を開いてくれている。

「うっ…」「へっ?!」

しかも、突き出した両手には、こともあろうに熱を帯びた温かな体が落ちてきた。視界を越えた端整な顔に、息を呑んで必死に両手を突っ張る。

「しゅ、周一、ろっ…」

たまたまなのだろうか、壁の向こうにいつの間にか周一郎が居て、壁にもたれて立っていたのだと、閃光のような思考がひらめく。

「うわ…っ」

どしん、と朋子の行く手を塞いだ壁が広げた振動に、後ろ向きに倒れ込んできた周一郎の肩を必死に抱えた。そのまま斜めに右側の壁に叩きつけられる。すぐに壁を滑って崩れそうなのを、震える脚を必死に突っ張って、

かろうじてしのいだ。

「ちょ……ま……っ」「滝……さん……？」

甘い声が今にも意識を失いそうな儚さで空に投げ上げられ、状態を理解していないのだろう、周一郎は吐息を放ちながら体の力を抜こうとする。

「よ……せ……っ」

俺が突っ張っているから何とか落ち込まずにすんでいる、というか、見る見る力が抜けてくる周一郎の体はほとんどつかい棒にもなりやしない。むしろ、重みがどんどんかかってくるばかりで、じりじりと壁に沿って滑り落ちてくる体を、斜めに踏ん張った両脚で支えるにはもう限界だった。

落ちたら剣山の上、このままでは俺も周一郎もミンチ状態、両脚ががたたっ、と大きく震え覚悟を決めた。

何とか周一郎一人でも突き飛ばせれば。

この体勢でどこまで相手を弾けるか、本当にもう心もとない限りだが、もう数センチ滑ってしまえば、後はひたすら落ちるしかなくなる。辞世の句さえ捻る暇もないままに、歯を食いしばり、抱え込んだ腕から何とか片手を周一郎の肩に当てる。

痛いんだろうな、きっと凄く痛いんだろうな、それでもとにかく一番先に心臓とか肺とかそういうところに突き刺さってくれれば、きっと少しは楽なはずだ。そうなってくれることを切に願おう。

(せえのお……)

ずるっ！

「べ!!」

祈りは虚しかった。

突然大きく滑った体、ごっつ、と派手に頭をぶつけて視界が星星に遮られると同時に、脚がくじけて気力が折れ、俺の体は周一郎を抱えたまま、頭から一気に沈んだ。

## 8.レクイエム(1)

瞬間、何を考えたかと言えば、周一郎を深く抱え込めば針は俺にしか刺さらないんじゃないかと嬉しくなり、それでも俺の体を貫いてしまえば突き刺さっちゃうんじゃないかと不安になり、こんなことならもうちょっと肉を食って筋肉をつけときゃよかったと後悔し、そうだとドイツ名物立ち食いソーセージを食っておきたかったと悔しくなり、とはいえ、そんなこんなももう俺には関係がなくなるんだとがっくりし、結局俺は抜けてるんだろうと嘆息した。

何もドイツくんだりまで来て、こんな複雑な死に方をする必要なんてなかったんだ。日本に居ても、時がくれれば『ちゃんと』死ねるものを、何を俺は死に急いでるんだか。

「どべっ!!」

瞬間、何が起こったのかわからなかった。

俺は地獄の針の山に落ちて、背中からぶっすり手痛い歓迎を受けているはずだった。だが、現実には、周一郎の体重加えた重力で冷たい石の床に激突しているだけ、体には針の一本も刺さっていない。とっさに舌を噛みか

けてひやりとする、そんな余裕まであった。

「生き……てる…?」

周一郎を抱えたまま呆然と呟く。のろのろと片手を離し、そろそろと顔を擦ってみるが、確かにこの手で触れるし、しかもたいした怪我もしていないようだ。

背中にはしっかりした石の感触がある。さっきまで大口開けて俺達を呑み込もうとしていた落とし穴は、まさに落ちる寸前、慌てて蓋されたように閉じてしまったらしい。

「は……あ、よかつ…! 周一郎!」

情けなくも全身がたがた震えながら息をつき、薄暗い天井めがけて感謝を呟こうとした矢先、腕の中の物体が何かを思い出す。急いで体を起こす。床に突いた掌の下にざらつくガラスの感触、ちくちくと痛みが走ったが、そんなことはどうでもいい。

「周一郎! おい?! 生きてるか?!」

くったりと力が入っていない相手の体を揺さぶると、息を吐いた周一郎がうっすら目を開けた。

「たき…さん…」

「じっとしてると言っただろうが! 動く奴があるか!」

怒鳴りつけたのは、俺自身も怖かったからだとわかってる。けど、いいだろう、今ぐらい八つ当たりさせてくれ、俺達は絶体絶命の危機から奇跡の生還を成し遂げたのだ。ぱすぱすと少々手荒く、周一郎のパジャマと髪

についていたガラスの粉を払い落とす。よく見れば、周一郎には小さな傷があちこちついていて、薄く血も滲んでいる。それでも、周一郎は痛そうな顔一つしない。まるで、心がどこかに吹っ飛んでいるように無反応だ。

「だ、誰なの?!」

突然、ヒステリックな朋子の声が、碧緑の間一杯に響き渡った。

「誰が邪魔したの?!」

「そうか。」

俺は思わず目を見開いた。

「そうだと、朋子も俺も周一郎も、この迷路の『中』に居たのだ。迷路を動かす鎖は迷路の『外』にある。なら、誰が一体鎖を引いたんだ?」

「っ!」

ふいに腕の中で、周一郎が跳ね上がるように身を強張らせた。

「だめ…だ…っ……、マリーネ…っ」

吐くような叫びは掠れている。俺を見ている、いや、俺の方を向っているだけで、その実、俺を通り越して遠い何かを見つめている目を、俺はよく知っている。

闇を見つめる目。

ルトを通して、人の仮面の裏側を見つめている目だ、だが。

「マリーネ?」

俺は首を傾げた。

「マリーネって、あの、おさげの、マリーネだよな?」

「え……あ…あなた…」

朋子の怯えた声が俺の思考を断ち切った。

「何……何するのよ……いや…っ、いやあああーっ!!」

耳を覆いたくなるような切羽詰まった悲鳴、続いてどすっ、と何か重いものが落ちてどこかに引っ掛かったような音が聞こえた。ぎゅ、だかぐう、だか、表現し難い呻きはすぐに消え、ばしゃばしゃと水音が響き出す。

「おい…」

それが何を意味するか、ついさっきまで自分の未来に重なっていた情景に、朋子を差し替えるのはそれほど難しくなかったが、差し替えた瞬間に音をたてて血の気が引いていくのがわかった。固まってしまった俺の腕から身を起こして、周一郎がもう一度叫ぶ。

「マリーネ!!」

「にゃあん」

まさかのルトの鳴き声が意外に近い場所から返ってきた。

「マリーネって……まさか…」

朋子が陥った状況は想像できる。落とし穴、針の突き立つ死の空間、水道も水路もないはずのこの部屋になぜ水音が聞こえ出したのかも。

だが、そこに『マリーネ』が関わっていることが、どうしても、どうしても理解できない。

ゆるゆると周一郎は振り向いた。いつもは静かな落ち着きをたたえて澄んでいる瞳が、熱に浮かされ、コンクリートに零れ落ちた油のような澱みを宿してぎらついている。体はまだ熱かった。下がり切らない熱に唇を震

わせながら、周一郎は呻いた。

「彼女…なんです…」

「は?」

「彼女……だった、んです…」

喘ぐ呼吸に口調が乱れた。

「何が？」

俺は呑み込めないまま尋ねた。じれったそうに周一郎が色を失って乾燥した唇を噛み、さすがに苦しくなったのか、少し目を閉じる。額に滲んだ汗が流れ落ち、瞼の色が蒼白く見えた。

「周一……！」

俺のことは、あの、ごりごりと壁が擦れる音に消された。ぎしっ、ぎしっ、と緩慢な動きで目の前の壁が左右に割れていく。緑色の光の乱反射に混じって、青い色がのたうち、揺らめき、かき回され、しずしずと壁が開いていく。

正面に、あの小部屋があった。そこから離れたつもりだったのだが、いつの間にか、小部屋の前まで引き戻されていたらしい。

美しい貴婦人の肖像、部屋の隅に垂れ下がる鎖、そして、青緑色と碧の絡まるような色合いに輝く石の椅子に一人の少女、薄茶のおさげ髪を解きほぐして、肩に豊かに広げた娘。

「Warum?…」

ぽかんと口を開いている俺の前、周一郎が弱々しく詰る声で呼びかけた。

少女は物寂しそうな笑みを浮かべ、軽く頷く。

「Herr Asakura…」

「にゃあっ」

少女の足下に座っていた青灰色の塊が、いきなりこちらを振り返り、ぱっと身を翻して主人に元に駆け戻ってきた。周一郎の腕から体、しなやかな動きで全身擦りつけて周一郎に甘える。

そのルトにそっと片手を載せて動きを制した周一郎は、肩を支える俺の手を振り払い、よろめきながら立ち上がった。俺も慌てて立ち上がり、今にも倒れてきそうな周一郎の後ろに立つ。

「……Warum？」

再びの周一郎の問いかけに、マリーネは微かに頷き、微笑った。

その時、俺は初めてマリーネと、後ろの女城主の肖像画の驚くほどの相似に気づいた。おさげを解いて肩に薄茶の髪を波打たせたところ、こちらを見返す強い意思力をたたえた青い目なんかは、肖像画が抜け出してきただけで済んだ。

どうして俺は今まで気づかなかったんだろう。あの子ども子どもしたおさげ髪に惑わされたのか。

「……」

マリーネが早口にドイツ語で何かを言った。

はっとしたように周一郎が前へ一歩、踏み出しかけて体をふらつかせる。その一瞬に、マリーネは椅子から立ち上がり、部屋の隅へ歩いて行って、一本だけ色の違う鎖に手をかけた。

「Nein！」

はっと息を呑んだ周一郎がどこか悲鳴じみた声で叫ぶと同時に、マリーネの白い手が思い切り鎖を引くのが見えた。ごりごりと鈍い音、きしるような音が碧緑の間に満ちる。ずるずるっ、どしんっ、と俺達とマリーネの間を再び壁が分ち、ガタンッと音が聞こえたかと思うと、小部屋の中から微かな悲鳴が響いた。数瞬後、どずっ、と胸の悪くなる不愉快な音、かき消すように引き絞る絶叫が耳を襲う。

「げっ」

何、何だ、おいまさか、ひょっとして。

頭の上から落ちて来た氷柱に貫かれたような気分の俺に、周一郎が目の前を閉ざした美しい碧の石の壁を見つめながら、凍てついた声で呟いた。

「落とし穴があったんです、あの小部屋の真下にも」

ふらりと体を揺らめかせ、すぐ側の壁にすがりつく。振り返った顔は無表情の極みだ。

「城主が追い詰められた時の…自害用に……っ」

「おいっ！」

手を伸ばすより一瞬早く、周一郎は無抵抗に壁を伝って頼れた。はっ、はっ、と忙しく荒い呼吸、俺を見返した目が見る見る朦朧と焦点を失っていく。掴んだ手足は竦むほど熱かった。しかも、まだ熱を上げていこうとするように、ぶるっ、と何度も体を震わせる。

まるで、目に見えない何かの炎に周一郎自身が焼き尽くされていくようだ。

ぞっとした。

「ルトっ！」

喚いた。

「道を教えろ！ 周一郎をこっから連れ出すんだ！」

「にゃっ！」

わかった、と言いたげに青灰色の猫は身を翻した。俺が周一郎を背負うのを待って、床石に軽い足音を響かせ始める。鏡がなくなったせい、ひょっとすると、二人もの人間の血を吸ったせいだろうか、緑の床石は暗く陰惨な色を包み込んでいく。

俺は、ルトの仄白い反射を見失うまいと必死に走った。さっき無茶をやったせいか、未だに脚ががくがく震え、全治しないままに捻りっぱなしの左足首がじくじくと熱を持ち出している。

だが、それより背中の中の周一郎ははるかに熱っぽかった。四十度を越えていなければもうけもの、なにせ、日本では、北海道ぐらいの気候のドイツの夜、冷えて凍てつく地下室にパジャマ一枚で放り出されていたのだ。おまけに、迷路の中を半分意識のないままに彷徨い続けている。倒れないほうがおかしかった。

「ええい、このくそ迷路！」

俺は乱反射するルトの青灰色の影を追いながら喚いた。角に潜む影、口を開ける落とし穴。頼むから俺の前に現れてくれるなよ。祈りながら走り続ける。曲がる角、角、角、通路が歪む。ルトの姿が緑と青の色彩に溶け入りそう。

「ここを出たらぶっちらばってやるからな!!」

誰をだ？ 皆死んでしまった。いや、周一郎までそっちに連れていくなよ、女城主。そこは右、次は左だ。ルトは？ ああ、そこにいる。

「ちょっとは……人間の…速度を考え…」

「滝さん…」

ルトに懇願しかけた矢先、ぐいと背中で手を突っ張られてぎょっとした。

「歩け…ます」

周一郎の掠れた声にかつと頭が熱くなった。  
歩けます、が聞いて呆れる。どこらあたりが『歩ける』って言うんだ？ みみずの方がまだ早い。  
「どこがだ！」  
「降ろして…下さ…い」  
「うっさい！」  
「大…丈夫…ですから」  
おんぶされてて息を切らしてるくせに、大丈夫もないもんだ。俺は喘いで立ち止まった。どうせ飛び込むなら昼飯を食ってから朋子についてくりゃ良かった。  
「滝さん」  
「お前、ごたごたうるせえんだよ！」  
がうっ、とライオンさながらに喚いてやった。  
「病人が健康な人間に意見すんなっ！ 死にたいのか！」  
「でも…滝さんが…」  
ぐったりと周一郎は頭を落としたようだった。かなり苦しいのだろう。  
「俺がどうしたって?!」  
不安になって大声で尋ねた。  
冗談じゃないぞ、俺は医者じゃないし、坊主でもない。こんなところでどうにかなっちゃうなよ。  
「ぼくが……ここに……いた……から……」  
「いたからどうしたって？」  
「滝…さ……んは……迷路……に……迷……て…」  
次第に微かになってくる周一郎の声にパニックになった。  
「おいこらっ、周一郎！ 周一郎っ！ ええいくそっ！」  
ルトを追い越さんばかりの勢いで駆ける。ルトが軽く跳ねて尻尾を立て、速度を上げる。  
「俺は迷うのが好きなんだ！ 遊園地の迷路なんか大好きだ、あそこで暮らしたいと常々思ってたぐらいなんだ、ほんとだぞ！」  
人間為せば成る。喚きながら走れるとは思わなかった。今ならオリンピック強化選手でいけるかもしれない。  
「人探し好きだし、厄介事好きだし、追っかけっこが好きなのは十分知ってるよな?!」  
ふ、と微かに周一郎は背中で笑ったようだった。零れる眩き、けれどことばになっていない。乱れる呼吸に視界が揺れてくる。  
「ルトっ！ もっと…楽な道は、ないのかっ！」  
んなもん、あるかよ、と言いたげにルトが一瞬こっちを振り返る。寝かせた耳に周囲の緑が跳ねる。角、右、角、右、直線、ダッシュ！  
「っ！」  
ふいに視界が開け、目の前にぼさりと突っ立っているハインツの姿があった。  
(抜けた！)  
「と、わっ、のけっ、のけよっ！」  
勢いのついた体は止まらない。ハインツが起こりかけている事態に気づいて半身体を捻るより早く、俺はもろに相手に突っ込んでいた。  
「ぎゃわっ!!」 「Nein!!」  
ハインツと後ろに居た警官ほとんどをなぎ倒し乗り倒し、俺はなおも前にのめった。背中中の周一郎は幸いにもしっかり押さえつけていたのだが、警官の最後の一人が運動神経の良すぎる奴で、俺の突進を見事に避けた。  
「ば、かあああああっ！」  
真正面に近づく床に、俺はただ、叫んだ。

## 8.レクイエム(2)

周一郎は、一週間近く、病院のベッドに埋まっていた。  
一時は絶対安静、面会謝絶の重症者扱い、ドイツ人の医者は、なぜこんな子どもにこれほど無茶をさせたと俺に食ってかかり、させたくてさせたんじゃない事情ってもんを聞けよこら、と俺もやり返した。  
可哀想だったのは、間に立った通訳の男で、双方とも頭にきている上はかなり汚いことばを乱発したのを、プロ意識に燃えている彼はわかりにくい罵詈雑言の意味するところを一々双方に確かめ、出来る限り平和的に、ただし確実にお互いの意志を伝えようとしてくれた。結果、当然ながら、正確に双方の意志が伝われば伝わるほど、俺達は口を極め顔を歪めてののしりあう羽目になった。最後には通訳なしでやりあえるまでになってしまい、俺は悪口というものは万国共通のものなんだろうかと考えたほどだ。  
面会謝絶が解かれた次の日、俺は周一郎の病室を訪れた。周一郎がいない間、俺の面倒を見てくれていたハインツも一緒だった。  
「はい？」  
「入るぞ」  
ノックをして、まあまあ元気そうな声に安心してドアを開ける。  
「滝さん」  
半身起こした周一郎は俺の顔を見ると、ほっとしたように笑いかけて来た。  
「ほら」  
「すみません」  
頼まれていた物、新しいサングラスを渡すと、周一郎は早速慣れた動作でかけ、ハインツを見つめた。  
「Herr Asakura……Sprechen Sie bitte.」  
「Ja. 滝さん、ちょっと待っててくれますか？ ハインツが今回の事件についての説明を欲しがっているんです」  
「あ、うん」  
いつも通りの冷静さで、淡々とハインツに話し始める周一郎を横目に、一体何をどう話しているんだろうと思う。敏人殺し、玲奈殺し、悟殺し、朋子殺し（行方不明）、マリーネ自殺（行方不明）、立て続けに起こった殺人事件は、被害者が敏人、玲奈、悟、朋子で、加害者が殺人教唆の敏人も含めて玲奈に朋子にマリーネ、殺しに関わっていない人間の方が少ないという無茶苦茶さだ。  
ハインツは難しい顔で周一郎の説明を聞いていたが、時々それは、と言いたげな表情で口を挟んでいる。だが、周一郎の落ち着き払った口調にじりじりと説得され、やがて渋々頷く、そういうことが数回繰り返された。やがて、ハインツは席を立った。納得も同意もしていないが、提示された解答しか見つからないのが悔しい、そういう顔だ。禿げかけた頭をのろのろと振り、彼は周一郎に握手を求めた。  
「Auf Wiedersehen bis später.」  
「Vielen Dank für Ihre freundliche Hilfe.」  
「Gute Besserung.」  
「Danke schön.」  
周一郎は儀礼的に微笑してハインツの手を握った。ハインツは手を離し、俺の方に向かって手を差し出してきた。  
「Schöne Reise.」  
「ア、アウフ・ヴィーダーゼーエン」  
慌てて立ち上がりて手を握り返し、ハインツが病室を出て行くのを見送ってから、周一郎を振り返る。  
「……どう話したんだ？」  
「……マリーネの事を除いては、全部」  
「除いて？」  
周一郎は吐息をつき、ゆっくりと寝そべった。天井を見上げながら、  
「謎解きをしましょうか？」  
「ああ」  
「警察向けがいいですか？」  
「……俺向けだとどうなるんだ？」  
ふう、と周一郎は溜め息をついた。  
「まず、敏人殺しからいきましょう」  
どうやら一つ一つ解説してくれるつもりらしい。  
部屋の隅にあった椅子を持ち出して、ベッドの側に陣取った。  
「敏人は、ある理由からマリーネに恨まれていました。敏人は書斎から出て来たところで彼女に会い、マリーネは絶好の機会を得たんでしょう。おそらくほとんどためらいなく、そんなことなど考えてもいなかった敏人を殺すことができたと思います。彼女は悟が玲奈の手で殺されていたのを知らなかった。だから、悟の『黒づくめの服』という印象を利用して、わざと滝さんや朋子に見つかるように逃げたんです」  
敏人がマリーネに恨まれていた？ けれど、マリーネは敏人に雇われていたんじゃないのか。  
だが、俺が尋ねる前に、周一郎はことばを続ける。  
「次の玲奈殺しは、滝さんが聞いた通り朋子です。『黒づくめの服』は、単に敏人殺しにひっかけようとしたんでしょ」  
「でも、どうしてだ？ それにそんなことをしたら、悟に嫌疑がかかるじゃないか」  
今度は何とか口を挟む。  
「悟への嫌疑は朋子も頭にはなかったでしょう。……朋子は、悟が死んだことを知っていたんです。たぶん、僕らが知るより、ずっと早く」  
「え…え？」  
俺は混乱した。  
「じゃ、じゃあ、その恨みで」  
「違います。朋子は玲奈が殺したとは知らなかったでしょう。けれども、おそらくは、悟の死を僕らがここへ来た数日後には知っていた可能性があります。……その頃から、朋子の心は軌道を外れ出した……ただ一人の人の手に入れるために」

「？」

ただ一人の人？ 悟以外に？

俺がよほどわけのわからない顔をしていたのだろう、周一郎はちらりと俺を横目でみやり、何とも面映い顔をした。まるで商店街を巨大な作り物のきりんの頭を被って歩いている男を見るような、どうしたもんだかなあこいつは、そういう顔、俺がいつまでたっても要領を得ないのに諦めた様子で、

「あなたです、滝さん」

「は？」

俺？

脳裏に甦ったのは、朋子のすぎるような視線。

「あなたの関心を得たいばかりに、泣いてみせたり、じゃれてみたり……怒ってみたり、当たり散らしてみたり……」

何だか微妙に曖昧な口調で呟く。

「……だけど、あなたは玲奈にばかり目を止めている。朋子の心の糸は切れてしまって、どんな手段を使ってでもあなたを手に入れたいと思うようになってしまったんでしょ……だから、玲奈を殺した」

「いや、だけど、……」

俺が？ 俺が？

頭の中に飛び交う疑問符を必死に虫取り網で追いかける。

「悟は、麻薬のために金が欲しかった玲奈によって殺された、それは既に話しましたね。……あの迷路で、朋子を殺したのはマリーネです。朋子、敏人以外であの迷路の仕掛けを知っていたのはマリーネだけでしたし、彼女は朋子も、敏人と同じ理由で憎んでいました」

「何でそんなこと」

「……マリーネの書き置きがありました」

あったのかよ！ ってか、つまり、それが謎解きの種明かしだよ。

突っ込みかけた俺は、周一郎の苦しそうな顔に思わず口を噤む。

「マリーネが自殺したのは……全てが終わったせいです」

瞳はサングラスを通してわかるほど虚ろで、顔の中央にぽっかりと開いた二つの穴のようだ。

「朋子ちゃん、が……お前を狙ったのは」

「……」

周一郎は目を閉じた。一番口にしたくないことを尋ねられたような顔だ。

「……僕、ばかりを、滝さんが、気にしていたからでしょ」

「……」

お前なんかいなくなればいい、消えてしまえ死んでしまえ。

遠く離れた日本で、何度同じことばを周一郎は聞いてきたことか。それをまた、このドイツで聞く、周一郎の出生も性格も何も知らない、しかも一度は結婚して共に暮らそうとしていた少女から。

隠そうとしても逃げようとしても、見えないふりをして聴こえないふりをして、繰り返し繰り返し、世界は周一郎に突きつける、お前など生きている価値はないんだ、と。

『Nein!』

それでも、自殺しようとするマリーネに向かって叫んだ周一郎のあの声は、そういう世界への否定だったんじゃないか。

「……そうか」

突然気づいた、出立前にお由宇と話したやりとりの意味に。周一郎が自分に関わる周囲を気にした、そっちの方が意味があるという、あのことば。

ドイツへ俺を誘ったように、それでも周一郎は、そういう自分を抱えてこれからも生きていこう、そう考えたということじゃなかったのか。

「うーむ」

「……あの迷路」

あれやこれやと埒もないことを思いめぐらせている俺に、掠れた声が届いた。

「運命のようですね」

「え？」

運命。奇しくも朋子が同じことばを使っていた。

「誰がどこで巡り逢うかわからない。……もし、僕が滝さんと出会っていなかったら」

周一郎はこちらに顔を向けた。

「朋子がもし、僕より先に、滝さんに巡り逢っていたら……」

そっくり同じ思考、この二人は、ああそうだ、確かにとんでもなくよく似ている。

「朋子の役回りは……僕だったのかも知れない」

微かに零れる儂げな笑み、聞きようによっては周一郎が初めて俺との友情を大事にしてくれていると告白してくれたようなもんだらうが、それよりも。

「違う」

巡り逢う時がずれ込んでいたなら、俺は朋子の側に居て、周一郎を敵としたらうか。可能性としてはあり得るだろう。だが。

「お前はお前だ」

俺は首を振った。

そんなものはあり得ない。

人は誰かと同じ存在じゃない。たとえ同じ場所にはめ込まれたところで、朋子はきっと、俺を助けるために迷路で熱のある体を押し回ろうとしなかつたらうし、俺が玲奈に魅かれているかも知れないからと思って何も話さなかつたり、自分が殺されるかもしれない危険のある場所にじっと堪えて居座ってはいなかつたらう。

。「朋子ちゃんは結局朋子ちゃんだったさ」

「……」

周一郎は応えずにっこりと、珍しく素直な笑みを返した。サングラスに透ける陽射しが、いつも重く沈む目を透かしている。

その目はひどく不思議な優しい表情を浮かべ、ゆっくりと瞬きした。

「眠そうだな」

重い気持ちを振り払って笑いかける。

「変ですね」

呟くように返事が戻る。

「何が」

「あなたの側にいると、何となくすぐ眠くなって……すみません」

心わあう、と小さなあくびをして、周一郎は謝った。その顔にやっぱり一瞬、朋子の顔が重なる。

できることなら、朋子にも、こんな安心しきった顔をさせてやればよかったけれど。

胸に微かな傷みを感じる。

俺の手は、ほんと小さいんだ、ごめんよ。

「まだ全快してないんだ、寝てろよ」

「…」

無言で頷いて大人しく目を閉じる周一郎は、今は年相応の顔だ。それほど待つまでもなくすうすうと軽い寝息が聞こえ出すのに、サングラスをはずしてやり、窓のカーテンを閉めようと立ち上がる。

窓の外、光煌めく緑の光景に、もう一つの緑の空間、地下に穿たれた迷路のことを思い出す。

あの迷路を、女城主は一体何のために作ったのだろう。

迷う人々を眺めて嘲笑うためか。それとも、自分の手で容易く破滅に追いやることのできる命への万能感を味わうためか。

「そうじゃ…ねえよな」

迷路の中央で彼女はじっと待っていたのだろう、数々の迷いと苦難を乗り越え、それでも確かに自分の元に辿り着いてくれる誰かを。なぜなら、彼女こそが、迷路の中に閉じ込められていたはずだ、不信と絶望という迷路の中に。

出逢いたかった。

自分の身も心も任せられる、満幅の信頼を捧げられる相手に。

方法は間違っていたかも知れないけれど、きっと同じようなことなら、俺達もやっているはずだ、日常生活という迷路の中で。壁を動かして道を塞いだり、落とし穴へ導いたりして、それでも願っている、どうか乗り越えて、近づいて来て欲しい、この追い詰められて竦んだ心の内側に、と。

「……そんなことしなくても、よかったんだ」

さみしいんだ、側に居て。

そう言えなくて、人はどれほど相手を傷つけるんだろう。

「……あ」

振り向いて周一郎の寝顔を眺め、そういえばマリーネが敏人親子を殺すほど恨んでいた理由というのを聞き損ねた、と思い出した。

けれど、周一郎はようやく得た安眠に、心底気持ち良さそうに浸っていて、もちろん俺は起こす気はなかった。

。

## 9.エンディング

船は滑るようにラインの川面を進んで行く。風が少し冷たい。兩岸に次々広がる美しい自然と古城や廃墟に、船の中から歓声とも溜め息ともつかぬものがあがる。

「凄いな」

見上げた蒼く澄んだ空、その空を映して青く輝くライン川、兩岸の幾重もの緑が重なり合い、あの迷路を思い出させる。

ライン下り。

完全な『ライン下り』は、スイス国境のバーゼルから河口に当たるオランダのロッテルダムまでの1300kmだが、俺と周一郎は、その中でも特に美しい、賊に『ロマンティック・ライン・コース』と呼ばれるマインツからコブレンツに至る、約90kmのライン下りを楽しんでた。

一つ、また一つと現れる城に、玲奈の面影が重なり、朋子の顔が過っていく。既にこの世にいない人々の思い出が、この風景には妙に合う。

河の中央に立つプファルツ城塞を過ぎると、隣に居た周一郎が一枚の便箋を封筒から取り出した。

「何だ？」

「マリーネの書き置きです。死ぬ寸前、僕へ書き残していることがあるからと言っていました。僕なら、全てを理解してくれるだろうと」

どこか苦しげな声は淡々と事実を伝えてくる。

「そういえば、よくハインツは納得したな、マリーネの事を省いての説明で」

「…納得してはいないでしょう」

さらりと周一郎は応じた。

「でも、朋子は『事故』で落とし穴に落ちてしまったのですし、敏人殺しは今となっては『迷宮入り』です」

「『迷宮入り』な。確かに『迷宮』に入っちゃった」

「マリーネの行方不明も、よくあることで片付くでしょうしね」

これと言う身寄りもなかったようですし。

というより、身寄りを明らかにしていなかったのだろう、と周一郎は付け加えた。

「何で書いてあるんだ？」

「……マリーネはレモタント・ローゼ城の直系のようです。父母が継ぐはずだった城を、事業の失敗につけ込まれて海部に奪われ、酷く哀しい想いをした、とあります。その後、父母は事故で死んだことになっているが、私はそうは思わない、とも」

周一郎の声が静かに手紙の内容を読み上げる。

「……父の事業の失敗は海部が仕組んだものだったことを知っている。それに気づいた父が法的に闘おうとしていた矢先の事故など都合が良すぎる。私は父母の仇を討つ。そのためにこそ、素性を隠してここへ入り込んだのだから」

おさげ髪の少女の無邪気な笑みの後ろに何があったのか、俺が見ていなかった部分、周一郎が見つめていた部分の暗さにぞくりとした。

マリーネはローレイを口ずさみ、明るい笑顔で城の中で働いていた。本当ならば、自分こそがこの城でかきずかれるべき存在だと思いながら。

いつか、必ず思い知らせてやる。

そんな想いなぞ、俺は全く気づかなかった。

その声を、表情を、周一郎はいつから見つめていたのだろう。

「あなたがこれを読む頃には、全てが終わっているだろう……Schöne Rise.」

「しゅーね、らいぜ？」

どういう意味だった、と首を傾げると、周一郎は遠い視線を彼方に向けた。

「よい旅を」

「よい旅、か」

この手紙をハインツに見せなかったのは、マリーネの事を知らせなかったのは、どうしてなんだ、そう聞きたかったが、虚ろな表情で手紙を裂き始める周一郎の横顔が、余りにも寂しそうで聞けなかった。

指先ほどになるまで細かく千切って両手を開くと、紙片がばらばらと季節外れの雪のように風に舞って散っていく。気づいた旅行客の数人が指差したが、誰も、それがどこから飛んできたものかはわからなかったようで、騒ぎは一部の客のみで済んだ。

船は進む。

緩やかに蛇行するライン河、それでも日本の川に比べればうんと幅広い、その流れの中を、漂い流される笹舟のように。

運命という河を、俺達もまた、流されていく。

身じろぎした周一郎が俺を見やり、低い声で促した。

「ローレイの岩です」

「へえ…ほんとにあるのか」

ごつごつした岩が、まとわりつく緑を裳裾のように絡ませた鮮やかな姿でそそりたっていた。船内にローレイの曲が流れ、それに合わせて、人々の間から『ローレイ』の歌声が溢れ始める。

その声に、マリーネの高く澄んだ声がふと混じったような気がして、俺は船内を見回した。

マリーネ、君は本当にそれでよかったのか。

本当は、城とか父母のこととから離れて、もっと自由に生きたかったんじゃないなかったのか。

もちろん、マリーネの姿はない、幻にさえ現れていない。

俺は溜め息をついて、ローレイの岩を見つめた。

「人を惑わす魔女、か…」

眩きは輝く陽射しに溶ける。

春へと向かうドイツは、限りなく美しかった。

おわり